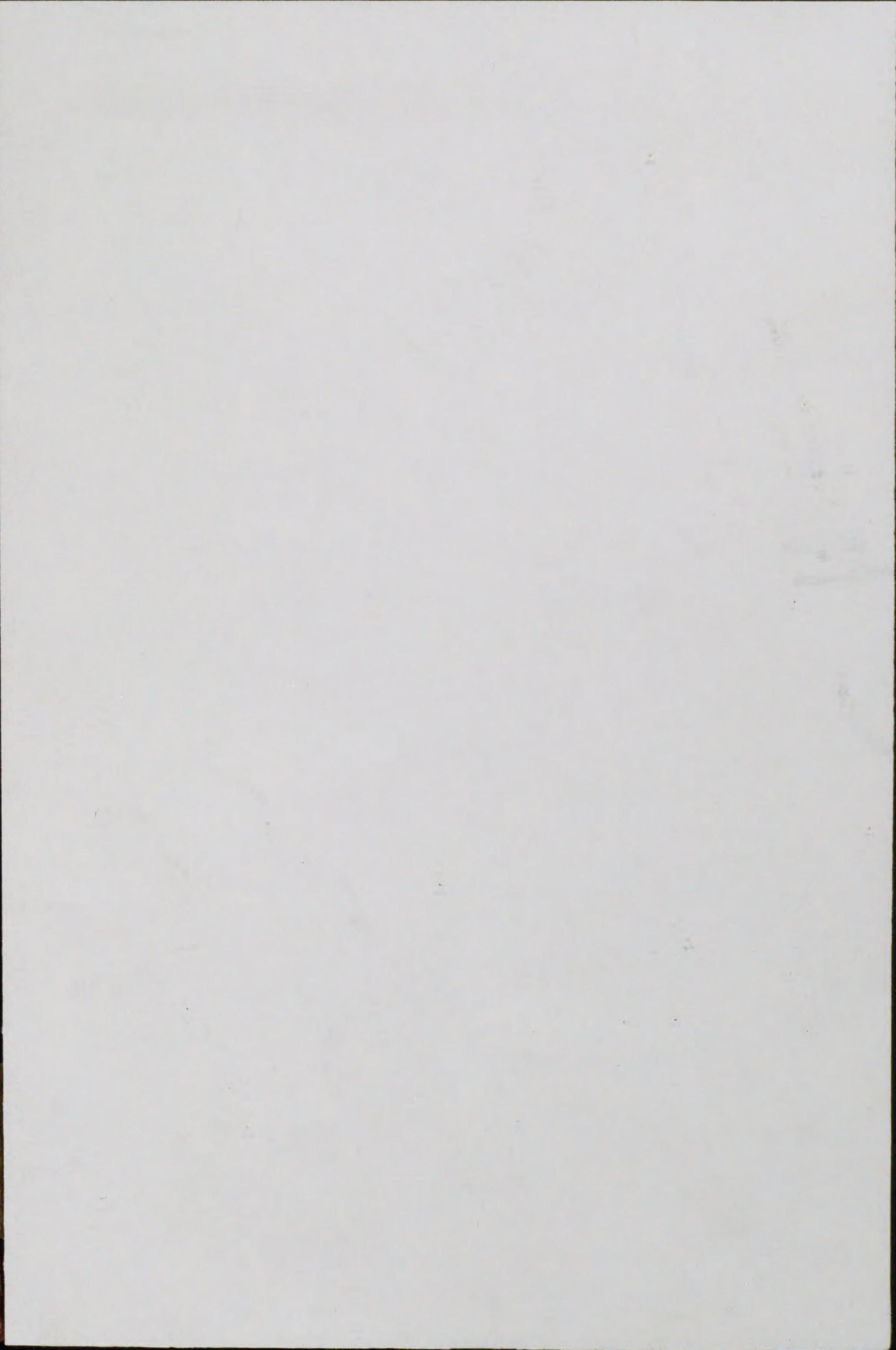
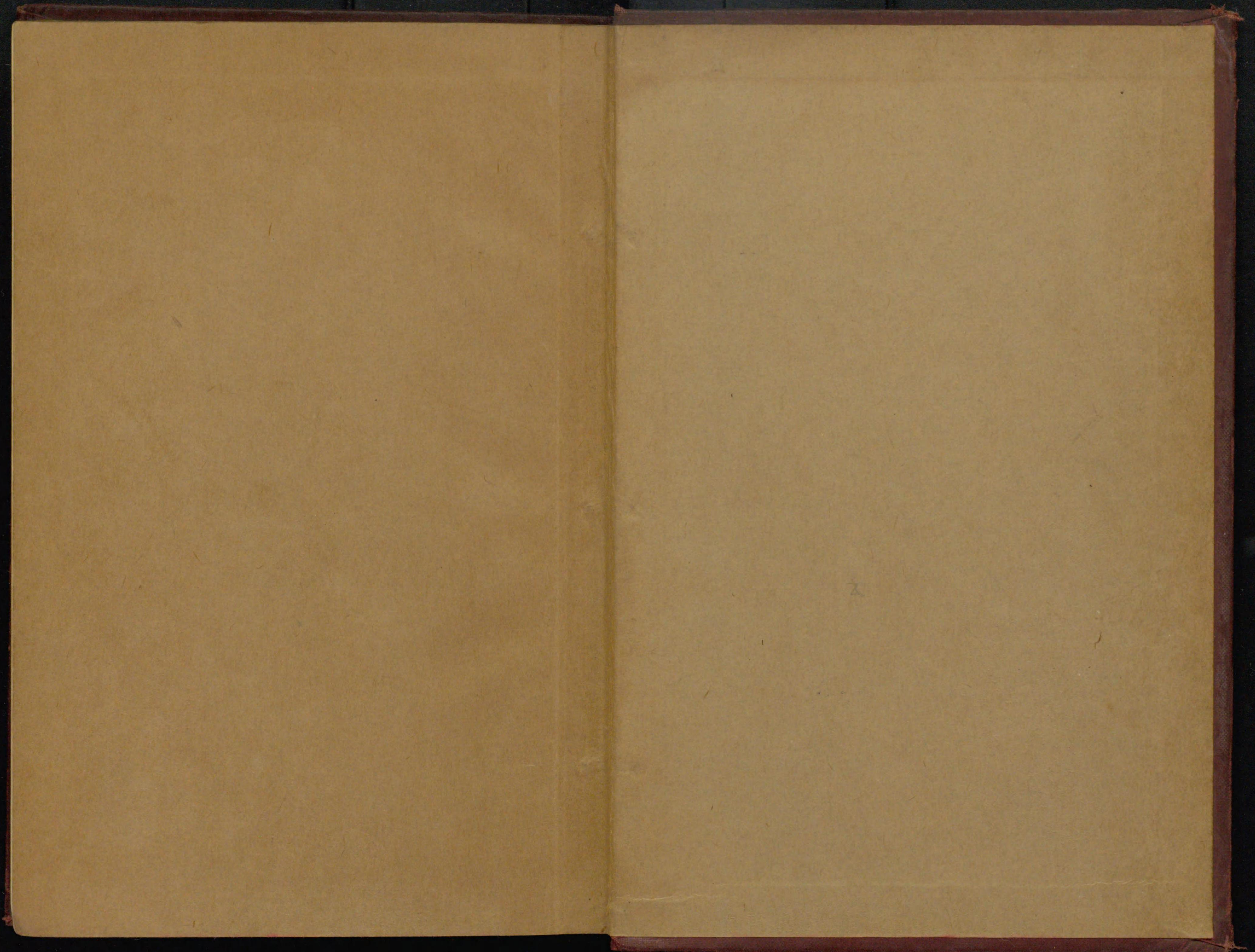


609-410



1200501534036



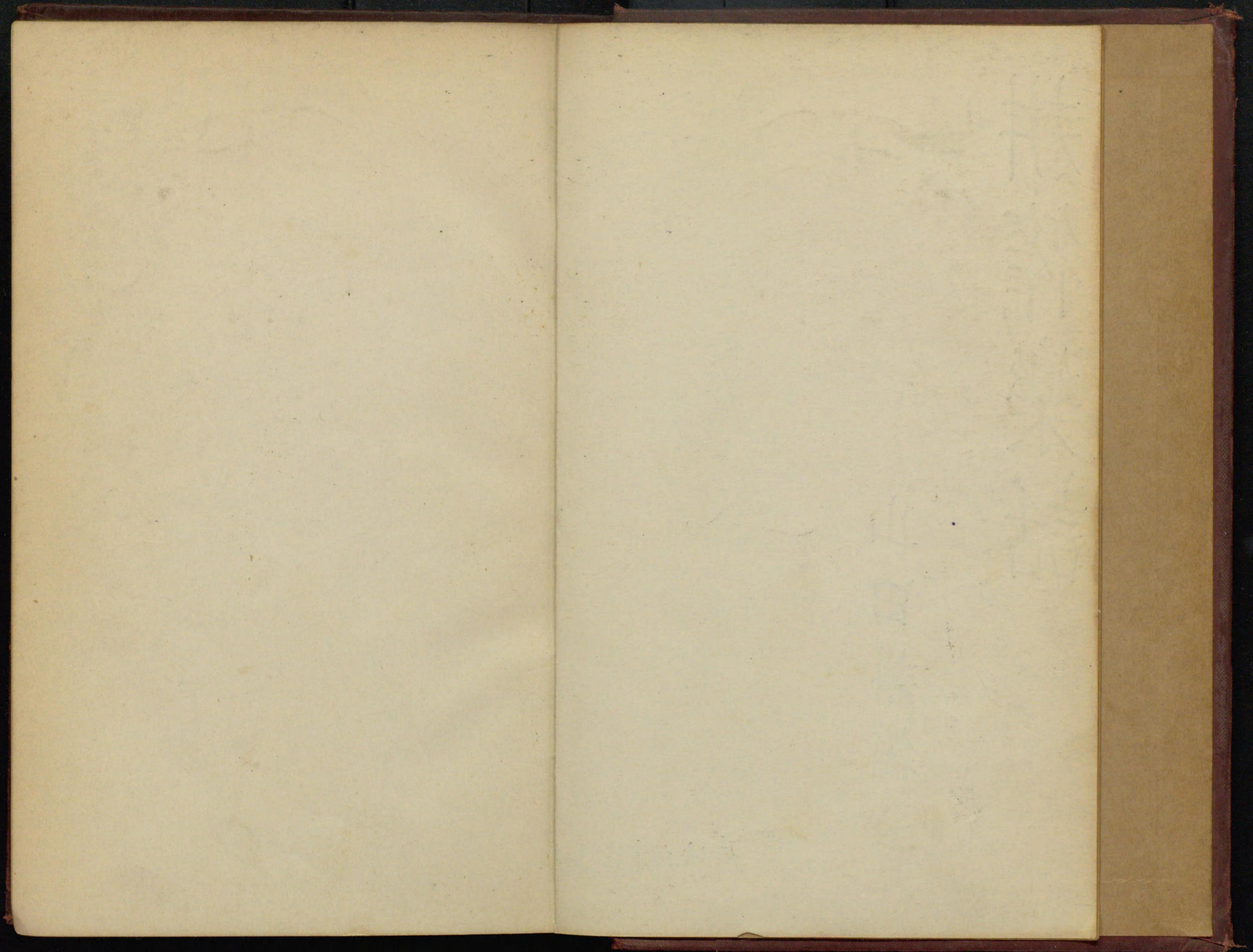


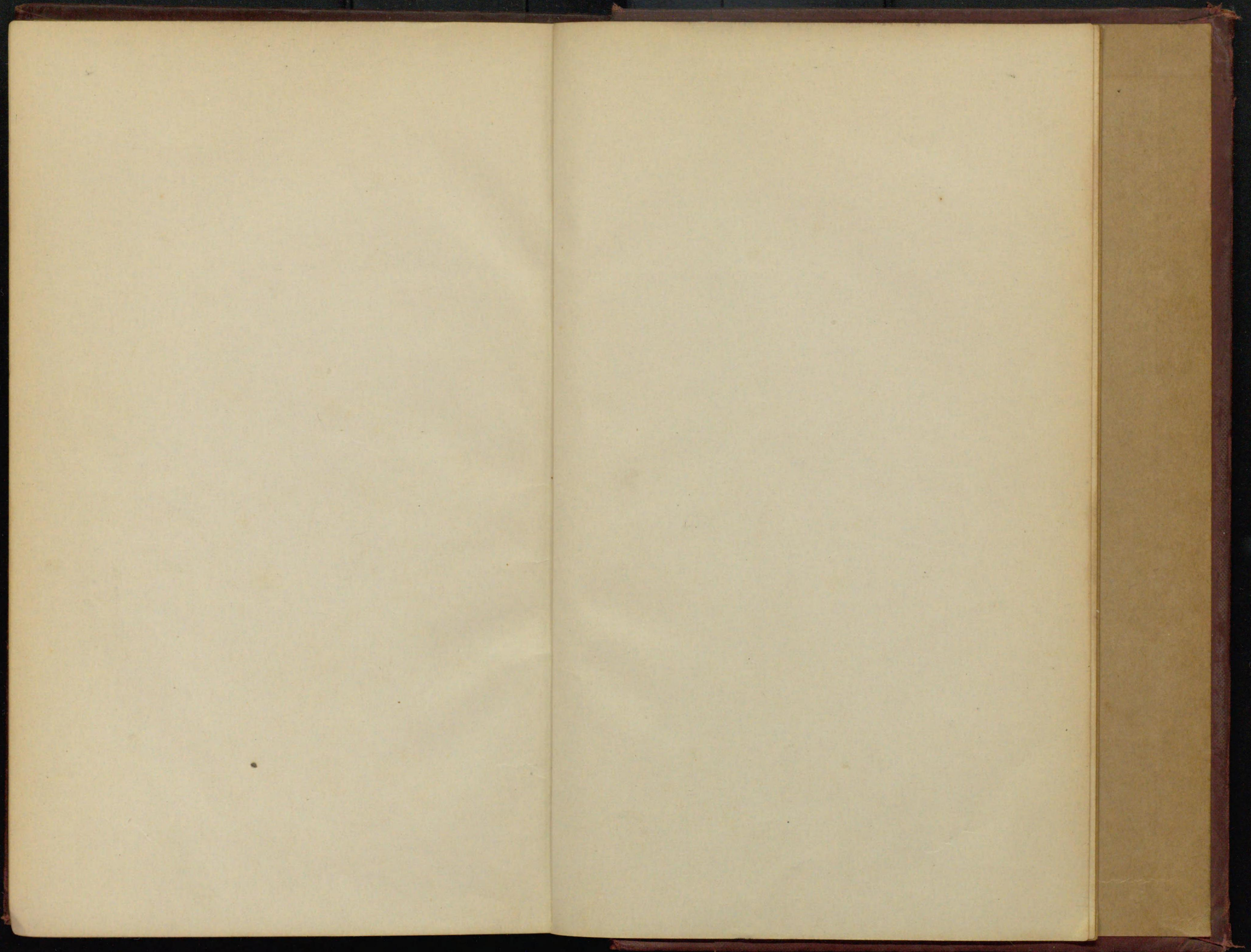
耕
筮
作
樂
話

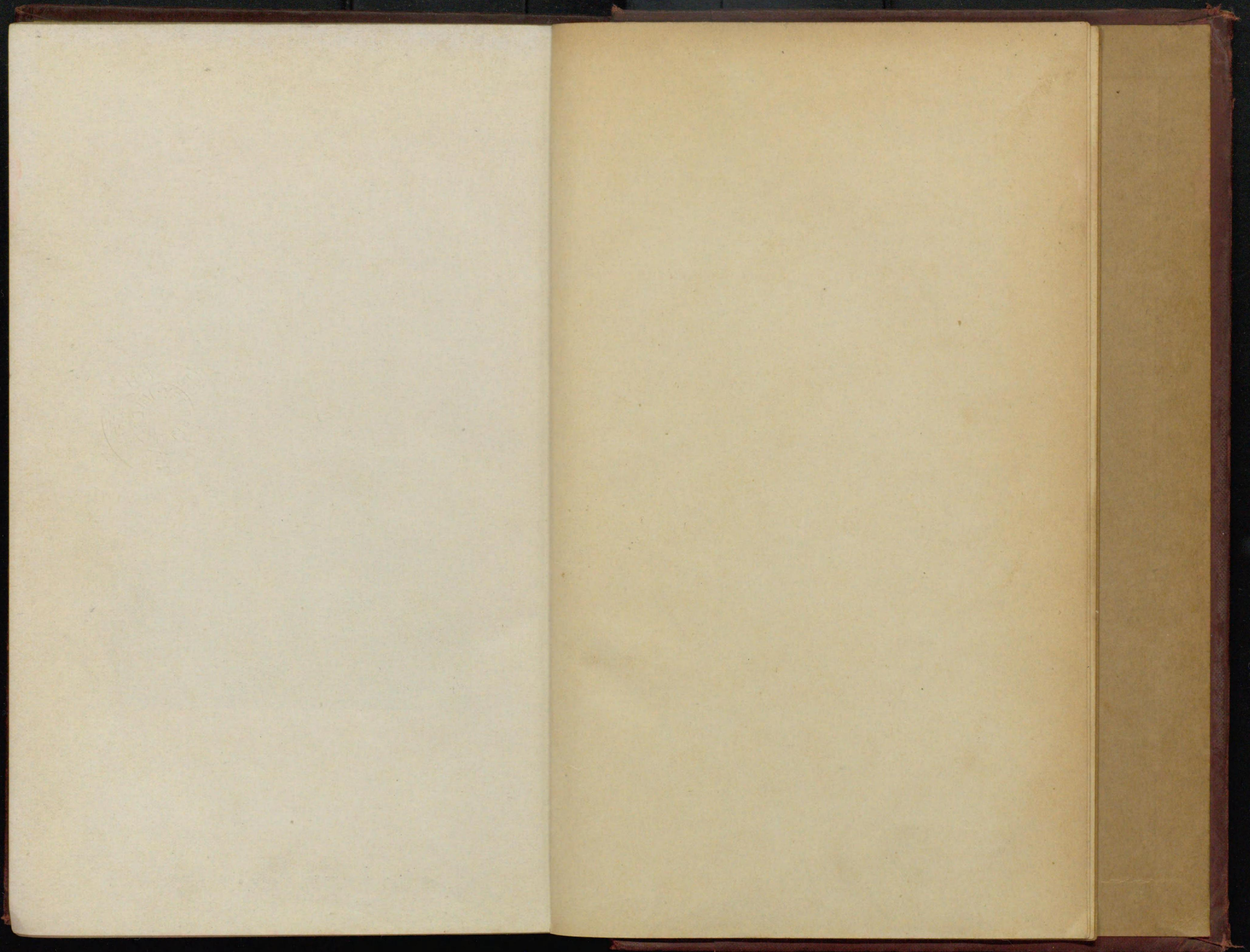
367

山
田
耕
筮
著

清和書店發行









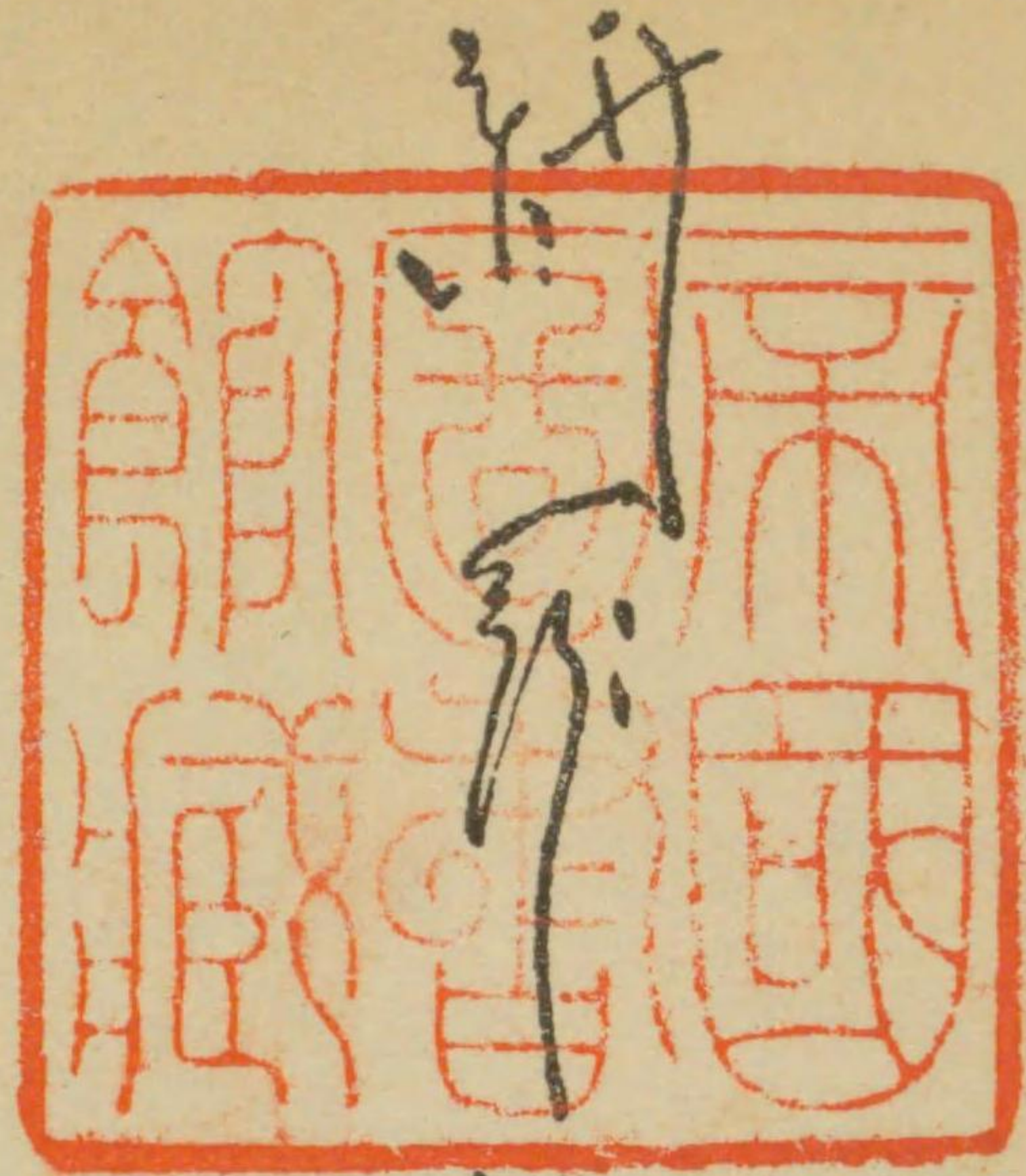
新刊
梁治

新刊
梁治

清
和
書
店



一九三三年・アシロ訪問當時の著者



泉治

研

清
和
書
店



Kobayashi

者著の時當問訪アシロ・年三三九一

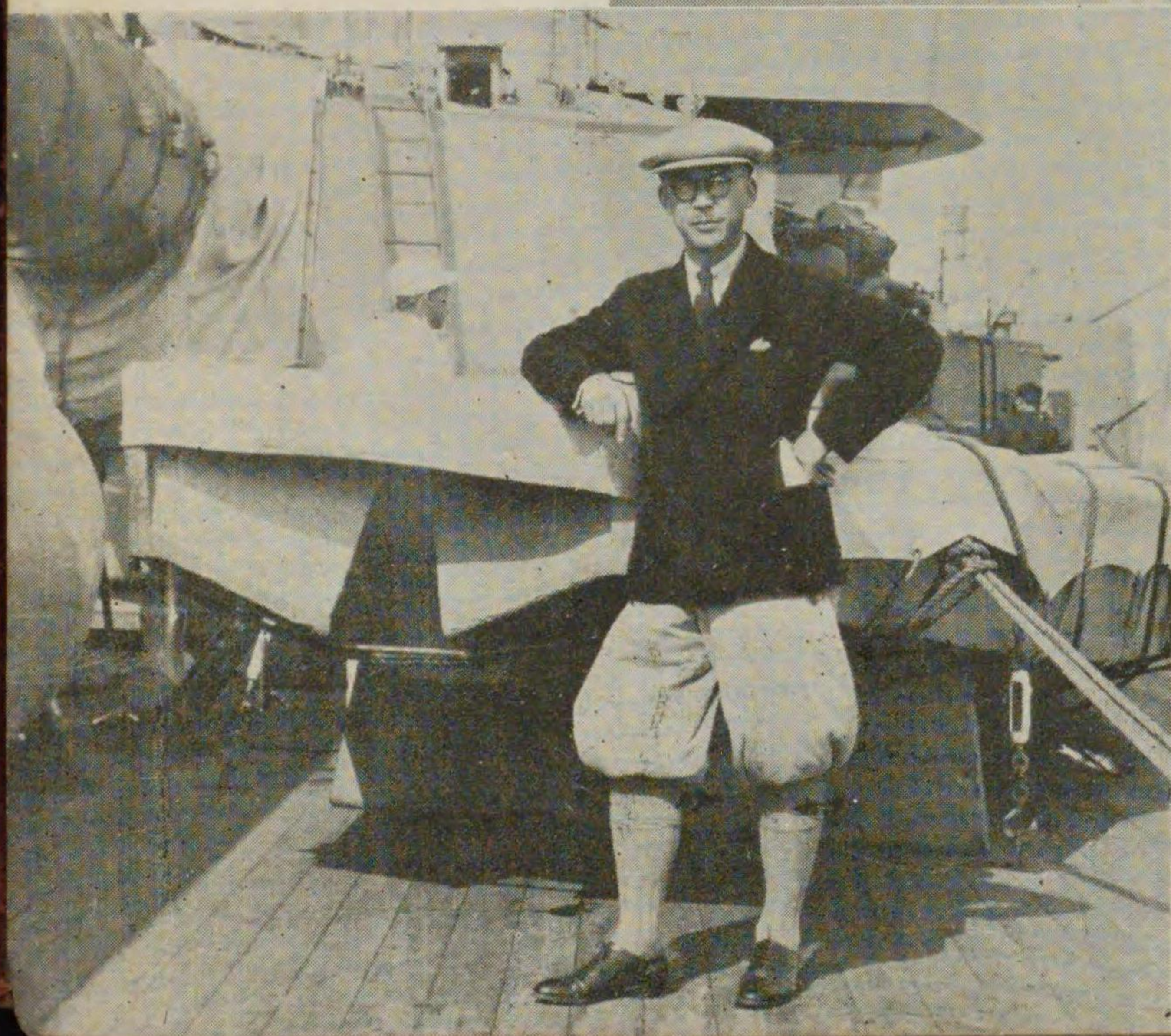


『内』に於ける著者

上 作曲の筆を執る著者
中 『聯合艦隊行進曲』作曲記念として海軍省からの銘刀を受ける著者
(右は軍事普及部武富中佐)



下 軍艦『伊勢』艦上の著者



(海軍省検閲済)

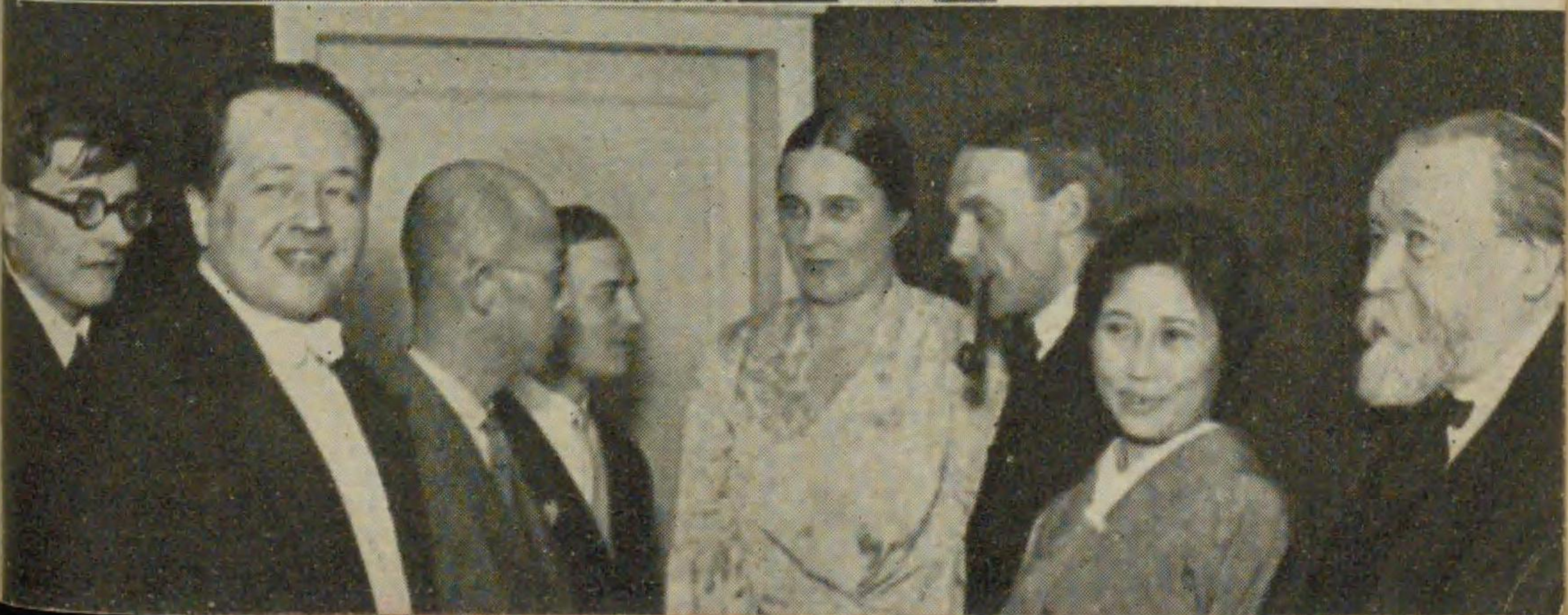


『外』における著者
（上から）
1 パリにおける著者

その向つて右は藤原義江氏夫人
左は順に宮川美子、藤原義江、佐藤美子の諸氏、後列向つて右より小澤弘氏（一人置いて）太田黒養二氏、宅孝二氏（二人置いて）牧嗣人氏



3 を講ずる著者
レーニングラードにおける著者の演奏
4 モスクワ・コンセルヴァトワルにおける著者
右端イポリトフ・イヴァノフ、左端シヨスタコーヴィッチ、その右ガウク



序文

大坂への小さな樂旅に出かける前に、この書の序文を書き上げて終はうと、珍らしくもペンを執つて机に向つた私の耳へ、ふと思ひもかけぬ間近な所から、吹奏樂の音が入つて來た——ラヂオではない、蓄音器でもない。正しく樂器の口から、眞直に五月の空氣を揺つて來る響きなのである。私はしかし耳によつて、音の方向を探るまでもなく、それがどこから洩れ聞えて來るのかを、直ちに知ることが出來た。曲は英國の準國歌『ルール・ブリタニア』だつたのである。

(1) 文 序

英國大使館の裏に當るこゝ五番町に越して來てから、もはや二年になる。私の部屋の窓からも見える長い煉瓦塀によつて區切られた大使館のその一劃は、さながらに一城廓をなして、いふまでもなく治外法權の土地だけに、な

609-41

んとなしに英國領の飛鳥といったやうな感じさへもがするのだ。

私は私の部屋の窓から、その英國の庭園を眺め、そして夏など、恐らくは英國製でもあらうところの蚊に血を吸はれて、この二年を送つて來たわけである。

今耳を打つ『ルール・ブリタニア』も、もちろん大使館の構内から聞えて來るのだつた。さうだ、今日は英國皇帝の銀冠式に當るのだ。

銀冠式——二十五年、さうした數字を頭の中に描くことによつて、私も今年は五十歳の誕生日を、間近に控へてゐることを、また事新しく意識した。

私はこの書の序文を書くために筆を執つたのである。私のこの書と、英帝の銀冠式と、そこに何等の係りがありさうにはない。しかし二十五年といふ數字は、私には私自身が踏んで來た二十幾年、殆んど三十年に近い樂歴を

思ひ起させる。その樂歴の間の感想や、回顧や、時にふれての小論やを拾ひ集めたこの書の序文であつて見れば、まづこんなことを書いて見てもいいのではあるまいかと、旅に出るまでの時間がないまゝに、無責任な筆を擱く次第である。

一九三五年五月六日

山 田 耕 箨

目 次

序 文……………一

未完成のインテルメッツィ……………九

拳の父性愛——泣きじゃくる優等生——小さな歌の狂人

東福寺の女狐——犬難突破——雅號を「秋月」

燒鳥の香に咽ぶ——黒鯛を釣る——口をこつたお禮

高橋驛長の激勵——岡山時代——淺瀬に潜る

上野への憧憬——死床の許諾——見離された受験生

度膽を抜く市況放送——寄宿舎内の珍トリオ——妻の少女時代

祈るコーツ氏——大助平主義——落第哲學を聽く

快男兒の戀——ラッパは叫ぶ——ユンケル先生の頭

先生瞞着術——久野久子女史の白眼——穿にかゝる

二人の天刑病者——自轉車美人轉覆事件——イタリー語の「浪子さん」

宙返りの卒業式——何をしにこの世へ——元祿さんとの旅

親友と再會——『墓上の花』——迫害と愛の絆

愛の郵便脚夫——焼かれた祕密——國産ベートーヴェン、
渡歐基金七圓也——空しき婚約

音樂の法悅境……………二四
 自動車で越す師走……………二五
 作るのか生むのか……………二五
 文明と音樂……………二五
 作曲における詩文と散文……………二九
 童謡の作曲について……………二九
 指揮について……………二九
 日本の作曲者に……………二九
 改造日本音樂の提唱……………二九
 愛する樂員諸士に書き贈る……………二九

論争をやめて實行しよう……………二〇
 邦樂の將來……………二二
 文樂はレヴェューである……………二八
 ベヨックリーンの『死の島』とその音樂……………三三
 ベートーヴェンと小犬……………三七
 シトラウスの思ひ出……………三〇
 デュラルディン・ファーラーの藝……………三八
 をしてフデワラを推さう……………三五
 ユンケル先生を語る……………三五
 柏ちやんの死……………三六
 三つの挿話……………三七
 ディスク藝術提唱……………三八

トッキー音楽……………二六七

大東京の録音……………二九八

シャリヤーピンの『ドン・キホーテ』……………三三二

アメリカの女……………三三九

バーム・ビーチの夏……………三三六

歐米の印象……………三三四

ソヴィエト風景(一九三二年——一九三三年)……………三五五

プロローグ——食堂車風景——音楽風景——レニングラード……………

モスクワ——エピローグ……………

(川喜多煉七郎畫伯裝幀)

未完成のインテルメツツイ

拳の父性愛



父の愛情といふものを、殆んど知らないまゝに私は幼年時代を過した。

父の事を私は「おやぢ」と呼んでゐた。——は、すば抜けて聲の大きい人だつた。

「耕坊」と大聲で呼ばれると、まるで虎にでも吠えられたやうで、身のすくむ思ひがしたものである。夜など、私に取つては大の好物であつた蒲鉾を板付のまゝで囮にして、寝床から私を呼ぶ事もあつたが、その蒲鉾の餌につられて、こはく父の蒲團へ入り込んだものゝ、父が寝入るのを見ますと、大急ぎで母の懐ろへ逃げ歸つたものである。時には寝たと思つた父が、案外にもまだ起きてゐて、「お前は俺の子でないぞ。」と、怒鳴つた事さへがあつた。

父は相場などに手を出して、相當の財を蓄へたり、散じたりしてゐたが、そのころには

動脈瘤と胃癌を患つて、もう餘命が數へられてゐた。もと醫師をしてゐただけに、自分で自分の壽命を、あと三年ときめて終ふと、その商賣から足を洗つて、傳道事業に携はり、傍ら病を養つてゐたのだつた。

そんなわけで、父は始終汚物を口から吐いてゐた。その痰吐きを洗ひ淨めるのが、私に與へられた仕事だつたのである。痰吐きが一ぱいになると、私はそれを家の裏にあつた、じめじめした芥捨場へ捨てに行つた。その芥捨場に近く露が生えてゐたので、私はそれを莖ごと取つて、痰吐きの中に敷き、捨てる時には莖をもつて、露の葉ごと汚物を引出さへすればいゝやうに工夫して見たりした。父は私のその機轉を、大そう褒めてくれたものだつた。

ある朝のことである。私はいつもするやうに、露の葉を入れた痰吐きをもつて、父の病床に近づいた。父は何と思つたかちいつと私の顔を見つめた後「耕作！」と改まつて私に呼びかけたものである。平常「耕坊」と呼びならはされてゐた私には、それは異常な響きをもつ呼び聲であつた。「何です？」とやゝおくれ氣味に問ひ返した時、私は激しい痛み

を頬に感じた。父の大きな掌が、横さまに飛んで來たのである。私は「わーっ」と大聲をあげて、母親の所へ逃げて行つた。父はそのまゝ頭から、すつぱり蒲團をかぶつて終つたやうだつた。

それが父と私との、殆んど最後の別れであつた。父の心を私はもとより測りかねたが、今にして考へて見ると、既に死期の來るのを知つてゐた父が遺して行く私への愛情をさうした思ひがけない形式で現はしたものであらう。「お父さん、僕はお父さんが大好きです。」と息子が呼びかけると、親爺は黙つて息子の頬に平打を食はす……といふ「フ、ニ」の一場面を、私は幼年時代の追憶の中に見出すのである。

泣きじやくる優等生

生れたのは本郷森川町だつた。しかし私が二歳の時、父は一家を擧げて横須賀に移り住んだので、私の幼少の思ひ出はまづ横須賀から始まつてゐる。

二つから七つまで、私は横須賀にゐた。私の姉たちはミッション・スクールで學んでゐる

た。兄も熱心な日躍學校の教師だつたし、禁酒會の會員であつた。家にはヴァイオリンもあつた。オルガンもあつた。家庭内に唱はれる歌は主として讚美歌であつた。それもあつた。ふれた讚美歌ではなかつた。多くはやゝ高尚な、英語の讚美歌であつた。

漸く、舌がまはるかまはらない頃、私はそれらの歌を唱ひまねた。小學校へ入つても學校で教はつた歌よりは家庭の歌を愛唱した。しかも、私は姉や兄の歌のまねだけでは満足が出来なかつた。私は、私流の英語をあやつり、私流のふしを即興した。

ジーザス、ラスミー、ジッサイノー

ホーライ、バイブル、テスマミツソー

ジーツ、ワンツ、ヒービーロン

デアアル、ヒコボコ、ヒースロン

これが私の得意な歌であつた。原歌は「Jesus loves me」（主われを愛す）といふ英語の讚美歌である。しかし六、七歳の私は、その意味も知らず、それを右のやうに歌ひなしてゐたのである。

そればかりではない、横須賀には鎮守府の軍樂隊がゐた。私は何よりも嚙喰たる軍樂の音が好きだつた。

日が暮れたら、もうひとりでは圃にさへ行き得なかつた、臆病な、引込思案な、人嫌ひな私であつたのに、潮留の坂の上にあつた私の家へ、坂下の廣い訓練場から響き流れて来る、あの軍樂のうねりを耳にすると、私はもう夢中になつて家を飛びだしたものだつた。そして、何町も何町もその列に従つて、どこまでも、どこまでもついて行つたものだつた。ラッパを見あげたり、クラリネットをのぞいたり、ベツケンベツケンの喚きに怯えたりしながら、氣弱な私が、まるで英雄の血を注射されたかのやう、グウンツグウンツと強くなりきつて、その隊列の右に左にかけめぐりながら、歩きまはつたものだつた。そしてその果ては、きまつて迷子になつたものである。そんな時、私を慰めて、家まで連れ歸つてくれるのは、いつでも兵隊さんであつた。

小學校へ入つたのは六つの時であつた。弱蟲の私ではあつたが、成績は自分ながら圖抜けてよかつた。一年から二年に上る時には、郡長や町長などが式に列席して（横須賀はも

うその時分から市制が布かれてゐたかも知れない——とすると妙な話ではあるが、私はたしかに郡長と覚えてゐるのだ。——優等生の私には、郡長手づからの褒美が下された。それが七つの少年には、持ち切れぬほど多量の半紙だったので、何事にも泣きたがつた涙の蟲のやうな私は、晴の式場をも構はないで、「わーっ」と大聲に泣き出して終つたものだつた。

そんな風の弱蟲ではあつたが、しかもそれでゐて、一旦腹を立てたとすると、随分思ひ切つた亂暴をしでかさないと限らぬ私だつた。そのころ同級生に石黒といふ材木屋の息子がゐて、それがクラスでの餓鬼大將だつた。同級の誰彼で、石黒の『金時』——それが彼の渾名であつた——にいちめつけられないものとはなかつたが、中でも弱蟲の私は一ぱん顯著な被害者だつた。

その日も私は石黒に泣かされて、學校から歸る時だつた。學校は坂の上にあつて、校門から幾段かの石段が街路へ走つてゐた。私とその石段に足を踏みおろした時、ふと見ると二段か三段下を、石黒が先立つて下りて行くのである。その日は珠算の授業があつて、私

も算盤を手にもつてゐた。後から私が續くとも知らぬらしい石黒の様子に、この時だと思つた私は、矢庭に持つてゐた算盤を、金時の頭に叩きつけた。算盤が壊れて、珠が石段に飛び散つたほどだつたから、相當な傷を與へたに違ひない。石黒も勿論『わーっ』と泣き出したし、私は私で、わけもなく大きな聲で泣き出して、二人とも涙をまき散らしながら石段を馳け下りて、右と左に別れて歸つたものだつた。後刻石黒の母親が、繻帶頭の石黒を連れて私の家へ怒鳴り込んで來た時、母はその強談判をうまく捌くのにどんなにか骨を折つたことだつたらう。

それから間もなく、私は長姉に連れられて、東京へ歸つて來た。そして中の姉の婚家に寄留して、芝の啓蒙小學校といふキリスト教主義の小學校へ通つた。そのうちに父も出京して、アメリカから來たヤングマンといふ女宣教師の屋敷内を借り受け、ヤングマンの管理する教會の仕事をする事になつたので、私も父の許に引取られて、芝から京橋の啓蒙學校へ轉入した。

小さな歌の狂人

オッペケッポン、ペッポンボン、蛙の眼玉へ灸するて

それでも跳ぶなら跳んで見な、オッペケッポン、ペッポンボン

そのころ東京の町中にはこんな歌が流行つてゐた。しかしなぜだか、私はさうした歌を口にするのが嫌ひだつた。

それよりも私はその頃、「呼賣り」が街頭に流し歩いた「福島中佐シベリア遠征の歌」の方がはるかに好きだつた。ふしといふにはあまりにも幼稚なものではあつたが、それはこんな詞だつた。

見よや見よ、

福島中佐の一大事業。

日本帝國軍人の

重き名譽を一身に、

擔うて立ちし安正が

前途の……………雲莫々

私がつつてゐた啓蒙小學校の門柱にかけられた大きな校名板は、非常にいゝ音がした。それは厚い樫の板であつた。私は放課後よくこの板を平手でたゞきながら、いろいろな歌を唱つた。

ある日私はいつものやうに、その福島中佐の歌を子供らしい感激の情にむせびながら、校名板の快い響きに合せて歌つてゐた。俄然、私は悲鳴を擧げて倒れた。重い厚い、大きな校名板が、私の小さな兩足に落ちて、おや指の爪を二つながら打ち砕いてしまつたのだつた。

私は小使に背負はれて、その頃居留地にあつた私の家に送りとゞけられた。母は私の兩足に繻帶をしながらかういつた。

「あなたは死ぬまで歌ふつもり？ おばかちゃんですね」

その頃私はたしかに、小さな歌の狂人であつた。母の言葉通り、歌はずには生きてゐら

れぬ自分であつた。

それが、今日の私となつたのだ。

やがて日清戦争がはじまつた。そして幾多の愛國的軍歌が國中にあふれみなぎつた。『四百餘州をこぞる』『敵は幾萬』『雪の進軍氷を踏んで』等、等。

そのうちでも私がたまらなく好きであつたのは、従軍看護婦の歌とかいつた。――

ましるに細き手をのべて

流るゝ血潮を洗ひ去り

巻くや繻帯、白妙の……

衣の袖は紅に染み……

といふ、實に、實にセンチメンタルそのものゝやうな歌であつた。

私の幼年時代は、たしかに軍歌の時代であつた。しかしその頃、ひ弱かつた私の健康は荒々しい軍歌を歌ふには適しなかつたのかも知れない。それ故か、數多い軍歌のうち、私の口にしたものは、やゝ歌曲としての氣品を具へた、やさし味のあるものばかりであつた

と覚えてゐる。

そのうちに父は病を得て千葉縣の幕張へ轉地した。その村の旅館の離れを借り切つて、そこへ一家が移り住んだのである。

その頃の幕張は、見る影もない淋しい寒村で、子供心に悲しかつたことは、菓子らしい菓子とて商つてゐる店もなく、馬刀貝の鹽つからく煮つめたのや、梅干などが、駄菓子屋の店先に、汚い捻ん棒や何かと同居してゐた風景だつた。

前にも書いたやうに、父はキリスト教の傳道に従事してゐたが、母などはミッショナリーの風俗を嫌つてゐたので、私は水兵服を着せられた。それを着て外へ出ると、村の悪童どもが『異人ばつば』とはやし立てるので、氣弱な私には到底一人歩きが出来なかつた。外出にはいつも母が同伴だつたが、それでも村童連の悪罵は止まなかつた。時には母が、傘でそれらの村童を追ひ拂はねばならなかつた。

しかし私は東京から來たといふので、村では小さきインテリだつた。郡内切つての豪農で、また船主でもあつた郡長の家、吉右衛門さんと呼ぶ坊ちやんがあつて、私は見出さ

れてそのお學友格になり、豪華な殿様生活を覗かせられた。私はその時七つだった。その吉右衛門さんの姉に十七歳位になる人がゐて、私を猫可愛がり可愛がつてくれたものだった。

父が私に拳の訣別をしたのは、その幕張生活の末期であつた。

東福寺の女狐

私は母の兄である松井といふ家へ養子にやられて、再び東京に出た。出京後間もなく、父も幕張の生活を切上げて、キリスト教主義の赤坂病院に入り、そこで息を引取つた。臨終の三日前に、私は父を病床に訪うたが、今でも私の印象に残るのは、むしろその時よりも、幕張での拳の一場面であつた。

父の歿後、私は再び生家に歸つたが、間もなく田村直臣牧師が巢鴨に經營してゐた自營館といふ活版工場に入れられた。それは内部に夜學校の設けがあつて、働きながら授業を受ける、一種の勤勞學校で、近所では耶蘇學校で通つてゐた。

私の仕事は出來上つた印刷物を大八車に載せて、それを届けに行く役目だつた。車は先方のものなので、荷物ごと置き放しにして、歸りにはたゞ帳面をぶら下げて歸ればいゝのだし、それに車を引くのが面白くもあつたから、仕事は決して苦にならなかつたが、道は今の巢鴨本通り、東福寺の横をぬけて、淋しい畑道を通らねばならなかつた。その頃東福寺の山にはまだたくさん狐がゐて、夜はキャン／＼と、物悲しく啼いてゐた。

ある日の事である。私は朝の八時ごろ自營館を出て、いつものやうに車を引きながらその畑道を通りかゝつた。道には十二三人の悪童連が立ち塞つて、私に喧嘩を吹き掛けるのだつた。腹を立てると可成り向ふ見ずな私ではあつたが、大切な印刷物もあることだし、その場は先方のいひなり放題、したい放題になつて、どうにか關所をくゞり抜けたものだった。

それが先方へ行き着いて、印刷物を車ぐるみ引渡し、帳面一つを荷物にして、歸途その畑道にさしかゝると、怖ろしかつたその出來事が頭の中に蘇つて來て、恐らくは恐怖に呆けてでもゐたのであらう、いつまで歩いて、歩いても、自營館へは歸り着かないのだ。

後で考へて見ると、たゞ一つ記憶に残つてゐる事は、土方伯爵邸の下を流れてゐる——八犬傳にも出る、何とかいつた川の縁をとぼく歩いてゐたことだつた。その川は私のゐる活版工場の裏にも流れてゐて、水車場などもあつた。そこまで来れば、どうにも道の間違へやうがない筈だつたのであるが……。

それに今一つ、その川水で近所の百姓が大根を洗つてゐて、その白さがくつきりと目にしみこんでゐた。道が判らなかつたものとすれば、その百姓に聞いてもよかつたし、私の目の前を年の頃二十四五の、界限には珍らしい浮世繪風な美女が、蛇の目の傘をさして歩いてゐたのだから、その女に聞いてもよかつたのである。

それを何といふわけもなく、誰にも道を聞かないで、川に架けられた土橋を渡り、そこにあつた駄菓子を賣る百姓家で初めて道を聞いた事だつた。「耶蘇學校はどこですか」といふ私への答へに「あそこですよ」と差し示したおかみさんの指の方向に、何と間近く活版場の煙突が立つてゐたではないか。

やうやく活版場に歸り着いた時には、もうとつぷりと日が暮れてゐた。八時に出れば、

どんなに暇を取つたところで、十時までには歸れるはずが、五時になつても六時になつても歸らないのだから、みんなの心配はいふまでもなかつた。そのころ東京には白袴隊といふ不良少年團が跋扈してゐて、現に自營館の少年が一人、その團員に酷い目に會はされ、それがもとでとう／＼死んで終つたやうな事件もあつた事だし、恐らくは私も同様白袴隊の犠牲になつたのではないかと、捜査隊を繰り出す手筈になつてゐた。そこへひよつこりほんやりと呆けて歸つて來た私だつた。

狐にだまされたのだらうといふ者もあつた。として見るとあの浮世繪の女が……何れにしても私にはほとんど記憶がなかつたし、殆んど日がな一日を歩きつゞけてゐたものか、どこかで晝寝してゐたものか、それすら覚えはないのだつた。

犬 難 突 破

さうした例外的な「事件」を除けば、晝間の勞務は、決して私に辛いものではなかつたが、夜は私に禁物だつた。自營館では一番のチビ助だつた私は、しよつちゆう焼芋買ひの

使ひに出されたが、その焼芋屋のある養育院近くの、明るい町へ出るまでには、暗い、淋しい夜道があつた。そしてその夜道を脅かすのは犬だつた。

今でも犬が怖ろしくないではない私である。ましてその時分の臆病な私には、犬は一個の猛獣であつた。焼芋買の歸り道を、その猛獣に襲撃されて、猫のやうに樹上に難を避けたことも一再ではない。木登りだけは私も達者だつた。

とうとう私はいゝ犬除けの法を人から教へられた。それは犬にはこちらも四つん這ひになつて向ひ合へばいゝといふ事である。私は早速それを實行に移した。

出がけに草履を一足用意して両手にそれを穿き、四つん這ひになつて暗の畑道をこそそこと進んだのだつた。それが思ひのほかには効を奏して犬難はものゝ見事に切抜けられた。通行人までが意外な四足の怪物に驚いて、道を避けて私を通してくれた。

養育院の裏は伊達家のお屋敷で、こんもりと繁つた森になつてゐた。そこには五位鷲の群が、おびたゞしく巢を組んでゐた。

自營館の日常の副食物はそれこそ酷いもので、一週間に一度位は鹽鮭の薄い一片か、わ

づか二尾ばかりの目刺しが與へられるだけ、あとは鹿尾菜などを食つてゐたので、誰も彼もがひどく腹を減らしてゐた。からたちの實をすら取つて食つたほどである。さうした飢ゑたる少年たちは、忽ち五位鷲に目をつけた。小さい私は樹上で見張の役をつとめ、他の少年たちで巢を探して、卵を盗んだものだつた。苦心して取つた卵は、不快な異臭があつて到底食用にはなりさうにもなかつたが、それでも私たちは盗みを止めなかつた。卵取りそのものへの興味と、あはよくば鳥を生捕りにしたい慾望とから。

私は忠實に見張りの役を勤めた。人間に對しての見張りは、完全に行はれたが、しかし私たちに重大な手ぬかりがあつた。忍び込む私たちの姿を、誰も氣づいたでなかつたが、その度毎に飛び立つ鳥の姿を、邸の人々は怪しと見た。ある日、とうとう遠巻きに巻かれて、一人残らず引捕へられ、傳通院前の警察署へ突き出された。小柄な私だけは、素早く樹上から飛び降りると畦の間にしばし身を潛め、犬難突破以來得意の四つん這ひで、畑の中をがさこそと逃げ延びた。

雅 號 を『秋 月』

楽しみは日曜日だった。その日はもちろん勤勞はなく、夜學校も休みだった。私たちは巢鴨から數寄屋橋まで長い道程を歩いて、今の松竹劇場の敷地にあつた數寄屋橋教會に通つた。自營館の經營者であつた田村直臣先生は、また數寄屋橋教會の牧師でもあつた。私たちは教會の日曜學校でいろ／＼なサーヴィスに服した。

教會に近い見付内の屋敷町に、秋山といふ家があつた。そこに可愛い美しい娘がゐて、教會の行き歸りに私と顔を見合せることが多かつた。十三歳の、まだほんの少年ではあつたが、自營館では年長者の間に交つて、戀だの、愛だのゝ話を、小耳に挿んでゐた私だけに、淡い戀心をその娘さんに寄せてゐた。そして私にそゝがれる娘さんの視線を、私は私への好意ある應答と取つて終つた。

おぞましくも、私は『秋山』の一字を取つて、ペンネームを『秋月』と稱した。思ひ出して、面はゆいこの雅號を、私は十八の頃まで使つてゐた。

しかしそれは、私に取つては初戀ではなかつたかも知れない。私には智善ちぜんといふ弟があつて、私が八つの時には、二つ違ひの六歳で、幼稚園に通つてゐた。その送り迎ひを私がさせられた。

その幼稚園に當時の姓は何といつたか、お愛さんといふ先生がゐて、その人が大そう私を可愛がつてくれた。毎日歸りがけに「耕ちゃん、さよなら」と聲をかけて貰ふのが、私には何よりもの歡びであつた。私の學校が早退けになつて、まだ幼稚園の方が濟まない時には、垣根から教室を覗きこんで、先生の姿を懐しく見やつた。その人への私の思慕が、或は初戀だつたかも知れない。

お愛さんは、いま神戸のある金持の奥さんになつてゐる。十年ばかり前、日露交驩の樂團を率ゐて、私が關西に旅した時、お愛さんも聴きに來てくれて、久方ぶりの對面をした。幼稚園時代二十一歳だつたお愛さんは、もう五十の坂を越してゐたし、私とて頭の頂きが薄くなりかゝつてゐた。今は人妻であり、また家内持ちである私たちの再會は、ルノードとバルタザールのやうなロマンチックなものではなかつた。それに、かりに私に取つてそれ

が戀であつたにしたところが、お愛さんにして見ると、單なる童兒への愛情にしか過ぎなかつたに違ひない。

焼鳥の香に咽ぶ

日曜日の今一つの楽しみは、教會の説教が濟んだあとだつた。今でこそほとんど道の半町と歩かない私ではあるが、その頃は實によく歩いたものである。朴齒の、それも一枚齒の足駄か何かを履いて、夏冬ともに足袋などはかず、今では人一倍寒がりの私が、嚴寒にもシャツなど着けない素衾一枚、それに膝までの袴を穿いて、足に任せて東京中をぶらつき廻つた。今でもかいなでの運轉手などには、自分の方から近道を教へてやれるほど、東京の地理に詳しいのは、その頃健脚に任せて、説教の濟んだあと、東京中を押し歩いたお蔭である。

しかし私どもの通路には、水道橋といふ一つの關所があつた。砲兵工廠の數町に亘る壁に添うて立ち並んだ露店の飲食屋臺がそれだつた。

牛めし、大福、うどん、そば、壽司、みつ豆、等、等、中でも私どもの飢ゑた胃袋を悩ましたのは、一串二厘の焼鳥だつた。

歸り途、屋臺の灯影が網膜にうつると、仲間たちの一人は、咄嗟に「用意、ドン」の相圖をした。水道橋から富坂にかけてのこの難所を、誰が一ばん早く駆け抜けるか、競走をして見るのだつた。さうした競走へ興味を追ひやつて二厘の焼鳥への激しい慾望を打消した。

もしそばが僅八厘のその頃だつたのに、私共はその焼鳥やをくゞることさへ容易なことではなかつた。

さうした惨めな生活にも拘らず、私は案外幸福だつた。私は間斷なく歌つてゐることが出來たからだ。

私は朝晩の塾の祈禱會に讚美歌の音頭取りとなつた。日曜學校の歌のリーダーであつた。大學傳道には音楽長として街頭に高唱した。

さうした私であつたので、同窓の中村氏——納所辨次郎氏の親族——から音楽學校への入學を切りに勧められた。もとよりそれは、望んでも得らるべきことではなかつた。しか

し私の胸のうちには、何とかしてこの勧めを實現せずには置かぬ、といふやうな意氣が燃えてゐた。

その頃は丁度日清戦争が終つて日本はまさに不景氣の絶頂にあつた頃だ。緊縮といふ言葉こそなかつたが、あらゆる方面の節約が行はれた時代だつた。廣い活版所の文撰場は夜になると全く滅燈されてをつた。その暗い、寒い工場で、さびしくラムプと文撰箱をかゝへて夜半近くまで赤字を拾はねばならなかつた私だつたが、母を憶ひ、家を懐しむ心からの涙にむせびながらも、歌はずにはゐられぬ自分であつた。それだけに自分は幸ひだつたといへよう。

この塾のまる三年の生活は苦しかつたとはいへ、決して私にとつては無駄な生活ではなかつた。私は年長の先輩から、どれ程いろ／＼の點について啓發されたかわからない。

相對性原理の石原純博士や、その令弟謙博士、神戸新聞社長の進藤信義氏などがその頃館にゐた。美術界の元老和田英作氏も、やはり自營館の前身、勞働塾の出身だつたかに聞いてゐる。この進藤氏は講談が上手で、私たちは夜會がすむと、進藤氏の部屋へ押しかけ

て、よく講談を聞かせて貰つたものだつた。それが私に座談や講演のコツを呑み込ませた。

進藤氏はそのころもう二十幾つかで、早稻田政治學校といつた今の早大の前身に通つてゐた。石原博士も十八歳か幾らかで、館生の中では年かさの方であつた——この二人は伊達屋敷の五位鷲事件に關係がなかつたことを、兩氏の名譽のために特筆しておかう。

そして私の最も嬉しく思ふことは、同塾のすべてが、私を音楽者に仕立て上げてやらうといふ、同じ愛に燃え結ばれてゐたことであつた。が、私は病を得た。自宅で二ヶ月、病院で二ヶ月、満四ヶ月の瀕死の重患——病は肋膜炎であつた——に襲はれて、自營館を退かねばならなかつたのであつたが、それも今にして思へば今日のこの頑健を得る一轉機であつたといふことも出来やう。

黒鯛を釣る

十三歳の一月、漸くにして生を得た私は、母と鎌倉に移り住んだ。

前に書いたヤングマンの別荘が、そのころ鎌倉にあつた。私たち母子はその一部を借り

て細い煙を立てはじめた。

私は黒鯛を釣つて生活費を得た。さうしなければ食つて行けない貧しい家ではなかつたのだが、父も母も、幼少の時から私たちに勤勞の習慣を植えつける方針をもつてゐた。私を自營館へ入れたのも、さうした父の遺志を、嚴格に母が守つた故であつた。

まづゴカイを岩蔭から掘り出す事が、私にとつての難業であつた。海岸には住んでゐても、泳ぎが出来ず、しかも、後頭部を少しでも濡らすと、もう弱つて終ふほどの私（それについては後に記す滑稽な失敗がある）だつたので、それは相當な冒険であつた。私は水の上に首だけ出して、岩かげを掘つてゴカイを求めた。やうやくゴカイが得られると、それを餌にして黒鯛を釣つた。小柄な私は、その時にも身體中を水中に浸して、海底の砂の上に立つてゐるのだつた。水に弱い私を氣づかつて、母は海岸に立つたまま、私の後姿を見守つてくれた。

しかし所の漁師たちは、私の釣をお坊ちやんの道樂仕事にしか取つてくれなかつた。生活苦のない都會からの「轉地者」に繩張を荒される不快さから、彼等は私を邪慳にこそは

扱はないまでも、積極的に好意を與へてくれはしなかつた。いつでもゴカイを私に掘らせて、黒鯛の寄り場所や、釣上げのコツなど教へてくれさうにもなかつた。やうやく二尾がたかゞの漁獲であつた。それでも二尾取れると八錢に賣れ、八錢で私一人の口は過せた。でも私は釣上げた魚をひさいで、それで食つてゐるとは漁師たちに告げなかつた。

母のまぢろがぬ注意にも拘らず、恐ろしい危険はとうとう私の身に迫つた。八月だつたか、大潮の寄せる時節だつた。私は日蓮法難で名高い立會川尻の海中に立つて、いつものやうに黒鯛を釣つてゐた。母はもちろん海岸にゐた。

見守られてゐるものゝ安心と、油斷とが私にはあつた。さつと大浪が寄せて來た瞬間、私は頭から潮を浴びて、禁物の後頭部さへ濡らして終つた。そのまゝ潮に捲き込まれて、危く沖へ持つて行かれさうであつたが、次の大浪で辛くも浮び上り、海底を這ふやうにして、やうやく渚へたどりついた。

私はその事件以來、漁師たちの信用を獲得した。釣場所も釣のコツも、親切に教へて貰ふ事が出來た。

口を亡つたお禮

鎌倉で私は日用品の行商などもしてゐた。母が手づから經木の帽子の紐を、顎の所で結んで、送り出してくれるのだつた、そして軒毎に玄關を訪れて、紙だの筆墨だのを賣り歩く私だつた。

しかし早熟だつたくせに、或は早熟なるが故に、人一倍はにかみ屋だつた私には、未知の家の玄關に立つて案内を乞ふ事は、堪へ難い苦痛だつた。それに、大嫌ひな犬が所々に伏勢となつて現はれた。

どの家へもどの家へも、玄關までは行つたものゝ、思ひ切つて手を戸にかけることは出来なかつた。やうやく「長」と標札のかゝつた——珍しい姓であるから、ことによると警視總監をしてをられた長延連氏、或は長氏の親戚だつたかも知れない——家の前で、私は勇氣を揮ひ起した。

その家の中からは、若い娘さんたちの笑ひさゞめく聲が洩れて聞えた。その和やかな笑ひ聲が、かたくなな私の心をほぐしてくれた。

こんな家には恐ろしい猛獸もゐないだらう。そしてあの和やかな笑ひの主なら、私を邪慳に追ひ返しもしないだらう。——さう考へて私は思ひ切つて案内を乞うた。

案の定、家の人たちは、優しく私を迎へてくれた。一圓なにがしかの、初商賣の私には、全く思ひもかけない大量の買物をさへしてくれた。

が、その時奥からの物の匂ひが、私の鼻を打つた。それはたつた今出来上つたらしいお汁粉の香氣だつた。さつきからの笑ひ聲は、そのお汁粉に入れる餅を焼きながら、少女たちの打ち興する笑ひ聲だつたのだ。

もちろん私は禮を述べて、すぐに歸らねばならないはずだつた。しかし今まで一人で他家を訪うた事もなく、殊に「有難うございました」といふお禮の言葉を、口から出したこともなかつた私を、さらに嗅覺が困惑させて、私の唇から發した言葉は、何と、「御馳走さま」といふのであつた。……母と一緒に他家の客になつて歸る時の言葉が、思はず唇から亡つたのだつた。

それでも長家の人たちは私の失策を、たゞ笑つてすましてくれただけではなかつた。「飄
 軽な小僧さん」といふので、はにかむ私を無理に座敷に引きずり上げて、出来たばかりの
 お汁粉を饗應してくれたのだつた。

一圓いくらといふ多額の賣上げと、この微笑ましい失策話を土産にして、私に家に歸
 つた時、母の目には涙が浮んだ。

高橋驛長の激勵

その頃私には、年長の異性の友があつた。それは横濱のある女學校の教師とその美しい
 一人の弟子であつた。幼年の頃横須賀で習ひ覺えた私の英語の歌は、その時はじめて本當
 の英語に組みかへられ、そのふしも本當の調子に立て直されたのだ。

この二人の年長の女性の指導ばかりでなく、その頃私が、出入りしてゐた、長谷の福音
 教會の牧師夫人——名前は忘れた——背の高い鼻の大きな美しい人であつた。私はそこか
 ら派遣された行商苦學生であつた關係から、その夫人に——その人は非常にいゝ聲の持主

だつた。——いろ／＼の歌を習ひ覺えた。英語の讚美歌、日本語の讚美歌、オルガンの弾き
 方、西洋の唱歌など。行商の途すがら、腰を七里ヶ濱の水に浸しきつての黒鯛釣のその
 時ですら、私はその習ひ覺えた歌を朗らかに唱ひつゞけてゐた。しかし、この幸福な時代
 は長くは續かなかつた。健康を回復した私は、また母に伴はれて、東京に戻つた。さうし
 て私は新橋の驛の電信ボーイとなつた。

その當時の新橋驛長は、後に東京驛初代の驛長となつて、鐵道名物の一つといはれた高
 橋さんだつた。横須賀時代からの聞き覚えや、自營館での勉強で、もう少しは英語も話せ
 た私を、高橋さんは可愛がつてもくれたし、望みをかけてもくれた。『お前は英語が
 出来るから勉強して早く助役になれ』といふのが、高橋さんの激勵の言葉だつた。が、高
 橋さんのさうした囑望にも拘らず、一旦蝕まれた肋膜への脅威である煤煙と、その當時盛
 んだつたある蠻風とが、私を長く新橋驛に止まらせなかつた。母には絶対に服従する私で
 はあつたが、この時ばかりは母に請うて、そこを逃れることとした。そして白金の傳研前
 に、今でもたしかある瑞祥寺といふ黄檗宗の寺の地續きにあつて、坊さんの食べる唐豆腐

を作つてゐた農家の二階へ、私と母とは身を寄せた。その唐豆腐屋の主人といふのは、そのあたりでは、相當な地所持ちで、その中には無花果畠もあり、私には無花果の見張役が職として與へられた。無花果のない頃には、私はビール瓶の苞を作つてゐた。

唐豆腐屋には兄と妹と二人の子があつたが、兄は變りもので、相當な家に生れたにも拘らず、父にせがんで馬を買つてもらひ、好き好んで馬方になり下つて、博奕を打つたり、女買ひに身をやつしたりなどしてゐた。お琴さんといふ妹の方が、家の跡目にきまつてゐたが、そのお琴さんは丸つぼちの、それでゐてきりゝとした上品な人であつた。お琴さんが『紀伊の國は音無川の……』などとおさらへしてゐるのが、それまで西洋音楽にしか近づきのなかつた私の耳を、はじめて日本音楽に開いてくれた。

ビールの苞は一日に二百が關の山で、それが漸く六錢になつた。出來上つた苞が溜ると、私が車の前を引いて、お琴さんに後押をして貰つて、その時分から恵比壽にあつたビール會社へ納めに行つた。美しいお琴さんと、さうしてビール會社へ通ふ事は楽しみでなくてはなかつた。

唐豆腐屋の主人は、行く／＼私にお琴さんを添はせて、家督を譲りたい量見でもあつたらしい。

岡 山 時 代

そのうちに長姉はガントレット氏と結婚したが、義兄は私を親身の弟のやうに、或ひは弟以上に盡してくれた。

岡山に第六高等學校が出來て、義兄が雇教師になつた時にも、まづ同伴して行つたのは私だつた。姉は遅れて岡山へ來た。

岡山で、私は兄からオルガンを學んだ。ベートーヴェン、シューバート、シューマンなど大家の作品を兎にも角にも系統立つて學んだのは、その時が最初だつた。作曲とまではいへないまでも、自作の樂譜を書きつけたりしたのも、その頃からの事だつた。

英習字や速記術や、エスペラントなども義兄から學び得た。エスペラントを日本に將來したのは義兄だつたし、その最初の弟子は私だつたのであるから、日本最初のエスペラン

テイストたるの光榮は、今では禿げた私の頭上に輝いてゐるはずである。失禮ながら黒板勝美博士などよりも、私の方が先輩ではあるまいか。今でもどこかを探して見たら、ザメンホフ博士からの免状があるはずだ。序でながらピンポンも、義兄が日本へ傳へたもので、従つてまた義兄の相手役をつとめたこの私は、その方面でも日本最初のプレイヤーたるの光榮を要求することが出来るだらう。

義兄は一たい玩具が好きで、給料の半分は殆んど玩具の購入費に充てゝゐた。新着雑誌の廣告を見て、目新しいものがあると、はる／＼向ふから取り寄せては楽しんでゐた。それに電氣が道樂で、庭中一面に電線を張りめぐらして喜んだりしてゐて、そんな時の手傳ひ役は、いつも私が仰せつかつた。従つて私は、世間の子供がまるでやらないやうな経験を、その頃から重ねる事が出来たわけである。今でも無精ではあるが、お蔭で相當器用な手をもつてゐるつもりだ。

かうして義兄のお手傳をしたり、山登りのお伴をしたり、始終義兄の腰巾着になつてゐた私は、自分の机に向ふ時間もない程に忙しくはあつたが、勿論苦勞のない、楽しい生活

には違ひなかつた。たゞ一つの苦痛は、二十幾つかのランプの掃除といふ、私に與へられた大役であつた。

義兄は私をピーターと呼びならはしてゐた。この通り名は恐らく私に當つてゐるであらう。使徒ペテロのやうにがむしやらで、せつかちな私だつたから。

淺瀬に潜る

私は義兄の所から、藩主池田侯の建てた養忠學校といふのへ通つた。短いジャケットに海軍ズボンといふのが學校の制服で、そのズボンのお尻のかくしに、私は義兄から貰つたピストルを忍ばせてゐた。そのころ岡山の中學生の氣風は恐ろしく悪く、取わけ關西中學などは暴れん坊揃ひで聞えてゐた。危険だといふので持たせてくれたもので、勿論實彈は入つてゐなかつたが、私のピストルは、早くも岡山での評判になつた。

そのピストルを、たつた一度實用に供したことがある。そのころ養忠では、早くも率先してレース・ボートを買入れたが、縣立の一中など、まだ舊式なカッターをもつてゐるだ

けだつたので、『養忠は生意氣だ』と、何かにつけて目の敵にされてゐた。

兒島灣にボートを浮べて、灣内の一小島に遊んだ時、突然一中生の襲撃を受けた。多勢に無勢、到底敵し難く思はれたので、私は咄嗟にピストルを擬して、襲ひかゝる一中生にホールド・アップを食はせた。その間に私たちは辛くもボートへ逃げたのだつた。水上に出ると、カッターはレース・ボートの比ではなかつた。

泳ぎの出来ないくせにボートが好きだつた私には、一つの失敗談がある。同級の誰彼が貸ボートに乗つて、旭川で競漕した事があつたが、運悪くも私のボートは引返しので他のボートと衝突して、物の見事に轉覆し、私は水中に投げ出された。

禁物の後頭部を濡らされた私は、もうすつかり面喰つてゐた。それでも度を失つてゐないつもりで、泳げない悲しさ、水底を這つてやうやく岸に辿りついたが、何と私の遭難現場は浅瀬になつてゐて、岸にゐた見物の目には、私のお尻が水面上に突出して見えた。

岡山には長くもゐなかつた。學生の氣風の荒いのに、憂慮を懷いた義兄は、私を神戸へ送つて關西學院に入れた。關西學院から音樂學校へ——それが私の學歴である。

上野への憧憬

横須賀時代——まだ六歳のころには、軍樂隊の行進を追うて迷ひ兒になつて終つたり、出駄羅目の英語で唱歌を歌つて姉に笑はれたり、何となく音樂へのあこがれはもつてゐたにもせよ、まだ音樂者として身を立てようなどといふ考へは、漠然とさへも持つてはゐなかつた私だつたが、九歳の自營館時代には、もう私の將來の夢は音樂者と定められてゐた。ビールの苞を作つてゐる間にも、新橋驛で高橋驛長から未來の助役として囁目されてゐる時にも、また鎌倉で行商をしたり、黒鯛を釣つたりしてゐる時にも、いつでも私は『俺は音樂者だ、音樂者になるのだ』といふ大きな自負心と信念とを、小さな胸の中に躍らせてゐたのだつた。

その小音樂者が、ガントレットといふ——素人ながら玄人の壘を摩す知識と腕前とをもつた音樂好きなき義兄を得て、その膝下に起臥するやうになつたのであるから、岡山時代の私は、もう全く一人で音樂者に成り切つてゐたのだつた。その義兄が中心になつてゐた教

會の合唱隊に入つて、聖劇『メシア』や『聖パウロ』などの合唱のテノールのパートを歌つたり、バツソを歌つたり、ならまだしも、ソプラノが足りなければソプラノへ廻され、アルトが不足の場合にはアルトにかはり、どの聲部も悉く諳んじて終ふほど、音樂的には頭のよい私であつたと記憶する。

さうした義兄ではありながら、私は手を取つて樂器の演奏法を教へて貰ふ事は出来なかつたが、見よう見真似に、いつしかオルガンも、讚美歌位は初見で奏でる事が出来るやうにはなつてゐたし、周圍からも、私と音樂といふものは、到底切り離す事の出来ぬ一つであるといふ事を認められるやうになつてゐた。

そこへ従兄弟の大塚淳（私の母の妹が、彼の母であつた）から、上野の音樂學校へ入學したとの報せを受けたのだから、どうして私が黙つてゐられよう。もう矢も楯も堪らなかつた。しかも大塚は、少くともその周圍からは、父の業を繼いで醫師になるものとばかり思はれてゐたのだつたから、彼の音樂學校入學は、私にとつては青天の霹靂でもあり、また羨望的でもあつた。どうして彼が音樂學校などへ入つたのだらうといふ疑問と、私も

學校へといふ、殆んど嫉妬に近いまでの慾望とが、走馬燈のやうにくる／＼廻つて私の頭腦を眩惑させて終つた。

死床の許諾

丁度そのころ、私は關西學院の中學部の四年——それがその頃では學院中學部最高の學級だつた——にゐた。卒業の曉には私も音樂學校へ進みたかつたのだが、しかし實姉も、實兄も誰一人それに賛成してくれなかつた。

その時分、關西學院の出身で、秀才を以て知られてゐた柴田勝衛氏——『讀賣新聞』の柴田氏とは、全くの同名異人である——が、中學部で英語の教師をしてをられ、私は誰よりもこの先生に可愛がられて、寄宿舎を出て學院のある原田村——今は神戸市に編入されてゐる——の、ある邸宅の離れを借りて、そこに二人で共同生活を営んでゐた。

この柴田氏が渡米を計畫してをられたので、私も潜かに私の考へを打ち明けて、一しよに米國へ行つて音樂を勉強しようと思ひ立ち、卒業と同時にそれを實行に移すべく決心し

たのだつた。そのために、私は姉や兄や、あまつさへ最愛の母をさへ欺いて、英文學研究を名として許しを乞うた。もちろん音樂志望では許しを得らるべくもない事を覺悟の上だつたが、しかし姉や母たちは、私のかくした志望を汲み取つてか、それにすら許諾を與へてくれさうにはなかつた。

十七歳の夏だつたかと覺えてゐる。大阪に空前の大博覽會が開かれて——第五回内國勸業大博覽會だつたか？——母はそれを見物旁々、岡山の姉を訪ねたのだつたが、突然病を得て病床に親しみ、遂に一年餘を旅の空で寢ついて、起つ事が出来なくなつて終つたのだつた。

そのころでも神戸と岡山とは、三四時間の旅程にしか過ぎなかつたので、私は母を見舞ふために、頻繁に兩地の間を行き來した。ある日の事である。私は柴田先生と一しよに、神戸の町へ買物に出たのだつたが、三宮驛の前まで來ると、何となく岡山の空が親しまれて、旅心が抑へられなくなつたので、柴田先生にお別れして、そのまま汽車に乗り込んで終つた。

義兄の家の玄關に入ると、姉が緊張した面持で迎へてくれて、「耕ちゃん、よくそんなに早く來られたのね。」といふのだつた。問ひ返すと母が危篤で、たつた一時間ばかり前に、私に電報を打つたのだといふ。よく早くにも遅くにも、一時間で神戸から來られる筈もないといふ事實を、心痛の餘りに見遁して終つた姉の滑稽な迂濶さを、しかし私は笑つてゐる隙さへなかつた。ひたぶるに母の病狀を氣遣ひながら、病室へ入つて行つたのだつた。

室には看護婦一人が病床に侍してゐるだけで、母はうつらうつらと眠つてゐた。暫く寢臺の傍らの椅子に腰を下して、病み衰へた母の寢顔を見守つてゐると、やがて母はおもむろに目を見開き靜かに私の顔へ視線をなげながら「何しに來たの？」と問ふのである。

母のその言葉はその瞬間ですら、自分には唯單なる表面の意味だけでは響かなかつた。眞逆に『お母さんの御容態が氣がよりでしたから……』と答へるわけにも行かず、餘儀なく『卒業も間近ですから、旅券のことなど御相談したいと思ひまして……』と心にもなく答へると、母はそれを訝がるやうな色もなく、疲れ切つた眼をもう一度見開いて『お前の來てくれたことも判る。もういくらも餘命のないことも知つてゐるのだ。お前がこゝへ來

た目的も判つてゐる。何を措いても音楽をやりたいといふお前の一心も、お母さんには判つてゐるのだ。従つてお前の英文學研究は、たゞ表向きのお實で、その實アメリカへ行つて音楽をやりたいといふお前の本心もちゃんとお母さんは見抜いてゐるのだ。しかし日本にも官立の音楽學校があるのだから、そこで一應勉強して、その上で何處へでも行くがよからう。兄さんにも姉さんにも、その事は私から遺言として、お前の願ひが叶ふやうにしてあげよう。』といふのだ。

私は全く何といつてよいか、言葉では到底表現する事の出来ないある強い氣持に壓せられた。第一年老いた母が、上野に官立の音楽學校がある事を知つてゐるだけですが、不思議なやうなものであつたし、それに音楽の好きな自分のために、その官立の學校が何ものであるかを、調べてさへ置いてくれたらしいのも、私には唯々有難く感じられたのだつた。それから一週間もたぬある夜、兄弟たちが隣室に集まつて、靜かに讚美歌を合唱して、病床を慰めてゐる中に、母は靜かに魂を天に歸した。兄弟たちのうち、實兄だけは入院中で、死床を守ることが出来なかつた。

自分に取つては、最も熱愛する母を失つたことは、悲痛事には違ひなかつたが、それが私を私の好む音楽の道へ導き入れてくれたのである。

母の死は私が十九歳の年の一月二十四日だつた。

見離された受験生

さてかうして許しを得ることが出来たものゝ、何よりも心配は、どうしたら入學が出来るだらうか、どうして受験に備へるべきであらうかといふ事だつた。私は全く途方に暮れて終つた。

私は一年早く學校へ入つた従兄弟の大塚を、たゞ一人の頼りにするほかはなかつた。大塚とても、眞に兩親の理解と許諾によつて學校へ入つたのではなかつただけに、死床に母の許諾を得たといふものゝ、彼同様周囲の反對を押切つて來た私に對しては、誰よりも多く同情的であり得た。

その夏私は上京して、目黒にある大塚の父の家へ身を寄せた。もう今となつては無いも

のになつた競馬場ですら、その頃にはまだ存在してゐなかつた閑散な目黒のその家で、大塚は毎日熱心に私の練習を見て呉れたのだつた。音階や音程の練習、聴音、新曲視唱など——私はすでに岡山時代の勉強で、オルガンも弾く事が出来た。歌も歌ふ事が出来た。難物は視唱——初見の歌曲を直ちに譜によつて歌ひ出す事——だつた。たゞの一度でも、大塚が鍵盤に當つてくれたならば、二度目は譜面から歌ふのは、何の雑作もない事だつたが、譜面から直ちに目へ、そして咽喉へと、お玉杓子を聲に變化させる事は、私には却々容易の業ではなかつた。

約一週間で、私が一番たよりにしてゐたこの唯一の教師は、とう／＼私を見離して終つた。「駄目だぞ、そんな事では入學はもとより音楽者になれはしない。」といふ最後の宣言を下しておいて、彼は友人たちと一緒に避暑旅行に上つて終つた。

見離された私にして見れば、まるで絶海の離れ小島へ、ただ一人置き去りにされた流人俊寛のやうな淋しさであつた。そしてその淋しさの奥には、正直なところ怨恨が、さらにその後には憤怒の炎さへもが燃え上つてゐた。「今に見ろ」——とはいふものゝ何といつ

ても、新曲は最も私を悩ました。

今となつては、導いてくれる人もなかつた。殊にそのころの關西學院は、まだ認可學校ではなかつたので、そのためあらゆる學科の試験準備をさへしなければならなかつた。

どうしたら試験をパスする事が出来るだらうか、どうしたら入學が出来るようか。いろいろ考へあぐんだ擧句に、私は私の道を見出した。さうだ、私には音階が歌へるのだ、ド・ミ・ソ・ドだつて歌へるのだ、自分で音階の物尺で、音程を計れない筈はない、よしんば試験までには間に合はなくとも、私の耳を叩き上げてやらう——と、この決心がついてからは、私は傍から見るとまるで氣違ひだつたに違ひない。目が醒めてから眠るまで、飯を食ふ間、脱糞の間も、たえず音程を頭の中に描いて、それを歌ふ事によつて耳の訓練を始めたのだつた。

かうした難行苦行の間にも、淋しい目黒の畑道を通り抜け、大鳥神社の傍を過ぎ、そのころには胸を突くやうだつた權之助坂——今の雅叙園のあたり——を上り、目黒驛を通つて、白金は瑞祥寺の唐豆腐屋を訪れる事は、私に取つて唯一の楽しみだつた。不幸、「紀伊

の國は音無川……』のお琴さんは、その頃にはもうこの世の人ではなかつた。肺病やみのやうな蒼白い聲を迎へ、初産後間もなく死んでしまつたといふことであつた。私は決してお琴さんを戀してゐたとは思はない。しかし死んだと聞くと、やつぱりその人が慕はしくお花を上げても見たくなる私だつたのだ。その都度唐豆腐屋の叔父さんや叔母さんは、私の手を取るやうにして、聲に氣を兼ねながら、死んだお琴さんのことどもを泣き囁くのであつた。

度膽を抜く市況放送

大塚の叔父の家を引拂つて、上野眞島町の下宿へ移つたその數日後、愈々恐れてゐた試験の日が來た。

その第一日、まづ私の度膽を抜いたものは、受験者控室の光景だつた。どこの私立音楽学校の生徒だつたか、その時には知らなかつたが、コーアユープンゲンを、まるで經濟市況の放送か何かのやうに歌ひのける連中が、肩で風を切つて遊戈してゐるのだつた。しか

もそれらの連中は、音楽の試験だけで済む。唯一人知るものもなく、頼む大塚にさへ見すてられ、その上學科試験の準備にまで追はれて、心臆してゐた私は、淋しく室の一隅に、小さくなつて控へてゐた。

第一日は、しかし自分でもとに角無難にすんだと思はれた。第二日、學科試験を終つて晝休みの時間、私は疲れ切つた頭を癒すために、門外へ出たところ、そこに見出されたのは、前の日から何となく私の心を惹いてゐた一人の青年の姿であつた。

その青年も私と同様、學科試験の重荷を、他人よりは餘分に負はされてゐる受験生であつた。従つて彼自身、私と同様な心境にあるらしく、私には何となく同類項といった感じがした。非常に眞面目さうな青年で、その點私自身がキリスト教の家庭に育つたせいも、彼もまたキリスト教家庭の子弟らしくさへ思はれた。(この想像だけは、しかし當つてゐなかつたことが、後になつて分明した。)

二人は上野の博物館の前を抜け、淺草の展望をほしいままにし得る高臺に出て、しかしその展望にも一向に心慰まず、たゞ試験の辛さばかり語り合つてゐた。景氣のいゝ經

濟市況アウンサー」の事なども、當然話題に上つた。その派手な私立音楽學生に引き較べて、自分たちの貧しさと、その貧しさの上に負はされた餘計な重荷とを考へる時、私たちの心は淋しかつた。それが愈々成績發表となると、全科受験者の中で、首尾よく難關を突破し得たものは、彼と私との二人きりだつたのだから、奇縁といへば奇縁のやうだつたのである。

やがて愈々難關の新曲視唱の當日となつた。幸田延子先生をはじめ、五、六人の職員の列座の中で、黒板に書かれた新曲を歌ふのは、考へただけでも恐ろしい事だつた。私は恐怖に高鳴る胸を抑へて、自分ではそれでも落ちつけるだけ落ちついたつもりではあつたが、しかしいくらか聲が慄えてゐるのを自覺せずにはゐられなかつた。

幸田先生がまづ口を切られた。「怖がらずに、もつとしつかりと……」といはれて、あの鋭い目を私に向けられた。同じ曲を、私は二回繰返して歌はせられたが、試験場を出る時には、『もう駄目だ』と思はずにはゐられなかつた。

私はそのままで宿には歸らないで、三田にゐる小姉の所へ遊びに行つた——といふより

は自分の失望と落膽とを忘れるためでもあり、また一つは死床の母への私の誓ひを、私自身が無力から果すことの出来なかつたことを、母の靈に詫びようためでもあつた。

私は小姉の家で幾日かを過したが、それでも成績發表の日が來ると、夕方私の下宿へ戻つた。私が室へ入つた時、まづ私の眼を射たものは、机の上に置かれた一枚の手紙であつた。それには紙一ぱいに『入學萬歳』といふ四字が、大塚の叔父の達筆で、墨黒々と書かれてあつた。

もうその時は、學校の門が、閉鎖される刻限ではあつた。しかし私は、躍る胸を逸る二本の足で支へて、學校へ駆けつけた。叔父の知らせが、決して偽はりでないことを確かめ得るまでは、それでも私の胸には、まだいくらかの不安が潜んでゐた。

『山、田、耕、作』の四文字を、掲示の中に見出した時、恐らく私の眼には涙が浮んでゐたであらう。あゝ、九つの年からのあこがれは、こゝに實現されたのだ。

私と一緒に入學を許可されたのは、男十五人、女十五人、併せて三十人で、その中には今宮内省の樂部にゐて、その重鎮となつてゐる山井基清——それが私の心を惹いた『同類

項』の青年であつた。——や、母校でヴァイオリンの教授となつてゐる川上淳などがゐた。しかし、一緒に入つた男性十五人は、五人落ち、六人落ち、規定の年限で滞りなく業を卒へたのは、私と山井の二人きりであつた。たつた二人、全科受験の難關を抜けた私と彼が、仲よくお手々をつないで卒業したのだから、奇縁はさらに深い。

それではほかの十三人は？ 取り分け母校の教授とまでなつた川上の落ちたのは？ それを語るには、まづ音楽學校時代の私の生活懺悔を繰り擴げなければならぬ。

寄宿舎内の珍トリオ

入學は許されたものゝ、もとより兄妹たちの心からなる許しを得たのでなかつたので、私はどこからも學資を仰ぐ事は出来なかつた。一番上の姉だけが、それでも月々五圓の金を恵んでくれたが、いくら物價の安いその頃でも、五圓で下宿し、書物を買ひ、月謝を納める事は不可能であつた。餘儀なく私は労働をしなければならなかつた。速記をしたり、家庭教師をしたり、ずつと後になつては、これだけは卒業まで親友中の親友にさへ打ち明

けなかつたある肉體的な労働をした。それは新宿の遊廓あたりでヨナ曳きを——つまり車曳をしたことである。

しかし労働苦學はしたものゝ、私は決して尾羽は打ち枯らさなかつた。音楽學校へ入つたから、特に氣張らなければならぬといふ意味ではなかつたが、臨終の母の許しによつて、漸く入れた學校だと思ふと、どんなに苦しくとも變な顔はしまい、どんなに貧乏してもボロは下げまい、内外ともに立派にやつてのけねば……といふ意地があつた。鎌倉の海岸で黒鯛を釣つてゐる時、ちつと見守つてくれてゐた母の姿は永遠に消えざる印畫として、私の頭の中に焼付けられてゐた。それは私に取つては有難い偶像であつた。

私の貧窮を知つた義兄は、傳通院横の、獨逸協會のすぐ傍にあつたコーツといふ宣教師の建てた寄宿舎へ私を紹介してくれた。そこで私は四級上だつた外山國彦を知り、また同級の大屋といふ快男兒を友とした。

大屋はそのころ陸軍系の學校であつた成城を出て、さらに幼年學校へも進んだといふ變つた經歷のもち主で、我々よりは年長でもあつたし、身長は六尺に近く、最初軍人を志し

ただけに體格も堂々たるもので、帽子の被り方までが軍人風だつた。

外山はそのところ天才肌の學生として知られ、その聲望は全く校内を風靡してゐた。あの廣い額を、いやが上にも露はすやうに、帽子を仰向けにかぶるのが癖であつた。それとは反對に、私はやゝ前下りに帽子を被る習慣であつた。この三人が打ち揃つて、上富坂から向富坂を通り越し、帝大の前を抜け、一高の傍を通つて、毎日上野の學校へ通つたのである。その寄宿舎にはこのほか今の三井銀行下關支店長や、小森啓吉——小森讓君の令兄で後に柏木敏と名乗つてゐた、今パリに滞在してゐる——などがゐた。小森はそのころ音楽學校を志して、受験の準備中であつた。

しかしいつでも問題の中心となるのは、私共三人のグループであつた。たしかにこの三人は、珍妙なトリオをなして、始終話題を寄宿生たちに提供してゐたのだつた。

ある夜私たち三人は、寄宿舎内の風呂に入つた。引締つた筋骨と、しかしそれで何の間延びのした様な、桁外れな身長をもつた大屋は、その體格通り、氣が利いて間の抜けたやうな男であつたが、その巨漢が風呂桶一ぱいに、悠々と身體をくつろげて、快げに手拭な

ど使ひながら、我々の入る空間を作つてくれようとしなないのだ。私はそれが癢に觸つたので、風呂桶の縁に立ちはだかつて、中の大屋を感しつけてゐるうちに、どうしたはづみか、足をこらせて、風呂桶の中へ落ち込んで終つた。しかも跨間のある物を、大屋の鼻につきつけて、彼の頭を股にしつかり挟んでしまつたのだから、私も動く事が出来なかつたし、彼もまた身動きが出来なかつた。外山は外山で、この椿事出来に驚いて終つて、流しを這ひ廻つてゐるだけだつた。騒ぎを聞きつけて他の連中が駆けつけて、しばらくはこの珍妙な光景に、たゞ笑ひ崩れてゐるだけだつたが、それでも漸く私たちを救ひ上げてくれた。

この寄宿舎生活は、たしかに私を益してくれた。時には繼母のやうな皮肉さで、歌の事で私をいぢめる外山であつたが、それだけに私に取つては好きアドヴァイサーでもあつた。私たちは大いに寄宿舎の生活を樂しみ、三人で仲よく、そして横暴に、舎内のあらゆる設備や機關を獨占してゐた。

妻の少女時代

コーツ氏の邸は寄宿舎のすぐ傍にあつた。邸内に子女の養育掛をしてゐる日本人の婦人がゐて、それに英語をよくしゃべる、目玉の大きな、活潑な少女がゐた。時には寄宿舎の屋根などへ上つて、コーツ氏の娘などと、英語でおしゃべりをし合つてゐることもあつた。寄宿舎で勉強してゐる時など、このいたづら娘が不意に遊びに来てくれることもあつた。

この少女を初めて知つたのは、しかし入舎後の事ではない。コーツ氏と義兄とは、ちやうど兄弟の様に親しい仲だつたので、その關係上私もコーツ氏の家に入りましたことがあり、五つ六つの頃のその少女を、私はすでに知つてゐた。そんな關係から、少女は舎内の誰よりも、最も私になつてゐた。

ある日の事である。私はこの少女を抱き上げて、庭の柿の木の葉にその手を届かせようとした。突然、かすかながら悲鳴を揚げたので、私は驚いて彼女を抱き下した。少女は腰を抑へたまゝ、黙つて自分の家へ走つて行つたが、あとで聞くと、袂に入れてゐた編棒が太股につきさゝつたのださうであつた。——この少女、今は私の妻となつてゐる。そのころからの負けぬ氣を、今に持ちつゞけてゐる彼女である。

祈るコーツ氏

その思ひ出をもつ寄宿舎は、その後間もなく閉鎖されたかと思ふが、それよりも一足先に私は、寄宿舎にゐなくなつてゐた。それにはかうした譯があつたのである。

何の問題だつたか、今では確かに記憶しないが、多分學生の事だから、例の賄の問題か何かだつたと思ふ。ちよつとした紛擾が持ち上つて、私たちのトリオは、選ばれて代表に擔ぎ上げられ、舎主のコーツ氏へ談判に行つた事があつた。

私たちの權幕が餘りにも厳しく、暴言があまりにも過ぎたので、それに堪へ兼ねたコーツ氏は、そこは宣教師らしく、跪いて祈禱をはじめたのだつた。それをまた私たち三人は、立ちほだかつたまんまで、しかもわざと大きく目を開いて、祈るコーツ氏を儼然として見下してゐたのだつた。

それやこれやが原因になつて、私は寄宿舎を飛び出して、學校のすぐ後にあつた翠松館といふ下宿へ越した。私の考へでは少しでも學校の近くに居て、往復の時間を少しでも減

少し、それを勉學の時間に捧げて、學校のピアノを借りて練習もしたいといふつもりであつたのだが、しかし私のこの計畫はものゝ見事に外れて終つた。あまり學校に近いために、私自身に取つて便利なだけ、同窓生たちにも便利なので、私の部屋はまるで彼等のクラブとなり、日がな一日、そこには芋の皮が堆積し、汗粉の椀が轉がり、従つてそれらの支拂ひが積りに積つて、さらでだに貧弱な私の財囊をいやが上にも脅かした。とうとう私は三級上の原田潤を保證人とし、生れて初めての借用證書を作つて、とぼとぼとその下宿を立ち出で、藏前高工——今の工業大學——の傍らにある淺草教會へ寄寓した。私がそこで與へられた部屋は、三坪ばかりもあらうか、疊ならば横に六疊を長く並べられる鰻の寢床よろしくの部屋で、そこへ川上と小森が一しよに來た。私がそこへ移つたのは、日曜學校で教へたりなどして、その代り部屋代を無料にして貰へるからであり、川上は私への同情から、小森は私たちを慕つてついで來たのであつた。その頃彼は分教場へ通つて、受験に備へてゐたのだつた。

私たちの部屋の直ぐ傍には藏前の堀割があり、そこには毎朝たくさんな肥船がもやつてゐて、それが私たちの鼻先に、得もいへぬ香りを送つてゐた。私たちはその肥船を毎日目前にして、その時はじめて人間は生きるためには、人糞をすら舌の上に載せる——事實肥船の人たちがさうして肥の加減を見てゐた——といふ事を知つたのだつた。

誠に文字通り細い、臭い生活ではあつたが、おかげで翠松館への借金は綺麗に片附いてしまつた。

書き落したのが翠松館時代に、一つの美しい思ひ出があつた。往來を距て、私の部屋と向ひ合せの二階には、南薫造、富本憲吉の二畫伯が住んでゐた。私たちは夜など、よく部屋で合唱をしてゐたものだが、すると、初夏ころほひの頃、向ひ合せのその二階からマンドリンの音が聞えはじめ、私たちの合唱を助けてゐた。翌日になると、二畫伯筆の繪はがきに美しい文句を書き記して、私の下宿へ届けられた。

大 助 平 主 義

入學當時、學校では川上、大屋、それに私が豫科での三人男であつた。三人ともその頃

には大いに勉強をしたものだが、殊に私は人にこそ語らないが、悲痛な決心を固めて居たので、取りわけ勉強をはげんだ。たゞ私は、人には非常な暢氣者らしく思はれてゐたので、その私が人知れぬ勉強の結果、豫科を終る時一番になつた時には、最も私とは親しんでゐて私を知る筈の二人ですらが驚いた。

その頃幸田先生の令弟修造君が入つて來た。秀才揃ひで聞えた二高にゐた事があり、豫科を通らずに入つたために、私たちよりは却つて一級上にゐた。

音楽學校は中學二年修了で入學出來るので、生徒は知的に貧しかつた。そこへゆくと、彼は高等學校に籍を置き、私は中學全科を卒つて來てゐるので、その點何かにつけて氣が合つて、私は彼にエスペラントを教へたり、速記術を傳へたりする代り、彼からも多くを學び得た。私は彼を『修公』と呼びならはしてゐたが、その修公と私共を中心とし、何時となく出來上つたのが、彼呼んでいふところの『大助平主義』である。

『大助平主義』は讀んで字の如く、『助平は須らく大なるべし』といふにある。碎いていへば『どの道女に惚れるなら、世界一の女に惚れる。下らぬ女には手を出すな』といふこ

とである。いふ所は甚だ奇矯であるが、事實は學問第一主義で、むしろ『助平禁制主義』といふに近い。

それほど私たちの勉強は猛烈なものであつた。勉強には監視つきで、例へばチェロを弾く時なども、何人かが揃つてボーイングを練習し、誰が最も長く弓を引き得るかを競争するといった工合であつた。

とはいふものゝ、青春の血が漲るものであつて見れば、美しい女性の新入生などを垣間見て、心穏やかであり得る筈はなかつた。一つには當時學校には専任校長がなく、従つて極端にいへば無政府状態であつただけ、却つてさうした自治的精神が芽生えたわけであるが、いつとなく上級生の間に一つの不文律が出來上つて、新入女生徒に對して自ら各自の繩張を生じ、各自の『愛人』には、斷じて他の容喙を許さぬ事になつてゐた。現に私は本科一年の時、新たに豫科へ入學して來た今のT・O夫人を發見すると、斷然『彼女は僕のものだ』と宣言して、全くT子さんを獨占して終つた——といつても大助平主義者のさうした戀愛は嚴密にプラトニックであつたことを、O氏のために特に申上げておきたい。

落第哲學を聽く

『豫科三人男』は豫科にゐる間、それこそ火の出るやうな勉強をして、各科目に精勵してゐたが、本科に進むと、私一人は別として、川上、大屋の二人は、全く天才的な勉強の道を辿り始めた。

私は本科に入る時、志望は作曲の道にあつたが、當時學校にはまだ作曲科の設けがなかつたので、幸田先生の意見もあり、止むなく自信はないながら、聲樂科に入り、大屋も私と共に聲樂科へ進んだ。川上だけはヴァイオリン科を選んだ。

川上はいふ、『俺はヴァイオリン科だからヴァイオリンを勉強すればよいのだ』と。従つて彼はヴァイオリンの時間だけ勉強して、英語の時間など、一と月を通じて一時間位出席した程だつた。大屋はいふ、『俺は將來の大聲樂家だ、宜しくまづ身體を築き上げねばならない。』と。——その宣言に従つて、彼は庭球に凝りはじめたが、その登校姿は目ざましいものであつた。何時でも着替へが出来るやうに、袴を二つ重ねて恰度前垂れのやうに着物

の前に縛りつけ、ラケットに辨當をぶら下げて歩くのだつた。どこでも、いつでも、氣が向くと、彼は胸を擴げて發聲の練習をやるのだつたが、彼も亦聲樂の時間を除くほか、殆んどどの科目にも出席しなかつた。

そんな始末で、三人男のうち、無事に一年から二年に進んだのは私一人で、川上と大屋とは、物の見事に亡つて終つた。しかし川上には川上の哲學があつた。彼の見解によれば、ヴァイオリンの勉強は、三年やそこいらで完全に出來上るものではない。少くとも六年は本科に止まつてゐるべきだ、落第はむしろ本懐だといふのである。従つて彼は及第者の名簿から洩れたことを、本望とこそはすれ、決して失望落膽しなかつた。

しかし大屋はさうではなかつた。この將來の大聲樂家を容れることの出來ない音樂學校は、音樂學校としての意味をなさないといふので、私たちが何と説明しても、宥めても、決していふ事を聞かなかつた。憤然校長室の前に小便してアメリカに渡り、今でもシカゴあたりに放浪的な滞在をつゞけてゐる。

大屋を失つた代りに、私共の仲間には男爵滋野清武や、上野の教授萩原英一が加つて來

た。滋野は分教場に通つて、入學試験に備へてゐたが、大屋と同様幼年學校にゐて、ドイツ語を學んで來た彼に、苦手は英語の試験であつた。

私は彼のために英語の復習を見てやつたが、愈々試験といふ前夜、大體この邊が出るだらうと見當つけて、わづか一ページだけ語記させたのが、見事に當つて、不得意な英語に、彼はふしぎにもパスしたのだつた。その當時の英語の先生は、安藤幸子先生の夫君だつたと思ふ。

先生といへば、今の満鐵總裁、伯爵林博太郎閣下も教育學の先生で、馬車か何かで出勤された。その頃から、もう頭は禿げてゐたが、それでも色白で品があり、女生徒などの間には相當興味をもつて見られてゐたが、しかもこの殿様、甚だ江戸前で、ぶつきら棒で、男でも女でも、みんな名前は呼び捨てである。それが、生意氣だと問題にもなつたが、結局『伯爵様だから』といふので、みんな諦めて終つたことがある。

音樂學校時代の思ひ出はまだく／＼却々に盡きない。

快男兒の戀

話は前後するが、コーツ氏の寄宿舎から、上野の下宿翠松館へ移る以前に、私は暫らく芝南寺町の小姉の家に身を寄せてゐたことがある。そこから程遠くもない伊皿子坂上の御所の前に、立派な邸宅を構へて、男爵滋野清武が住んでゐた。妙な縁で彼と知り合ひになつてからは、住居が近かつたため、私はしげ／＼と彼の家に出入して、むしろ小姉の家よりも、滋野の家に過す方が長い位であつた。

従つて滋野の家の中では、誰一人として私の本名を呼ぶものはなく、單に『山ちゃん』といふ愛稱で通つてゐた。それ程、私はその家の客としてでなく、むしろ家庭の一員として親しく取扱はれてゐたわけであつた。

彼が東京音樂學校本科入學を志した時でも、そんな譯から私はする／＼べつたり彼の家庭教師を引受けねばならない羽目になつたのだつた。彼ばかりではない。今は川上の妻となつてゐる彼の直ぐ下の妹、某辯護士に嫁いだその下の妹、そして冷蔵で有名な葛原氏

に嫁した末の妹、それらの令嬢たちの英語までも、私は見上げてあげねばならなかつた。

やがて前にも述べたやうに、滋野の冒險的受験は、彼の最も苦手としてゐた英語に、僥倖的な満點を得たことによつて、もの見事に成功した。そして私たちは毎日三田の薩摩原から、上野廣小路まで電車で通つたものだつた。滋野とその妹三人、そして私、この五人は薩摩原終點の車掌集会所の毎日の話題に上つたことであらう。いや、そればかりではない。ある日など、お茶の水女學校に通つてをつた滋野の末の妹が、私を上野の校門まで送つてくれたので、その翌日田中といふ生徒監の小母さんからお目玉を頂戴したことさへあつた。

この三人の妹の誰だつたかに例の大屋が戀を感じてゐた。そして私を刎頸の友としてゐた彼は、私にも妹の一人を娶るやうにすゝめた。大屋の戀が酬われ、私が彼の奨めを聞いたならば、滋野男爵の三人の妹は、兄弟のやうに親しかつた上野三羽鳥の妻になつてゐたかも知れなかつたのだが、しかし私には學業の途中で結婚することなど、到底思ひも寄らない話だつた。それに一平民として世の中に飛び出して來た私には、貴族との結婚とい

ふ事に對しては、よしそれが親友の妹であつたにせよ、先天的な嫌忌の念が伴つた。私は戀愛の危険が身に迫らないうちと思つて、斷然居を移して終つた。

上野翠松館に下宿したについては、かうした一つの理由もあつたのである。

快男兒大屋が戀を遂げずして、遠くアメリカに去つたことは、くどくどしく再説するまでもあるまい。

書き忘れたが大屋は六尺豊かの偉丈夫でありながら、一面甚だお洒落であつた。

ラッパは叫ぶ

豫科から本科へ進んだ時、私と大屋は聲樂科を選んだが、當時聲樂科に籍を置くものは、副科として管樂器を學ばねばならなかつた。體軀偉大な大屋は、その身體にふさはしくトロムボーンを授けられ、私は自らトロムベットを選んだ。

それに一寸した譯があつたのである。そのころ私が兄事してゐた外山國彦が、やはりトロムベットをやつてゐたからなのだ。校内で名聲隆々たるものがあつた外山を眞似ようと

した私の稚氣を笑つて貰つてもいい。

外山のトロムベットが、どれほどの妙音を發したかを、今では私は覚えてゐないが、その亞流たる私のそれは、たしかに隣人への惱みの種であつた。

豫科から本科へ進む時に、成績拔群とかいふことになつたので、その夏褒美といふ事で、私は義兄夫婦から、輕井澤へ伴はれた。もちろん私はトロムベットを忘れはしなかつた。輕井澤へ行つてからは、私は暇にまかせて、朝から晩までそれを吹き通しに吹き鳴らした。といつて決して本當の音が出たわけでない。私のトロムベットは、時に悲鳴にも似た叫びを擧げることが出来るだけだつた。

今と違つてまだその頃は、輕井澤にはちらほらと家が建てられてゐるだけであつた。それ故隣家には程遠かつたが、その遠い隣人にすら、私のトロムベットは耐へ難い感じを與へたものである。最近までどこかの公使をしてをられた鮭延氏が、まだ大學にをられた頃で、外交官試験の準備のためにやはり輕井澤に来てをられた。その鮭延氏からの紳士的抗議を、私はまづ受けなければならなかつた。續いて私の義兄にあてゝ、外人避暑客連署の

抗議文が舞ひ込んだ。せつかくの避暑氣分が、トロムベットのけたゝましい悲鳴によつて打ち壊されて終ふから、絶対に止めて貰ひたい——といふ手嚴しい抗議だつた。止むなく私はその日から峠の上まで足を運んで、悲しくトロムベットの稽古をした。

それでも外人の抗議があまり癢にさはつたので、時には特殊な方法によつて、練習をしたこともあつた。それは風呂桶の中に入つての練習であつた。しかし私のトロムベットはそれらの抗議を反撥して、嚙喰たる響きを揚げるまでには行かなかつた。

外人の排撃には怯まなかつた私ではあつたが、トロムベットの堪らない悲鳴には、たうとう私自身で兜を脱いで、トロムベットをすててフルートに轉じ、それから間もなくチェロに移つた。

その間に私の居も、小姉の家から上野の下宿に變り、そこで借金を山積させて、藏前の鰻の寢床に轉じてゐる。

藏前へ轉じて間もなくの事である、親友修公が死んだのは。そして彼の死と同時に、私は彼の後繼者として選ばれる事になり、彼が専攻してゐたチェロを、私の副樂器として引

繼ぐこととなつたのである——そのころ第一高女に通つてをつた淑女たちは、一人はヴァイオリンを左手に抱へ、一人はチェロを左手にさげた、やせ型な學生の姿を朝毎に見かけたであらう。雨の日には番傘に足駄といふいでたちの……。それは鰻の寢床を頷ちあつてゐた川上と私とであつた。

ユンケル先生の頭

そのころ學校にはユンケル先生がをられた。私はチェロの手ほどきを、この先生から受けたのだつた。

習ひ始めてから僅か一週間ほど経つた時である。先生は私に音階を奏けといはれた。ハ長調の音階を二オクターヴに亘つてやれとの注文なのだ。私は小鬚を汗ににちませて一生懸命にやつて見たが、一生懸命になればなるほど、音程は狂ふし、ボーイングはとちろのだつた。痲癢もちのユンケル先生は、いきなり私に頬打ちを食はせておいて、『俺は一度もチェロを學んだことはないのに、この通り弾けるではないか、お前はこの樂器を學んでか

らもう一週間になるといふのに、どうして弾けない筈があらう。』と、一應は判つたやうな、甚だ判らないお説教なのである。私はしかし私の負けじ魂から、さらに三日の猶豫を乞うた。

(75) ャツメルテンイの成完未

そのころ私はチェロだけを、一日十時間も稽古して、指先の皮は悉く破れ、それこそ血の出る思ひをしたものであつたが、僅か三日間の練習が、一足飛びの上達を齎らしさうな筈はなく、またしてもユンケル先生の頬打ちと叱責、それでも私はこみ上げさうな憤怒の情を仰へて、さらに一週間を約し、絃に軋る練習をはげんだが、結果は依然として香しくなく、私の指は、私の弓は、決して意の如くに動いてくれなかつた。『私は一度も……』とユンケル先生が始めた途端に、私は堪へ切れなくなつて、いきなり立ち上つて怒鳴り返した。『先生あなたは三十年の間、ヴァイオリンを奏いてをられます。ヴァイオリンとチェロと、大きさは違つても、もと／＼同じ系統の樂器ではありませんか。だのに僕はまだ弓を握りはじめてから、まだ十日しきや經たないんです。』——と、先生は烈火のやうに憤り返して、頬打ちのかはり弓で私をひつばたかれたのだつた。私も決して敗けてはゐない。

その弓を引つたくつて、ぼきつと二つに折るが早いか、今度は拳固を握りしめて、チェロに一撃、大きな穴を胴に明け、その拳固を緩めもせず、そのまま握り固めて先生を追ひ、たうとうその頃は空部屋だつた校長室へ追ひ込んで終つた。

さすがに亂暴者の私であつたが、神聖なる校長室へ、握り拳をふりかざして、闖入するほどの蠻勇は持ち合せてゐなかつたので、そのまゝ扉の外に身を潜めて、先生の出て來るのを待つてゐるだけだつた。心中『毛唐のくせに生意氣な、みんなが貴様にはいぢめられてゐるのだ。出て來て見ろ、みんなの敵討ちをしてやるぞ。』と、握つた拳をほどもしないで、今か今かと待ち構へてゐるのだつた。

先生もさうした氣配に心づかれたらしく、やがて悠然とドアを開けて、『お前はなか／＼勇敢だ』と、ゆつたりと仰せられたのには、振り上げた拳の持つて行きどころもなかつた。しかしそれ以來、私は先生の特別な恩寵を蒙つて、一つには義兄と同棲してゐたことなどから、割合に英語も喋べれたりした關係で、まるで先生の私設秘書のやうになつて、稽古の時など、先生の通譯をしたり、生徒たちの希望を、先生に傳へたりする役廻りになつて

終つた。

ユンケル先生には何といつても熱があつた。音樂の技術だけでなく、藝術そのものを吹き込まうとする眞剣さがあつた。或ひはそれはユンケル先生だけでなく、その頃は全校がさうした意氣に燃えてゐたといつてもいい。

オーケストラの練習の時など、先生は禿げ頭から湯氣を上げながら、懸命にタクトを取られるのだつたが、先生の熱心さにも拘らず、演奏が旨くゆかなかつたりすると、矢庭に指揮棒をへし折つて、どんだん車で歸つて終はれるのだつた。教務掛の先生が驚いて飛び出して、引止めにかゝつたことも一再ではなかつた。

ある時、それは『アタリー』の合唱を、全校が講堂に集つて練習してゐる時だつた。先生の頭からは、例の如く湯氣が立ち上つてゐた。その日の成績は殊の外よかつたので、従つて先生も上機嫌であり、湯氣の立ち上るさまも、まるで温泉場の湯煙のやうに、ゆつたりとしてゐた。

私はテノールを受持つてゐた。『行けるものは……』といふテノールのパートに際立つて

旋律のいゝ所がある。前もつて謀し合せてゐた私たちは、そこまで来ると『行ける者』をもぢつて、一段と聲を張り上げて『ユンケル坊主の禿げ頭』と歌つたものだ。日本語の判らない先生は、それでも目を細くして“Sehr gut, sehr gut”と喜んでをられた。

そんなわけで、ユンケル先生は、全校の生徒たちから畏れられもしてゐたが、また慈父のやうに親しまれてもをられた。

先生 瞞 着 術

ユンケル先生の稽古の中で、何といつても皆を泣かせたのは、『聽音』といふ科目であつた。ある音楽的なフレーズを、時にはソナータの一主題や何かをピアノで弾いて、それを譜面に寫し取らせる、いはゞ音楽的書取りであつた。それが一つの旋律だけでなく、すべての和音を完全に寫し取らねばならないのであつたから、その頃から作曲に心を潜めてゐた私に取つては、何よりも楽しい科目でもあつたし、従つて時々先生の賞讃をも博するほどの成績をも示し得たが、他の生徒たち、特に女生徒たちに取つては、何よりも難關であつた。

であつた。

従つてユンケル先生の私設秘書であつた私の所へは、時々女生徒たちの心づくしの差入物が届けられた。時には餡パンであつたり、時にはお団子であつたりした。さうした差入物が多い時には、私はわざと先生に質問を發して、『聽音問題』の提出をはゞむのだつた。厳格なやうでも人のいゝユンケル先生は、うま／＼と私のトリックにかゝつて、ドイツやアメリカの樂壇の現状などを、長々と一時間に亘つて喋り立てることもあつた。時にはわざわざ自室から譜本まで持ち出して、『ローエングリン』の歌劇物語を、弾き語りにして話して下さることもあつた。さうした先生の物語は、私たちに取つても面白くはなくはなかつたし、また一面有益でもあつた。

この『瞞着術』はユンケル先生だけでなく、他の先生——時には日本人の先生にも用ゐて、しば／＼優秀な効果を収めた。音樂學校の出身で、歌文を講じてをられた、そのころ作歌や譯詞で有名だつた鳥居枕^{まごど}先生なども、その被害者の一人だつた。瞞着とも知らず、うま／＼私たちの筈にかゝつて、椅子の上にあぐらを掻きながら、腕まくりして話される

のである。お名前が珍らしいので、時々女と間違へられることもあり、『また枕子宛ての手紙が来たよ。』と、自分から進んで話されることもあつた。

ある時、この先生の時間に、私は女生徒の一人から目くばせを受取つて、立ち上つて八百長質問を始めた。しかしどうした風の吹きまわしか、その日の鳥居先生は甚だ敏感であられた。『その手は食はぬぞ』とたつた一言、私は面目を一度にべしやんにされて、それでもそのまゝでは引込みがつかず『先生、これは全クラスの總意です。』と、漸くお茶を濁した事もある。

久野久子女史の白眼

本科一年の聲樂科は、その時合せて四名、男は僕と大屋の二人、あとの女二人は、今女子大にをられる伊藤鈴子女史と、ちんころ——可愛くて無邪氣なところから、この愛稱の方がよく通つた荒井といふ人であつた。

ある日この荒井さんが、手酷しくユンケル先生に叱責されて、泣き濡れて教室から外へ

出て来た。廊下の片隅まで来ると、彼女は僕にこま／＼と、その苦しみを訴へるのである。ユンケル先生の私設秘書として、通譯の役を知らぬ間に仰付かつてゐた關係上、私は止むなく彼女を慰めたりなどしてゐたが、埼玉の豪家の娘に生れて、苦勞もなく育つて来た彼女は、無遠慮にも近いほど無邪氣だつた。揚句のはては私の手を取つて、ぼろ／＼と大粒の涙の雨を、握り取つた私の拳の上に降らせたりなどした。死んだ修公と／＼もに大助平主義の主唱者だつた私は、それだけにすつかり弱り込んで終つて、誰も見てゐなければよいがと、一生懸命に氣を配つてゐる折も折、久野久子さんが通り合せて、すつかり二人の様子を見られて終つた。

後刻またしても廊下で久野さんにおつかると『あんなことしてゐちや、危いわよ。』と、氣にかけてゐた私に取つては、皮肉とも見られるやうな、横目でにらんでの忠言だつた。もちろんそれは、皮肉でもなければ、悪意のある厭味でもなかつた事は判り切つてゐるのだつたが……しかし荒井さんと私とが、決して危くならはしなかつた證據は、彼女がその後親友外山國彦の妻となり、賢夫人として惜しまれつゝ、數年前逝くなつた事でも判らう。

かういへば、ユンケル先生は嚴格一方のやうにも聞えるが、その實甚だ溫情的なところもあつた。ことに私は先生に可愛がられて、ある夏、先生が避暑に行かれた跡、その家の留守番をさせられたことがあつた。近所の商人からもつて來させたサイダー、平野水、ビール等々を、そつくり私に提供した上の事である。築地居留地にあつたその留守宅へは、川上などもよく來て泊つて行つた。

弈にかゝる

學校では先生瞞着以外に、よくも騒いだと思はれるほど、いろ／＼といたづらをした。とりわけ豫科時代から三羽鳥であつた川上、大屋、私の三人は最も甚だしかつた。俊敏隼の如き川上は、最も機敏に立ち廻つて、決して尻尾を出さなかつた。巨漢大屋は、總身に智慧が廻りかねたわけではなかつたが、やはり大男だけに間の抜けた惡戯をして、よく尻尾を抑へられた。剽輕者で通つてゐた小柄な私は、惡戯はしても、それで人の氣を悪くするやうな事はなく、大てい滑稽事として笑つて濟まされた。

豫科のころ川上と大屋とが、飛んでもない惡戯をはやらせはじめた。片足を高く上げて、豎臺ピアノの上を越させる遊戯である。大男の大屋には、それはもとより造作のないことであつた。俊敏にして瘖せてゐた川上も、うまくこの遊戯をやりおほせた。二人は私にその妙技をまづ範示した後、「お前もやつて見ろ」といふのである。それが二人の仕掛けた弈だとは、實は私は氣づかなかつた。生來の負けじ魂から、二人に出來て俺に出來ない筈はあるものかと、「やつ」と一聲足を上げたら、その途端に二人の腕でむんづと抑へられ、ちやんと用意があつたと見えて、その足をピアノへ繩で縛りつけられて終つた。さうして足一本を持ち上げたまま、私が身もがいてゐる所へ、折悪くも入つて來られたのは幸田先生だつた。私は悲鳴を擧げて終つた。

その時は何でも修公を通じて、幸田先生へ泣きを入れたかに覺えてゐる。が、こんな惡戯や失敗やは年中あつたことで、一々は覺えてゐない。

二人の天刑病者

ピアノといへばピアノを利用して、ほかでは真似の出来ないやうな悪戯をやつたこともある。

学校内には十字に交叉した二つの廊下があつて、一方の廊下の突き當りにはピアノの練習室があつた。悪童の一人はこの練習室に立て籠つて、一心にピアノをさらふと見せながら、その實硝子戸越しに廊下へ目を配つて、通行人の監視におさ／＼怠りが無い。悪童の他の二人は、廊下の交叉點に近く、別れ々々に身を潜め、用意の細引を廊下に流し、廊下の足音と、ピアノの音とに等分に耳を傾けてゐた。

練習室へ通ずる廊下を、進んで来るものが、蟲の好かぬ女生徒であつたり、嫌ひな先生であつたりした場合には、練習室のピアノの奏樂は、豫ねて打合せた曲に變つて來るのであつた。それが中途に綱を張つて、待ち伏せしてゐる潜行隊への合圖である。あとは足音の近づくのを待つて、さつと二人で細引繩を引けばよい。

嫌ひな先生にはこの敷設水雷を食はせるだけでなく、その先生が宿直の時など、少々質のよくない悪戯もし向けた。殊にその先生が何か暴言を吐いた日など、放課後居残つてテ

ニスやる、それも猿股一つ、足は跣足といふていたらく、テニス靴を買ふ金もなかつたし、第一そんなものを欲求するには、あまりにも蠻的な私たちだつた。テニスが濟むと土足のまんま浴室へ飛び込んで、宿直の先生が入浴しようとする時には、もう深夜の錢湯も及ばないほどの泥湯になつてゐた。

ある年——本科一年の時だつたか、學校創立の記念祭があつて、型の如く運動會が開かれ、模擬店が設けられ、芝居や何かと餘興があつたが、川上と私とは、何か變つたことといふので、さん／＼頭をひねつた揚句、考へついたのでが假裝行列で、それもたゞの假裝行列では、別段珍らしくもなかつたのであるが、私たちには特別のたくらみがあつたのである。

川上と私とは、長髪にこつてりと油をつけて、それに頭から灰をかぶつた。梅干を半分切つて種子だけ取り出し、それを身體中所嫌はず張りつけて、その上からも灰をあびた。この二人の癩病患者は、行列の中でも最も横暴を極めて、厭がつて逃げ廻る女生徒などには、わざとすり寄つたり、しなだれかゝつたりして、到る處悲鳴の渦をわかした。

記念日の翌日は休みだったので何事もなかつたが、さらにその翌日二人は教務室へ呼び出されて、案の定お叱言を頂戴した。赤川先生といふ、とても物判りのいゝ好人物の教務主任が、この二人の亂暴者をあしらひかねてか、半ばおどくしながら小言を言はれたのには、却つて私たちは閉口した。

自転車美人轉覆事件

この悪戯は校内だけではなく、さらに校外へも進展した。

藏前にゐた時など、川上も私も雨傘の用意がなかつたので、出入りの商人から徴發して出かけた。八百七だの、三河屋だのと、筆太に書かれたのを頭にかざして、前にも書いた足駄ばきでの登校であつた。

放課後雨が止んだ時など、辨當箱をかゝへ、樂器を手にした私たちに取つて、その雨傘は甚だ荷厄介であつた。しかし後々の事を思へば、さすが亂暴者の私たちも、借りものの傘を棄て、歸るわけにはゆかなかつた。

頭を絞つた擧句の妙案が傘車であつた。開いたまんまの雨傘を二本、柄をしつかりと縛り合せて、そこへ辨當箱をぶら下げ、速成のこの車を後から押して轉がしながら、私たちは上野の坂を下つて歸つた。傘だけに普通の車のやうに、坂を一さんに轉り落ちる事もなく、ちやうど私たちの足並とうまく並行した、何せ美校の先生が、牛に跨つて登校したといふその當時の山内であればこそ、さうした悪戯も出來たのだが。

當時はまた三浦環女史が、自転車美人の評判を高くしてゐた。美校の先生が牛の歩みで通ふ同じ上野の山内を、當時は文明の尖端であつた自転車を、しかも妙齡の美女環さんが走らせるのだから、評判にならない筈はない。しかし私たちに取つては、それはいゝ悪戯の目標でしかなかつた。

ある日私たちは山内で、自転車に乗つた三浦さんに行き合つた。「それッ」と、私の目くばせをうけるまでもない。突嗟に美校と音校の聯合軍は腕を組んで、自転車の行く手を遮つて終つた。三浦さんが右へかはさうとすれば、悪童たちはその方へ寄る、右へかはせば左へ追ふ。スクラムを組んだまゝ道路を右へ行き、左へ行き、この動く關所は自転車の通

行を許さなかつた。追ひ詰められた三浦さんは、とう／＼操縦の自由を失つて、精養軒傍の溝の中へ自轉車もろとも落ち込んで終つた。

三浦さんは——といふより三浦先生は、私たちが豫科に入つた時、卒業して教務囑託になつたばかりで、私たちは先生の第一回のお弟子であつた。そのころ優形の美貌の持ち主だつた先生は、年にしたところで私たちとは大差がないし、何といつても女といふので、悪童たちは甘く見て、いろ／＼と困らせるのだつた。大屋などは殊に甚しかつた。先生の範唱を『あら、堪らないわねえ』など、しなを作つて褒めそやしたり、『歌つてごらんなさい』と指されると、さも嬉しさうに立ち上つて、ものゝ四小節か八小節もやつて見た擧句『歌はうと思つても聲が出ないんです。』と、今度は軍隊口調でやつてのけるのだつた。先生のことをかけでは『環ちゃん、環ちゃん』となれ／＼しく呼ぶ大屋だつたし、ほかにも荒武者が多くゐて、氣の弱い三浦先生を、泣かして終ふことも一再でなかつた。かうした蠻風は、當時一般學生の氣風であつたばかりでなく、取りわけ上野の連中は、當時から男女共學であつたために、女らしく見られてはと、故意に野蠻を装つてゐたわけ

であつた。その上私にして見れば、苦學の悩みを人に見せまいとする苦心までがあつたので、表面殊さら快活を装つて、亂暴者の仲間入りもし、剽輕者の假面も被つて見た。今は浦和にゐる成澤潤藏君といふ同級の一人など、一年中物事を悲觀的に考へる性質だつたので『一日でも山田の氣持になりたい』といひ／＼してゐたが、私にして見れば成澤君は、まだ苦勞らしい苦勞はしてゐなかつた。彼が私にさういふ度毎に、私は『一日でも俺のやうになつたら、一堪りもなく死んで終ふよ』といひ返した。

イタリー語の『浪子さん』

そのころ私は音樂學校へ通ふ傍ら、外國語學校へも籍を置いて、イタリー語を學びはじめた。従弟大塚も一しよに通つてゐたので、はじめのうちは全部で二人の生徒があつたが、大塚は途中で止めて終つたので、最後は私一人になつた。先生は伊語で權威者として知られた梁田、伊藤兩先生のほかにノルサといふ外人の雇教師があつて、生徒一人と先生三人、一日に五十もの單語を呑み込まされるほどの嚴格さであつたが、とりわけノルサ先生は甚

しかつた。初めて學ぶ私に、いきなりイタリーの新聞や單行本を渡して、それを讀めとの命令である。エスペラントをやつた關係から、發音だけは初めから出來たし、二三の單語の意味を拾ふには拾へたが、もちろん譯讀が出來さうな筈はなかつた。

ある時先生の示された文章の中に *Cuculo* といふ名詞があつて——どうやら名詞らしいこと丈けは判るには判つたが、私には何の事やら意味は判らない。ノルサ先生に聞くと、不自由な日本語で「ナミコサン、ナミコサン」と繰返されるばかりだつた。何の事やら判らないなりに後で調べて見たら、*Cuculo* とは郭公——ほととぎすのイタリー語だつた。

外語へは一年半も籍を置いたかと思ふ。そのうちに私は鼻の手術をした。その日から歌劇『誓ひの星』の作曲にかゝり、三日三晩一睡もしないといふやうな暴學を敢へてしたので、中耳炎になつて、二ヶ月も無届で外語を休んだ。もちろん月謝も納めないで……。全快後登校して見たら「退學を命ず」と掲示板に貼り出しが出てゐた。

これで當時の外語伊語選科は、完全に全滅したわけである。そして私のイタリー語も、一つ忘れ、二つ忘れて、今では音樂用語以外、殆んど解する事が出來なくなつて終つた。

宙返りの卒業式

私は本科二年の終りごろ、藏前の教會を去つて、駿河臺の二階に移り住むやうになつた。翠松館の借金は、もうその頃には物の見事に皆濟になつてゐたので、いつまでも肥船の臭氣に親しむ必要はなかつたし、それに私の収入は追々と増加して、鰻の寢床に潜んでゐるにも及ばなかつた。

そのころ私は原田潤の紹介で、神田今川小路にあつた東京音樂院といふのに教鞭を執つてゐた。そのころの私立音樂學校は、全部が全部上野の豫備校といつた風のもので、天谷秀氏が經營してゐたこの東京音樂院と、山田源一郎氏の日本音樂學校と鈴木米次郎氏の東洋音樂學校の三つがもつとも優れてをり、殊に東京音樂院は上野への入學率三分の二といふ好成绩を示して、斷然トップを切つてゐた。それだけに相當内容も充實してをつて、名譽院長には三宅雪嶺博士を擔ぎ上げ、教師には聲樂に先輩原田潤、ほかにロシアでヴァイオリンを學んで來た金須嘉之進氏や、岡野貞一氏などの名が並んでゐた。

駆け出しの私は、最初は週二回の出席で、大枚七圓の月給を受けてゐた。ほかにも慶應のワグネル・ソサイティーや、藏前の高工、一つ橋の高商などの音楽部を教へ導き、家庭教師なども勤めて、車代といふやうな名目で、毎月謝禮を貰つてはゐたものゝ、月給として帳簿に印判を捺して貰ひ受けたのはこれがはじめてである。

もちろん學籍にある身で、他の學校に勤める事は、嚴禁されてゐたには違ひないが、私は苦學する身で、他から援助を受ける所もないので、そんな規則は頭から無視してかゝつた。そんな譯で、駿河臺へ移り住んだ頃には、百六七十圓の月収があつたが、一方東京音楽院では、英語など出来る所から、案外生徒の受けもよく、受持の時間も殖えて來るし、従つて重要な位置も與へられるやうになり、私が上野を出るころには、院長代理の重職を占め、月給も鰻上りに六十圓となり、總収入は月三百圓に近かつた。

院長代理になつたのは譯がある。そのころ天谷氏がある事件に引つかゝつて、暫く身を潜めねばならない事情に立ち至つて終つた。先輩の原田は、もうその頃音楽院を去つてゐたし、事件の後といふので面倒な院長の椅子など誰一人ねらふ者がなく、結局みんな逃げて廻つて、とうとう一ばん若僧の私にお鉢が廻つたわけで、名譽といふよりも、むしろ貧乏籤に近かつた。

それでも私はどうにかかうにか、大過なく院長代理をやつて除けた。そのころ上野では卒業と同時に教務囑託を仰せつけられて、月二十五圓といふ、その當時では破格の手當を受け、自分よりもどうかすると年上な海軍の委託學生に、唱歌やチェロを教へてゐたし、慶應や高商や高工など、専門學校でも教へてをたので、考へは今よりもむしろ大人びてゐたらしく、院の内部でいろ／＼の問題が起つた時なども、私に苦衷を訴へて來る女生徒を巧みに慰めて、割合難なく捌いてゐたやうに思ふ。

傑作はしかし音楽院での、私にとつては最初で最後の卒業證書授與式であつた。年の割合に世馴れたこの院長代理は、自分と同年輩の卒業生に、諄々と社會に出での注意を與へた後、名譽院長として列席された三宅雪嶺先生に演壇を譲つた。雪嶺先生は、この日私は初対面ではあつたが、院長代理といふ椅子に敬意を表されたものか、若僧の私を丁寧扱はれて、私の紹介の辭につゞいて、一場の演説を試みられたが、それが何と感銘の深い

ものであつたことか。

一言にしていへば世にも稀な訥辯であつた「ベートヴェンは」「シューマンは」「シューバ
ートは」と、幾つかの固有名詞が何の聯絡もなく點描的に吐き出され、その間々に長い休
止符。そして『あるのである。』と、句を結んでまた休止。部分的には殆んど意味を汲み取
れないやうなこの訥辯が、しかし全體を通じて聞くと偉大な雄辯として現はれ、その中に
は『技巧を學ぶよりも寧ろ生活を學べ』といふやうな大教訓が盛られてゐたやうだつた。

この訥辯の雄辯の後を承けて、私はいよ／＼免狀を授與すべく壇上に立つたが、悲しい
哉、この若い院長代理には、今まで受けた経験こそあれ、授けたことのない免狀だつた。
鹿爪らしく読み上げて、それを生徒に授けたまではよかつたが、讀んだ免狀をそのまま下
げて渡したので、受けた生徒は逆さまの免狀を有難く頂戴しなければならなかつた。

式が済むと餘興があつた。物真似の上手な男がゐて、立ち上りさま雪嶺先生の訥辯の雄
辯を再現しはじめたので、謹嚴なるべき院長代理の私までが腹の皮を擦つて終つたが、豈
圖らん、この悪戯好きな卒業生の物真似は、さらに私の上に及んで來た。彼は壇上で私の
態度をそつくり、卒業證書を讀み上げると、他の一人は壇下に進んで、逆立してその免
狀を受けた。

何をしにこの世へ

駿河臺の家は藤掛といふ大工の棟梁の家だつた。どうせ私は二階借で、そんなに生活費
が嵩む筈はなく、しかも百六、七十圓から、後には三百圓にも近い収入をもつてゐながら、
しかも貧乏を續けてゐたのは、何時とはなしにその二間續きの二階が、同志の俱樂部にな
つて終つたからであつた。

私が多久寅、川上淳、大塚淳の三人とともに『多クアルテット』を組織したのもそのこ
ろのことであつた。そして一週一日は必ず私の二階に集つて、その練習をすることにして
ゐた。

當時女子大學の中等部に學んでゐた菊尾——太股に編棒がささつても、痛い顔も見せな
かつたコーツ氏方のあの少女——そして現在では私の妻——も、音楽學校へ入學の希望を

持ち出して、その試験の準備のために、彼女は富坂の彼女の家から、毎夜駿河臺の私の家まで通つてゐた。彼女の母は娘の夜の外出を氣遣ふあまり、橋一つ向ふの佐藤病院の直ぐ傍に居を移した。そして彼女は唱歌と英語を私に、ヴァイオリンを多について學んでゐた。私が音楽院に教へてゐた關係から、音楽學校受験希望の男女學生が十四五人、レッスンを取りに来てゐた。セノオ樂譜で唱らした妹尾幸次郎君なども、その頃私の家に習ひに来た生徒の一人である。今式部官の相馬子爵、伊東胡蝶團の令息、それに滿洲國歌の作曲者で、大連音楽院長の園山民平君なども来てゐた。

そんなわけで、私のその家へは、若い女の出入りも相當に多かつた。自惚のやうではあるが、それらの若い女の中には、レッスンを取るだけでなく、私の愛を受けようと心がけてゐたのもあつたらしい。時にはそれらの娘の母親すらが訪ねて来たが、それは私を養子にといふ下心から、人物考査をしに来るらしく思はれた。

そんなこんなで忙しい私の生活であつたが、暇になると、私は下の棟梁の所へ遊びに行つた。棟梁にはもとはお屋敷奉公もしたらしい、職人には不相應の淑やかな美しい細君が

あつたし、子供たちも大勢ゐて、私に取つては面白い空氣を作つてゐた。その棟梁が、美しい細君をもつたその棟梁ですらが、『山田さんは羨ましい。』とつくづく歎息したほど、私は若い女性との接觸が多かつた。

しかし私は一切の誘惑を排してゐた。もとより私とて木石でない限り、時として心に揺めきを感じないでもなかつたが、その時私の心に強く響くのは母の病床の言葉であつた。『何しに来た』といふ母の一言。その一言の上に私は『この世へ』の一句が隠されてゐるものと思へなかつた。その當時の私には學業の完成と、兎に角衆人を抜きたいといふ名譽心のほかには何もなかつた。

元祿さんとの旅

こんな事もあつた……と話を在學中に引戻さねばならない。

駿河臺へ越した翌年の夏だつたと思ふ。同じクラスに元祿さんといふ女性がゐて、それが休みで郷里の金澤へ歸る事になつた。

「元祿さん」はもちろん本名ではない。彼女は淑やかで賢明で、しかも全校第一といはれたほどのあでやかな容姿の持ち主であつた。「元祿さん」といふのは、そこから来た彼女の美稱であつた。

その頃私の義兄は、金澤の學校へ轉じてゐたので、私も一夏をそこで送る心構へをしてつた。すると田中といふ生徒監が私を呼んで「元祿さんが金澤へ歸るから、あなたが連れて行つて上げてほしい」といふのである。大助平主義を標榜して、女性の誘惑を斥けてゐた私が、女生徒の監督にも信用があつた證據ではあるが、何となく猫が鯉節を預けられたやうで、奇妙な感じがしないではなかつた。が、同級で知り合ひの中ではあり、騎士的な氣持が働いて、快くそれを引受けて終つた。

ところがこの元祿さんに、一級私より上だつた多久寅と、一級下の滋野清武とが、同時に戀をしてゐたのである。

私にして見れば、滋野は兄弟のやうに親しくしてゐる仲だつたので、無下にその戀を失はせて終ふわけにも行かなかつたが、しかし多とても畏敬すべき先輩であるばかりでなく、クゥルテットの一員として互ひに親しい仲であつた。滋野は私の同行が決ると明らかに私を口説き、多はより眞面目に、出来るならこの序でに先方の心もちを聞いて欲しいと私に訴へるのだつた。人物の上では何れを何れとも定め難いものの、音楽者として、到底滋野が多の敵でないことを知つてゐた私は、心秘かに多のために、姉に話して先方へ口を切つて貰はうと決心した。

停車場へは多も滋野も見送りに來た。私よりも、むしろ元祿さんへの見送りであつたことはいふまでもない。

夏のことで車内は暑かつた。私はかまはい元祿さんのために、驛毎に汽車を降りて、元祿さんの手拭を冷したり、水を汲んで來たりしなければならなかつた、もと／＼同級のことはあり、かうして親切にされれば、元祿さんの方でも、従つてまた私に打ち解けて來るのは無理もない。驛毎に若い男が、若い女を介抱しつゝ、汽車の旅を續けて行く姿は、相當驛員をさへ刺戟したらしい。親友のためとはいひながら、馬鹿げた役目を引き受けたものだ、私は泣き出したいやうな氣持ちにさへなつた。

金澤の驛へ着くと姉が迎へてくれた。若い男が若い美しい女性を同道なので、姉は愛人同志と見て取つたらしく、そんなことには、あけすけな性質の彼女は、それとなくたしなめるやうな意味で私にからかつたりなどした。もちろん私とて全校一の美しい元祿さんを憎いと思へよう筈はない。しかし親友二人が同時に胸の火を焦がしてゐるその對照を、私は何ともすることは出来なかつた。

私は姉の家に落ちつくと、すぐさま多の事を話して、姉の盡力を求めたのだつた。ちやうど幸ひなことに、義兄の別荘は金石の海岸にあり、元祿さんの一家も、また同じ所に別荘を構へてゐて、犀川を挟んで義兄は西に、元祿さんは北に住んでゐた。そこで私の話を聞いた姉はすぐと一つの計畫を立てて、先方の母親に、話の口を切つてくれる事になつた。私は元祿さんとその兄弟たちをつれ出して、海岸へ蛤を取りに行つた。生徒監に見込まれて、遙々護衛の任を果して來た私であつて見れば、先方でも妙な警戒の目で見るとはなかつたし、殊に元祿さんの弟が病弱だつたりした關係から、何となく私を心たよりにするらしく、父親も母親も私に尊敬の念さへもつてゐてくれる様子だつたので、それは都合よく運んでくれた。

遠淺だつたので私たちは遙かに沖まで出て、腰に袋を下げて一心に蛤を取つてゐたが、しかし私は足許よりも、むしろ海岸に氣を配つてゐた。そこでは葦簾張りのところで、姉と元祿さんの母とが話し合つてゐて、話がすむと姉がハンカチで相圖をしてくれる事になつてゐた。しかしどういふものか、話はすらくと進まなからしく、姉のハンカチはなかなか動かかなかつた。

漸くハンカチの相圖があつた。私たちは海岸に歸り、そこで元祿さん一家と別れて、舟で犀川を渡る途中、姉は『駄目よ、耕ちゃん、話がすつかり逆なのよ』といふのである。

聞いて見ると、姉が口を切るよりも早く、先方で口を切つて『山田さんを養子に頂きたい』といつたといふのである。これでは姉のハンカチが、何時まで経つても動かかなかつたのも道理である。しかし私には、もちろん先方の申出をそのまま受け入れられるはずはなかつた。戀しくはない筈のない元祿さんではあつたが、親友二人の衷情を裏切るわけには行かなかつたので、とうとう話を有耶無耶に葬つて終はねばならなかつた。

私としては、元祿さん一家のさうした氣持をすら、押しつけて終はねばならなかつたのは、親友への友情ばかりではない、初志を貫きおほせないうちに、まだ學業の最中に、結婚を考へることが、何か母に濟まない心もちがしたことも事實ではある。しかし一方また次のやうな具體的な事實もあつたからである。

親友と再會

翌年の初夏といへば本科三年の時だつたと思ふ。上野に博覽會が開かれて、不忍池畔の日本では最初のウォーター・シートが可成りの人氣を呼んでゐた。また美術學校傍の入口から入つて直ぐの所に、一羽の九官鳥が掛けられてあつて、『權兵衛』と呼ぶと『コンミッション』と答へ、『コンミッション』といへば『權兵衛』と呼び返した。それは當時喧しかつたある事件の一片影であつた。

そのころ美校の音樂部をも教へてゐた私は、美術學校職員のもつ博覽會出入證を持つて、ちやうど博覽會正門の前に建てられた音樂堂のあたりをさまよつてゐると、一三年全

く音信不通であつた神戸關西學院時代の親友の一人に思ひもかけず再會して、誘はれるままにその家を訪れた。

彼は徳久恒利といつて、極めて不遇な青年だつた。父は知事として各縣に歴任し、そのころは錦鷄間伺候だつた外に、臺灣製糖會社の社長かなにかをしてゐて、財的にはもとより恵まれてゐたが、彼は一年の半分を殆んど病床で過さねばならない程の羸弱な身體の持ち主であつた。従つてまたそのため友を得る事が難しく、家庭は肉身の妹がたゞ一人あるだけで、極めて淋しい境遇にあつたので、私は彼を慰めるべく、週に何回となく彼の家を訪れねばならなかつた。

主人は社用の出張や何かで、家にゐない時が多く、長男は病の床に親しむ身であつて見れば、私といふものの存在は、その家にとつて重寶なものだつたらしく、私は彼に取つて繼しい仲の母親からも、決して疎んぜられることはなかつた。そして私は、彼からは第三高女に通つてゐた泰子といふ妹の學業の下見を、夫人の繼母からはその腹に生れた二人の弟妹の家庭教師を頼まれた。

徳久の家庭は相當複雑した家庭であつた。

父は佐賀の産であつた。そのはじめの妻は一人の娘を残して世を去り、次の妻即ち、恒利と泰子の母である人も、幼い二人の兄妹を残して病歿した。それは稀に見る美しい女性であつたが、死因は胸の病ひにあつたと恒利はいつてゐる。恒利の父はこの美しい妻をこの上なく愛惜してゐたが、そのころまだ官界にあつて、公務に忙殺されてゐた彼は、永く獨居を許されなかつた。さうして娶つた第三の妻が、私の弟子となつた當時十二歳の秀子と、Kといふ九歳の少年の母であつた。

彼の家にはそのほかに、二三の學僕と、三四人の下女と、一人の爺やとがゐた。その上に、何彼ともつかずその家庭に立ち働く、T子といふ彼の従姉もゐた。

T子は瓜實顔の優型な美人で、雌鹿を思はせるやうなやさしい容姿の持ち主であつた。繼母の姪であるだけに、實によくその繼母の姿に似てゐた。最初私が博覽會場から、恒利の家を訪れた時、私は彼女を恒利の妹とばかり思ひ込んでゐたが、三四回の訪問の後、私ははじめて泰子に會ひ、T子は従妹に過ぎない事を知つたのだつた。

そのT子が、私の寫眞を帶上げの中に入れて、始終背負つて歩いてゐる——といふやうな噂をいつとなく私は耳にもしたが、しかし私の心は決してそれに動かされはしなかつた。私の心の虫は、戀愛とかさうした端的な意味ではなしに、何となく泰子の方へ引きつけられてゐた。

泰子は決してすぐれて美貌の持ち主ではなかつた。しかしさうした裕福な家庭に育ちながら、召使たちと立ち働き、また病身の兄をよく看護する健氣な少女であつた。時として私は彼女が女中と同じ様に尻からげをして、長い廊下に雑巾掛けをしてゐるのを見かけることもあつた。

そればかりでない。泰子の内には九州女子の血が流れてゐた。その血の流れが或ひは私を惹きつけたのかも知れない。(私は奇態に九州の血に惹かれる傾きがある。)しかし好きとはいふものの、決して好き以上の氣持にはなれなかつたのだが……。

ある日の事恒利は、自分や妹のはかない身の上を物語り、若し嫌でなかつたならば、終生泰子を世話してくれまいかと懇請した。

私ははじめて人生の袋小路につき當つたやうな心もちがした。

私は思ひあぐんだ。そしてまづ何よりも必要な事は、泰子の心を確める事だと思つた。

私はそれを恒利に諮つた。彼は私の申出を快く受けて、ある日の午後、泰子を獨り私の家に送つた。

私は私自身の過去と現在と、そして何よりも肝要な私の將來に對する希望などをこまごまと語つた。私に係累のないこと、それは結婚後の泰子にとつて、最も幸福なことであつたらう。しかしその反面に、私が全くの無資産で、たゞ腕二本をたのみとする貧しい男である事は、裕福な家庭に育つた泰子にとつて、果してどう考へられるであらうか。私はただこの一つの點に疑ひを懷きながら、しかしすべてを明らさまに、彼女に打ち開けたのだつた。しかもそれらのすべては快く彼女によつて受け容れられたのであつた。

私はその瞬間から、泰子を尊敬し、熱愛する私自身を見出した。かねてから私の裡に培はれてゐた好意の芽は、こゝに思ひもかけず戀の蕾を結ぶ事になつたのである。それでも私は、この最初の會見によつて、總てを決定しはしなかつた。私は私の母にも

比すべき長姉のところへ、一切の出來事を書き送つて、その意見を質したのでつた。

長姉から與へられた返事は、恐らくかうした間に對しての、最も賢明な答へであつたであらう。彼女は私がかうした相談を持ちかけるほど成人したことを、かつは訝り、かつは喜び、極めて簡に「總ては悔ひなきやうに行へ」と書き結んでゐた。

私はこの言葉によつて、喜びとともに負ひ切れぬほどの責任を負はされた私自身をはつきりと見た。この手紙は恒利と泰子に示され、ある日の午後、恒利の病床で、私ども二人は嚴かな婚約の誓をたてかしたのであつた。

『墓上の花』

恒利と泰子の兄妹は、實際に寂しい二人であつた。二人の父を除けば、この世の中に親身のものとしては、たゞお互ひ同志があつただけなのである。それだけに病身の恒利は——實母の病ひを受けて、天くして逝く運命を、自分でも氣づいてゐたこの兄は、ことさらに泰子の上を氣づかつて、一日も早く安心してその愛妹を委ね得る人を見出さうと焦つ

てゐたのである。そしてその選に私が與つたわけであつた。

私のそれまでの生活は、死床の母の一言をたゞ一つ暗夜の光として、ひたすらに學業の完成と、成功とを目ざして進んでゐたに過ぎなかつた。従つて私は、よし路傍の花を美しと見、奇と觀ずることはあつても、成功を目ざしてひた走りに走る足どりに追はれて、それを摘み取らうとする餘裕は實際になかつたのである。しかし運命の手は、私に待ち設けてもゐなかつた道づれを與へてくれた。渴ききつた私の功名への憧憬は、こゝに初めて愛のうるほひに色づけられたのである。

このよろこびを懐きつゝ、私は上野の本科を卒業した。卒業後間もなく、當時廣島の師範に赴任してゐた外山國彦兄の招きに應じて、はじめて演奏旅行に上つたが、それには澤田柳吉と、従兄の大塚淳とが同行することになつてゐた。私は、私に取つては最初のこの演奏旅行を、この上もなく喜んだ。

それは九月の初めころだつた。恒利はそのころ小田原に轉地してゐた。小田原城趾を背に負つて、深い竹籬の傍に建てられた梅柳館——伊藤博文公がしばしば旅装を解いたとい

ふその宿の、離れ座敷が彼の靜養の處であつた。そして妹泰子も、たゞ一人の肉身の兄を看護するために、この宿にあつた。

私は澤田と大塚を後に残して、一週間も早くその旅に上つた。もちろん私の旅は、國府津から小田原へと曲げられた。その時私を運んでくれた、砂利場のトロッコの上に客席を設けたやうな輕便鐵道が、今でも私の瞳の中に、はつきりと残つてゐる。

梅柳館での一週間の生活は、まことに楽しいものであつた。兄妹と、そして約婚者と、水入らずのこの三人は、起きるから寝るまで、たゞ楽しく語りあつてゐた。土井晚翠氏の『墓上の花』を愛誦してゐた恒利のために、私がそれを作曲し、そして靜かにその歌を歌ひ、聽かせては、病床の彼を慰めたこともあつた。

やがて演奏會の日が近づいて、私は兄妹に惜しい別れを告げなければならなかつた。そしてその樂旅そのものは、決して楽しいものではなかつた。酒を飲む術をさへ、まだ知らなかつた私には、あまりにも世馴れた友人二人の行動が、空怖しくさへ思はれた。その時私は當時大阪にゐた兄に、旅費を借りねばならぬ妙な羽目にさへ引き入れられて、二人と

別れて淋しく一人東京へ舞ひ戻つた。

迫害と愛の絆

しかし私の歸京した時には、恒利兄妹もやはり東京へ歸つてゐた。そして私は、又しても三田綱町の彼等の座敷を、しげ／＼と訪れる身であつた。

十月に近いある日の午後、恒利の従兄に當るといふ法學士が、突然朝鮮から歸京した。

『朝鮮總督府の小官吏として在任してゐたのだが、職を奪はれて止むなく歸京したのだ。』などと恒利は語つてゐた。

それは恒利の父の援助で、大學を卒業した男であつた。淺黒い彼の顔色と、せせこましい彼の眼と、醜いまでに矮小な彼の體軀、その上、人を卑下するやうな彼の口吻などは、決して私を喜ばすものではなかつた。そして恒利も泰子も、この男の出現を快くは思はない様子であつた。

その彼が再三再四、泰子に對し結婚の申込みをして、その都度泰子の父から拒絶されて

ゐたのだといふ。拒絶されてもなほ懲りずに、申込を敢へてする、その男の執拗さを怖れるよりも先に、私は何となく彼が莫迦げて見えてならなかつた。事實その男は、それ程伶俐でもなかつたらしい。しかもその賢からぬ男の術中に、むざ／＼と陥らねばならなかつた程、それ程當時の私は世間知らずのお坊ちゃんだつたのである。

彼は私とその家庭の寵兒であることを、いたく不快に思つたらしい。そして泰子が兄の看護のために、その學期の成績が不良だつたことを理由として、まづ親身の味方であつた兄恒利から彼女を引離し、また音楽をやると意志が薄弱になり、學業の妨げになるといふ理由の下に、私をその家から遠ざけようと企てたのである。

彼はまづその仕事の第一歩として、病氣療養の名の下に、恒利を鎌倉へ轉地せしめた。つづいて泰子の繼母を説いて、私をその家から去らしめたのであつた。もちろん私としては如何ほど泰子を愛してゐたにせよ、その兄の不在中に、その妹を訪れる事は、出來難い事ではあつたが、いよ／＼繼母なる人の口を通じて『學校の成績が良くないし、またそろそろ結婚の準備のために、裁縫などにも通はせねばならない。従つて音楽の稽古は當分中

止する』と云ふ言葉を耳にした時、私はどんなに憤慨したことであつたらうか。
しかしこの迫害も、泰子と私とを、より強く相愛せしむる絆としかならなかつた。

愛の郵便脚夫

當時私は一週二回づゝ、慶應義塾のワグネル・ソサイティーを教へに行つてゐた。そしてまた麻布仙臺坂下の井上家の家庭教師として、これも一週二度づゝ通つてゐたのである。泰子の家は、慶應義塾のすぐ裏であつた。が、しかし、追はれたその家には、私は意地にも足を踏み入れる事は出来なかつた。しかしまた幸ひな事には、泰子の通ふ裁縫の師匠は、井上家の直ぐ近所で、しかも井上家の長女と泰子とは同じクラスメイトだつたのである。

私は井上家の門をくゞる前、必ずその裁縫師匠の前を通り過ぎた。そして泰子の履物をその玄関に見出した時、私はやうやく安心して、井上家へ行く事が出来た。そして通りすがりに私が吹き鳴す口笛の一ふし——小田原古城を背景にして生れ出でた『墓上の花』が

私ども二人のランデヴーの合言葉であつた。

私は井上家の稽古を終るとすぐ、定め場所に泰子を待ち受けた。そして私たちは僅か三日、四日とはいひながら、相見ない間に起つたいろ／＼の出来事を打ち語らひながら、仙臺坂から二の橋、二の橋から小山町へと足を運び、時には芝園橋近くまでも、はかない祕密のランデヴーを楽しんだものであつた。

かうした二人の間に立つて、愛の郵便脚夫を勤めてくれた可憐な少女のあつたことを、私は言ひ忘れてはならない。それは私の妹といつてもよい菊尾であつた。

彼女は泰子を親身の姉のやうに敬ひ、泰子もまた彼女を妹としていとしんだ。その上彼女は、私が泰子の家に行き得なくなつてからも、自由に泰子を訪れることが出来るほど、その家の人々とも親しい間柄に立つてゐた。そのころの私たち二人に、彼女ほど盡してくれたものは他にもなかつた。

しかしかうしてゐるうちに、私たちにはまことに悲しい出来事が起つた。それは鎌倉にある恒利の病が悪化したことで、私は屢々電報に驚かされて、長谷の鎌倉病院を訪れねば

ならなかつた。

焼かれた秘密

病床の恒利は、Nといふ彼の従兄が、私たち二人に對してとつた行動をいたく憤慨し、私の苦境に同情して、一日も早く父なる人々に私たちの婚約を打ち開けて、その公けの許しを得ようと焦つてゐたのであつた。幾回となく、私たちはこの問題について、文書のやりとりを繰り返した。幾回となく恒利は、旅にある父の歸京が、一日も早らんことを願ふ趣きを、私のところへも言ひ遣はした。しかも社務に追はれて各地に忙しい旅寢を重ねてゐた彼の父は、とうとう可憐な病兒の最後の願ひを聽くことが出来なかつたのである。私にとつても、また泰子に取つても、唯一のたよりであつた恒利は——私たちの婚約の無二の證人であつた恒利は、僅か二十四歳の春、無言のまゝ永眠して終つた。

棺の右側に立ち添つて、その葬列に加はつた私は、暫く相見なかつた秘かなる婚約者、泰子の泣き濡れた姿に悲しみを新しうし、またその傍らに、誇らしげに近侍するN法學士

の態度を、悲しさの中からも憎々しく感じたのであつた。

『悪しき病』を理由として、この法學士は、私と恒利との間に交された一切の書類をすら悉くその手で焼棄して終つた……と聞かされた時には——T子の兄がそれを私に告げてくれた——私はすべてが絶望的なものだと思ひ込んだ。恒利の死は、さほどまでに私たちから光明を奪つて終つたのである。

事實私は食物すらも、多く採り得ぬほどに思ひ悩んでゐた。私を我子のやうに愛してくれた菊尾の母や、私に兄への敬慕を寄せてゐてくれた菊尾の心配も一方ではなかつた。しかも一方、何回となく、泰子に對しての結婚の申込みは何々侯爵家、某實業家、あるひは某、或ひは誰からといふやうに、ひつきりなしに私の耳に傳へられた。

今は世にない恒利と、私たち二人の當事者と、愛の脚夫菊尾と、それだけを除くほかは、ひそかなる婚約を知るたゞ一人であつた菊尾の母は、泰子の家出をさへ勧め、そしてそれが實現する場合には、どんな援助も惜まないと、固い約束をすら與へてくれたのだつた。しかし私はこの家出説を排斥した。そして如何なる困難を耐へ忍んでも、究極において相

結ばよといふ信念から、たゞ泰子を信じ、その信念の上に僅かな希望の光を點じて兎にも角にも懊惱の一年を過したのであつた。

國産ベートーヴェン

ここで私は再び在學中に話を戻さなければならない。

もともと作曲を志してゐた私は、豫科から本科に進む時、「作曲科」と稱する科目が、單に規則書の紙上にあるばかりで、現實には存在しなかつたところから、止むなく聲樂科を選んだのであつたが、しかし作曲への私の憧憬は、もとより打ち消さるべきではなかつた。義兄であるガントレットが、素人ながら音樂を嗜み、その書庫には相當莫大な音樂書の藏書があつたところから、私は貪るやうにそれを讀み漁つて、どうにか音樂の理論を究め、秘かに作曲を實踐しはじめたのだつた。

出來上ると私はそれを、まづクワルテットの仲間だつた多、川上、大塚に見せた。

この良友は、私のこの精進に激勵を興へてくれこそすれ、決して妙な目で見るはずはな

かつたが、しかしその他の學友たちは、生意氣な私の所行を、むしろ異端視しさへした。取り分け上級生からの壓迫は甚しかつた。ある時私は校内の大弓場へ連れて行かれて、砂を食はされたことさへあつた。

私は私の作品を、私自身の名で發表することの危険を痛感した。しかしもとより作曲の筆を折ることは、私の精進の心が許さなかつた。作曲した以上、これを何かの方法で演奏に移して、その効果を吟味することは、またもとより必要な事であつた。それ故私は自分の作曲に、出たらめなイタリー人の名や、ドイツ人の名を附して、それを携へて登校した。その頃の上野の學生はたしかに今よりも熱心だつたらしい。晝休みの時間でも、運動場の樹下に三々五々集つて、アンサンブルの練習をするのが常だつた。そしてそんな時に歌ふ教科以外の合唱曲を、彼等はいつでも要求してをつた。私はそれを絶好のチャンスとして、イタリーの曲を、ドイツの曲を——その實は私自身の曲を、彼等のアンサンブルに提供したのだつた。私の名が署せられてゐる限り、決してそれを歌はうとしなかつて彼等ですら、聞いたこともないイタリーやドイツの名の下にかくれた私の作品は、好んで唱和

してくれたばかりでなく、時には絶讃の言葉をさへ與へてくれた。

追ひ／＼に作曲の道に鍛練を積み、自信が加はるにつれて、私はだん／＼大膽になりはじめた。砂を食つた苦い経験は、私自身の名を堂々と名乗らすことを許さなかつたが、しかし私は素性も知れぬ外國名の代りに、或ひはメンデルスゾーンを、モーツァルトを、ブラームスを、時にはベートーヴェンをさへ私の筆名とした。しかもそれらの作品は、生徒たちに提供されたばかりでなく、外國書からの私の發見として、外國教師たちにまで示される事があつた。教師たちは侵された高標をそのままに買込んで、時にはその曲の缺陷をすら、それらの樂聖の特長として、勿體らしく私に講義してくれることさへあつた。

たゞ一人私に欺かれなつたのは、恩師ヴェルクマイスター先生であつた。一方ならず私に目をかけて下さつたこの恩師にだけは、さすがに亂暴な私も、日本産のドイツ曲を提出するほど、大それた舉動に出られる筈はなかつた。そして三人の親友を除いては、このヴェルクマイスター先生だけが、私の作品を私の作品として受け容れ、それに對して懇切な忠言と激勵とを下さる唯一人であつた。

渡歐基金七圓也

ヴェルクマイスター先生の厚恩はさることながら、ラベルだけのベートーヴェンを觀破することすら出来ない教師たちの頼りなさを、私はつく／＼感じはじめて、どうしても一度は外遊して、系統的に作曲の道を學ばなければならぬと云ふ熱意が、心の中に燃え上るのを、もとより抑へることは出来なかつた。

私は先づ私の決心を、兄弟の様に親しい川上に傳へ、川上から多クルテットの他の三人——すでに記した二人のほか、ピアノの萩原英一君が入つてクルテットの實質は、クインテットに變つてゐた——に傳へてもらつた。そして私の渡歐旅費を作るために、一回の演奏會を開いて貰ひ、私はその席上でかつ歌ひ、かつピアノを弾き、またクルテットの一人としてチェロを受け持つた。私の獨唱の伴奏は、萩原が引受けてくれた。

序でに記すのを忘れてはならないのは、多クルテットの公開演奏は、恐らく學校卒業生（私はその時本科を終へて、研究科に在籍してゐた）によつて組織された團體の、社會へ

のデビューであつたであらうことである。そしてその演奏會のマナーデメントは、大塚と私が當つてゐた。後年の私の音樂企業家的才能のひらめきは、すでにその時に、現はれてゐたものかも知れない。

そのころの演奏會は、技術の進歩ももとより十分でなく、社會狀勢も今日とは違つてゐたので、全部が全部「慈善」の名の下に行はれてゐた。しかし私たちは慈善を離れての研究發表を目的としてゐたために、さうした擬裝的な名稱を付けることを好まなかつたので、先例を破つて慈善にあらざる音樂會の願書を、會場として選んだ神田青年會館の所轄署錦町警察に提出したが、それは一も二もなく却下されねばならなかつた。

私たちの懇願に同情した係官の警部は、形式的にも慈善音樂會の名目にせよ、とむしろ好意ある勸告をさへしてくれたのだつたが、それは私たちの感情が、また意志が許さず、どこまでも單なる「音樂會」で頑張り通したので、とうとう係官も匙をなげたと見え、「兎に角これを見てそちらで何とか考へて見る。」と、部厚な「法令綴」を私の前へ投げ出してくれたのだつた。

その法令綴のどこを見ても、劇場、寄席以外の催し物は、「慈善」でない限り開催することを許されならしく見えたが、唯一つ「假設觀物」といふ一條が、私の目を引きつけた。そしてそこにはいはゆる見世物以外に、「演技」といふ一項さへあつたのである。

私は神田の青年會館を「假設觀物場」とし、私たちの演奏を「演技」として、はじめて慈善に非ざる演奏會を聞くことに成功した。もとより慈善に非ざる限り、税金を納めねばならない事はいふまでもない。そして當夜の總收入の中から、一晚三圓の税金を拂ふと、差引き利益金は大枚七圓なにした。もちろんこの大枚の收入をもつては、私の旅費が支辯出來さうにはなかつた。従つてその金は、當時會計を承つてゐた齋藤佳三君が、そのまゝ今でも保管してゐる筈である。

私は私の希望の實現を、殆んど絶望しなければならなかつた。しかし思ひもかけず、恩師ヴェルクマイスター先生の有難い心づくしと盡力とで、私は岩崎小彌太男爵の知遇を受け、その後援を得てあこがれのドイツへ渡航することが出来るやうになつた。

忘れもしない、また忘れてはならない。初めて私が男爵にお目にかゝつて、そして渡歐

が決定したのは、一九一〇年の一月二十四日であつた。そしてその日はふしぎにも母の祥月命日であつたのだ。

空しき婚約

私の渡歐が新聞誌上に傳へられると、思ひもかけず徳久の母からも、祝ひの手紙が寄せられて、それには『何でも出来るだけの事はして差し上げますから、どうかお心置きなく。』との事であつた。私はその手紙をも、決して文字だけの意味に解釋しはしなかつた。財的の援助といふよりも、自分の秘かなる念願への、動かすべからぬ確信を與へられたかに思はれたのである。N法學士に對する勝利を確信し、母の愛、姉の愛と共に、私の心の生活を導きもし、照らしもしてくれた泰子への感謝の念に浸つて、私はいそ／＼とその家を訪れたのだつた。

徳久の繼母が、私を迎へてくれたことに、私がかつた私の信念を倍加したことを感じた。しかしいろ／＼話し合つてゐる間に、私にも心づいたことに、その繼母が決して私を泰子

の婚約者として迎へてくれたのではないといふことであつた。その當時十三歳だつた妹の秀子のことを『あなたのお歸りの時には幾歳になつてゐるでせう。』など語る彼女の言葉の裏には、『その晩には秀子を貴方に……』といふ響きがかもつてゐた。

私は呆然とし、むしろ二重の困惑を感じなければならなかつた。しかし彼女と秀子とが、私への賤別の品をと室を出て行つたその僅かの瞬間を取逃がすほど、私は自分を失つてはゐなかつた。『行つて来ます、待つてゐて下さい。』『屹度お待ちしてゐます』——この僅か一言を、僅か一分の間に泰子と取り交した私は、それを僅かな力だのみとして、將來の學業の成就と、生活の充實とを的に、遠い旅に立つたのであつたが……。

その泰子は私の滞歐中に、病を得て兄の後を追つて終つた。そしてありし日の彼女と私との間に、愛の脚夫を勤めてくれた菊尾が、今は私の妻になつてゐるのだ。

音楽の法悦境

この一文は、自分を音楽に生み、自分の爲に音楽に生きる道を拓いてくれた亡き母上と、自分の歩みに最初の光明を點じてくれた義兄ガントレットと、行く道の手引きとなつて下さつたヴェルクマイスター先生、岩崎小彌太男、及び獨逸に於けるヴォルフ教授と、自分を單なる音楽者の領域から此の法悦境まで導き昇らしめた暗緑の城の王女に獻げる、自分の新しき信條である。

幼にして父の庇護を斷たれた私は、十歳を過ぎるか過ぎないのに、活版職工となつて食資を得なければならなかつた。が、さうした惨めな生活の中で起した音楽者たらんとする志望は、その後の幾變遷を通じて、一日たりとも私の心を去つた事がなかつた。その後義兄の許に養はれるやうになつてからは、長い間飢ゑ求めてゐた音楽に接する機會が興へられ、自分でも思ひがけぬほど順調に、先から先への音楽研究の道が開かれたのであつた。

メンデルスゾーンは最初に私を魅惑した作曲家であつた。私は續いてシューバートからシューマンに移り、モーツァルト、ベートーヴェン等を愛好した時代もあつた。然しながら、これらの人々の作品を深く味うて行くと、そこに何らかの物足らぬ所が見出される。私は、音楽そのものだけでは完全に表現し盡せぬものがあるのではないかと考へるやうになつた。私がヴァーグナーに惚れ、將來樂劇作者たらんと志し初めたのもその頃からである。それ故、私は獨逸留學の初期には、非常な熱と愛とをもつてヴァーグナーの作品を研究してゐたものであつた。が、彼の樂劇の内部に立ち入つてその核心に觸れようとする、そこに又私の期待を裏切り、憧憬を打ち壊すやうな間隙や空虚の巢喰うてゐるのに失望せざるを得なかつた。私は綜合藝術を志したヴァーグナーの企圖を間違つたものとは思はない。しかし彼の爲し得た所ものは、單なる音と言葉との配合、或ひは並行に止つて、そこに何らの有機的な融合を見出すことが出来ない。そして私は眞實の融合のない作品を藝術品と呼ぶことを躊躇せずには居られないのである。私はヴァーグナーの音楽と、その樂劇の文字の文學的價値の低いのに不満を感ずると同時に、言葉そのものゝ力を懷疑の眼で

見なければならぬやうな混迷状態に陥り、その結果一度は自分の目標であつた樂劇といふものを棄て、室内樂などの純な整うた形式の中に、眞の音樂の流れを見出さうとした時代もあつた。

かうした懊惱の極、一時は音樂者たらんとした幼年時代からの宿望を抛つて、他に走らうとしたこともあつたが、ドイツからの歸路、モスクワ藝術座の一室で初めて接したスクリャービンの作品に感激の涙を流して以來は、彼の啓示した音樂の靈境、法悅境を目ざして貧しい自分の歩みを續ける勇氣を與へられたのであつた。しかしながら現在の自分は、スクリャービンを除く從來の如何なる作曲者にも満足することが出来ない。自分自身の作品に對しても、ある瞬間的なよるこびを感じるだけで、いつまでも心から酔うてゐることが出来なくなつてしまつた。殊に他人の演奏を聴く場合、それが自分の敬愛する音樂者であつても、座にゐたゞまれなくなる場合が多いのである。或ひは演奏者を眼に見る爲に、その動作に煩はされて心醉することが出来ないのではあるまいかと思つて、瞑目して聽き入ることもあるが、やはり演奏者の存在意識や、脱し得ぬ雰圍氣の壓迫を受けて、妙な焦躁に陥

つてしまふ。私は時々、自分は音樂が嫌ひなのではないかとさへ思ふやうになつた。

かうした救はれやうのない絶望状態に惱ましい吐息をついてゐた私は、花の生活からある暗示を受けて、一つの光明を見出すやうになつた。花は美しい、美しいのは何故であらうか、と私は自分に問うてみた。花は花だけの生活を營んでゐるものではない。花は植物の生活の一部を飾るものである。しかも此の花の美しい所以は、植物が花を咲かしむる根本の力である根の營みを地に葬つて、外に見せないからではないだらうか。人間に於ける藝術は、植物に於ける花の如きものである。それ故藝術をして眞に美しいものたらしめんためには、藝術を開花せしむる根の艱苦や勞作を、表面に出さぬやうにする必要がある。他の藝術に於ては、勞作と發表との間にかかりの隔りがあるため、自然に、しかも容易に、根の營みを隠すことが出来る。音樂においても作曲にはその自然さ、容易さを取り入れることが出来るが、その作品の演奏に際しては、花と根との距離があまりに近いため、又演奏と云ふものが一つの芝居がかつて見世物のやうに誤認せられてゐるため現在行はれてゐる所謂音樂會なるものゝ中からは、純美な花の眞姿を掴み出すことさへ困難になつてしま

つたのであらう。

この點に氣づいた私は、少しでも聴衆の心を勞圍氣に煩はされることから救ふため、少しでも聴衆の心を音そのものに觸れしめるため、自分の作品發表會に際して、たゞ一本のほの暗い蠟燭の光の中で演奏したこともある。が、それも、聴衆に一種の感銘を與へただけで、その存在を忘れしめようとした演奏者の影を、一層色濃く聴衆の眼に映すと云ふ反對の結果を生んでしまつた。それにかうした試みは、一般世人に徒らに奇を衒ふやうな印象を與へるばかりで、音樂會と云ふものを、益々華美な、芝居がかつた、遊びの多い社交機關たらしめようとしてゐる現代人に受け容れられる事はむづかしい。私は益々音樂會を厭ひ、謂ふ所の樂壇なるものから退きたい氣持をどうにもする事が出来なくなつた。

最近に於いて私は、ふとこんなことを考へるやうになつた。といふのは、外でもない。一つの新しい音樂の殿堂を築くことである。それはいふ所の音樂堂でも、劇場でもない。特殊な組織のもとに建てられた禮拜堂か、祈禱場の如き樂堂である。この殿堂は人里離れた靜かな森の只中に建てられなければならない。深い樹林と、そして清澄な泉の水とによ

つて、俗界の噪音の外に埋められ、秘め隠されてゐなければならぬ。この聖堂は一つの大きな圓形から成る。その半ばは地下に、半ばはかのビザンティンのドームの如く、ゆるやかにまろく、古木の樹間にもれ上つてをる。オベークな厚い壁が、この圓天井の中心へと、地下の凹形の周圍から、圓錐形に上つて行く。樂人は此の半透明な圓錐形の底に影をひそめて、そこから純美な音樂の精髓だけを圓天井の頂へと開花せしめる。そして聴衆は、壁の外にしつらへられた、一人々々の柔かな、深い座席に身を埋め、祈るやうな氣持で瞑目しながら、聖堂の底から鳴り響いてくる音樂を心の底まで泌みこませる。

この堂に入り、この森に踏み入るものゝ是非とも遵奉しなければならぬ信條は、絶對の孤獨と沈黙とである。人々はこの森に足を踏み入れると同時に口を噤み、心を靜めて俗世から離れねばならぬ。人々はこの聖堂を目指すと同時に、親は子と、兄は妹と、戀するものはその愛人と、袂を分つて、別々の路から、水をめぐる樹林の間を縫うて、この聖堂へと歩み寄る。そこで、個々人は眞實の孤獨な自分に歸つて、靜かに、嚴肅に、音を聴き、音と一つになつて、敬虔ないのりの心を圓天井の屋根を通して、見えざる神の御座へと昇

らせる。そして彼等は、淨められ、高められ、美化せられた心で、また沈黙のまゝ靜かに此の聖堂を出で、ひとりびとり、森の入口へと靜かに歩み去る。そこで親は子と、兄は妹と、戀するものはその愛するものと、生れ更つたやうな清淨な氣持でめぐり逢ひ、澄みきつた心でお互ひの存在をことほぎあひ、聖なる愛と悦びに輝く面をそろへて、毎日の生活にかへつて行く。

生きるかぎり、人間は、何らかの意味に於て神を求め、宗教を求めずにはゐられない。私はかつて、藝術、殊に音樂は究極において宗教にまで高められなければならない、またその與へる感動も單なる官能的、感情的陶醉以上の靈の法悦の境にまで引き上げられたものでなければならぬといふことを主張した。私の心には既に築かれてゐるこの殿堂は、人間本來の欲求である宗教心を充すと同時に、音樂の究極である法悦の境地を最も完全に、最も純粹に實現し得る至聖所である。

今まで何物によつても充されることの出来なかつた私の、人間として、また音樂者としての欲求は、この聖殿に於いて初めて完全に充されるやうな氣持がする。そしてかうした

聖殿の誕生を待ち望んでゐるのは、決して私ばかりではないと思ふ。よしそれに思ひ到つた人はないとしても、精進の心を持つた人間乃至藝術家は、やがては必ずこの宮に安住の地を見出すことになるであらう。泰西の文化を厭ひ、現在の歐米の人とその藝術に先望した私は、今最愛なる日本の何處かに、この森をこの聖堂を建立せんことをひたすらに望んでゐる。そして、この殿堂は——私の目指してゐる法悦境は、日本以外の何れの地にも、開花することの出来ぬ純美な生の花であり、藝術の花であると思ふ。

このことを思ひ付いて以來、私は日夜沈黙の森と法悦の堂との空想に捕はれてゐる。空想ではない。それは一つの秩序だつた計畫であり、事業とさへなつてゐる。私の心には既にその森もその圓天井も出来てゐるのだ。が、私の信仰にも似た熱情は、この宮を單なる心の宮、幻の宮に止めておくことが出来ない。この宮をこの世に築くところを、自分に與へられた生涯の眞實の使命なのではないかとさへ、私は思ひつめてゐる。またまつた基金の調達さへ出来れば、私は直ぐにもその森を捜し、その宮を打ち建てたいと思つてゐる。その宮の經營法をさへ、私は幾度となく考案しなほしてゐる。聖殿さへ建てば、それに詣

でようとするものは、招かずとも集つて来るやうな氣がする。たゞ悲しいことには、かほどの熱を以て希求し、企圖してゐることも、それになくはならぬたつた一つのを缺くために、どうしてもそれを具體的に運んで行く事が出来ない。廣い日本の何處かを捜ねたら、私のこの計畫を理解し援助してくれる金持が必ずあるにちがひないと思ひながら、私は例になく昂奮して、白紙の上に又新しい法悦の宮の縮圖を描いてゐる。

自動車で越す師走

一

世の中には、私より以上の貧乏人がたくさんある筈だと思つてゐたのに、C社では、どうやら私を、名譽ある貧乏人の代表者に選ばれたものらしい。私に師走の懺悔を書けとの御注文である。甚だもつて迷惑千萬な次第だ。

とはいつて見たものの、さてよく考へて見ると、なるほど、平常の私には、尠くとも私が見るところでは貧乏人を代表する資格など、決してありはしない。が、不思議と年末になると、急にお金がなくなつて、貧乏人に轉落して終ふらしい。もしC社が、それに目をつけられたものとする、或は、私を濫費者とも見られたのではあるまいか。懺悔といふからには、平常よほど悪いことをしてゐるらしく聞えるし、濫費といふことは、決して

いいことではないのには違ひないから、さうした意味で、濫費者としての私に懺悔録を書かせようといふのなら、なるほど一應理窟は通るが、さて濫費者と見られたことに對しては、やはり聊か不服でないこともない。

もう一度斷つておくが、私は、もとより私自身を金持だとは思つてゐないが、また、それ程貧乏人だとも思つてゐない。或は藝術運動に携はつてゐる我々仲間のなかでは、私など、むしろ金持の部類に入れられてゐるのだらうと思ふ。が、何しろ、今まで音楽藝術運動の世界で、伊庭孝君の言葉をかりていへば、「不思議なる經濟」の下に、色々の事業を敢行して來た私なので、世の中に出て以來、樂な師走など送つた經驗はない。で、ここ、十五、六年間の師走だけを回顧して見ても、大部の「師走懺悔」が出來ようが、この慌しい節季に、もとよりそんな暇はない。それに古い時代の師走のことなど、考へて見るのも憶劫だ。たゞ、最近の生々しいやつを、一つ開陳して見ようか。

二

それは一九三〇年の秋、私の樂壇生活二十五年祝賀の有難い催しのあつた直後のことである。

二十五年の祝賀を機會に、交響樂運動や、樂劇運動の實際からは、はつきりと手を引いて、少しは落著いて書きものしようと思つた。たしか、十一月の末ごろだつたと思ふ。私は突然、パリから、一通の電報を受取つた。ベノア・オペラ劇團が一九三一年のシーズンに、私を作曲家兼指揮者として招聘したいといふのである。

私は早速いろいろと手だてを盡して、招聘者の身許調べを行つた上、先輩知友などとも相談して、いよいよ招聘に應ずる肚をきめた。そして、一切の問題が確定した後、私の二十五年祝賀演奏會についても、何くれとなく配慮してくれた、東京の各新聞社の方々に、一つにはこの痛快な報知を、先づ第一に耳に入れて、平素の好意に酬むたいといふ氣持もあつたので、たしか、十二月十七日頃だつたと記憶する、銀座のある料亭で小宴を張つて、一伍一什を發表したのであつた。が、その報知を耳にした多くの人々は、どうやら、それが私の既定的な計畫だつたと思つたらしい。

いつたい、私といふ人間は、今まで世間で見られてきたやうな辛辣な手腕家でもなく、策略のある男でもない。しかし、人から見れば、殆んど愚の極とも思はれるやうな努力家、といふよりは、仕事に我武者羅に邁進する性質なので、いつでも、一つの仕事が終りを告げると、いや終りを告げかけると、次から次へと向ふから仕事をもつて来てくれるのである。それが、私自身にすら不思議に思はれるほどなのだから、他人から見れば、計画的に事を運んでゐるやうに思ふのも、無理ではないともいへる。

とにかくかうして、私の渡歐計畫は、十七日ごろの東京各紙に、一齊に發表された。

三

私は今まで、度々海外に行つたことがあるが、いつでもそれは、私の方から出かけて行つたので、もちろん自腹を切つてのことであるが、この時ばかりは、旅費一切先方持の約束である。即ち、パリへの往復一等旅費、滞在費などのほかに、報酬として、最低十萬フ

ランは出さうといふのだ。で、こんな時に糟糠の妻にも、パリ見物をさせてやらうと思つたので、招聘に應じる決心がつくと同時に、早速家内と、一番下の娘のために、旅券の下附を願ひ出ておいたので、計畫が新聞に發表された時には、もう三人分の旅券までが下つてゐたほどだつた。

が、かうして家内までつれて行くとすると、もちろん、それだけの費用は見ておかなければならないし、事務所へのこしてゆく若い人々の生活の保證や、事業から生じた債務の利子と、義母と二人の子供の生活費も用意しておかなければならないし、それに萬一の場合にも備へておかねば、異境で赤恥をかく惧れもあらうと考へたので、出来る限りの手だてをつくして、集められるだけの金を集めたのだつた。幸に永年關係のあるコロムビア蓄音器會社との契約期限が満了する時だつたので、契約更新によつて、何がしかの金を得たのをはじめ、約一萬に近い金を用意して、全く大丈夫といふ見極めがついてから、發表したのだつたが……。

が、新聞に記事が出た翌々日、十二月十九日のことである。京橋にあつた私の事務所も

茅ヶ崎の自宅も、突然ある債権者によつて差押へられてしまつた。

そもそも、この債務といふのは、私の樂劇運動のために生じたもので、普通の債務とは自ら性質を異にしたものではあるし、それに債権者との間にも、十分の諒解があつたので、すつかり安心してゐた私にとつて、この差押へは全く寢耳に水であつた。

私として、理窟はいろいろとあるのではあつたが、封印されて終つたからには、今さらどうすることも出来ない。そして、競賣、競賣といふ聲に脅かされながら、折角集つた一萬近い金を、殆んど全部吐き出して終はねばならなかつた。

四

今でも覚えてゐるのは、その時の先方の辯護士の、全く人間離れのした事務家的活動である。彼は朝から晩までを、殆んど私の事務所で送つたといつてもいい。

ある日のことである。私の知人の一人から、渡歐の餞けとして、一封の金が送り届けられた。使ひの者が恭しく挨拶の言葉を述べて、水引のかゝつた立派な紙包を差出して室を

出て行つたかと思ふと、もうその辯護士はつかつかと、私の傍に近づいて、その紙包の内容を訊ねた。あけて見ると、なかには三百圓の現金が入つてゐたのであつたが、もちろん、その金は、彼氏の強引によつて私のポケットには納まらなかつた。

五

私のつもりでは、私が初めて海外からうけたこの招聘は、もとより自分一個の名譽ではなく、延いては日本樂界への福音であるといはねばならない。で、行く以上は、先方から申出でられたオペラの作曲と上演以外にも出来得る限りの活動をしたいし、それには相當の軍資金も必要なので、なるべく多くの金を残しておきたいと思つたのであつたが、年末が押し迫つた時、差押處分をした以外の債権者に、留守中の諒解を得るにも相當のものを要したし、事務所に働く人々に、漸く心ばかりの餅代を頒つたあとには、何ほどの金も残らなかつた。もう妻子をつれて出かけやうなどとは考へてもゐられない。結局、旅券下附願の印紙代を棒にふるより他はなかつた。

こんな次第で、私の出發は甚しく遅れて、翌年の二月九日に、表面は花々しく東京驛を立つた私だったが、私の氣持は私のふところと正比例して、全く寂しさそのものであった。その時、僅か百圓の現金のみが、途方に暮れて、私のポケットの奥に顔をかくしてゐたとは、誰が信じ得やう。それが内地の旅ならまだしも、五千マイルといふ長途の旅の首途においてだから猶更だ。

つれてゆく筈だった妻には、東京驛頭で「頼む」の一語を残したきり、一錢の金も與へてやることも出来なかつた。私の留守中、全くの無収入の家計をどう切廻してゆくであらうかは、考へてみるだけでも胸が痛かつた。まるで考へなかつたのではない、考へて、考へて、考へ抜いて、結局「頼む」の一語のほかには、何一つ残して行くことが出来なかつたのだ。

六

かうした難局に立つただけに、その年の師走ほど、寒く、痛く、やるせない師走はなか

つた。

西洋では貧乏を狼にたとへる。實際、その年の暮の私は、狼と睨み合ひをつゞけ通しにつゞけて終つたのだ。逃げやうとして逃げられない。後ろを見れば、敵は忽ち背後から躍りかゝつて来るであらう。渾身の精力を二つの眼に集注して、ちいつと、相手の目を見つめる。瞬間でも眼をそらしたなら、それは私の壽命の終りなので……といつた氣持だつた。これはアレゴリーでも何でもない。文字通り私は、狼、即ち債權の代表者たる辯護士某と、日がな一日、事務所で見合つてゐたのだつた。

そんな次第で、私自身、どんなに氣を焦つて見たところで、自分で飛び出して、金策に馳け歩くことは出来なかつた。私のゐる限り、私の事務所を居所ときめてゐた彼氏は、私が外出すれば、必ず、影の形に添ふやうに、私の後に従ふであらう。狼づれで金策に歩いて金の出来る氣遣ひはない。

で私の代りとして、私の支配人K君、副支配人U君、それに會計のY君その他が、足を摺古木にして、東京中を馳け歩いてくれた。その結果をもたらししてくれる場所として、し

かし、私の事務所はもう用をなさなくなつてゐた。事務所はもう猛獣の檻になつてゐただから。

詮方なく、ぐうつと押つまつた暮の二十八日になつて、私は事務所の附近のある旅館に一室を借りて、そこを遺囑事務所とした。茅ヶ崎にゐた妻が上京して、一切の采配をとつてくれた。が、旅館に室を取つたとはいふものゝ、それは決して眠るためのものではなかつた。事實私たち一同は、その日から三晝夜は完全に一睡もせず戦ひ抜いたのだ。

猛獣のやうな某辯護士（但し彼氏は世にも稀に見る美男子だ。そして事務を離れての彼は、全く濃厚そのものともいひ得るヤング・ヂェントルマンだ）の監視を漸く遁れて、私が宿に引揚げてくる頃は、K君、U君、Y君が疲れ切つた身體を引きずるやうにして、出先から歸つて来る時だつた。誰の顔にも、血の氣は見られなかつた。土色をした顔面についてゐる眉や、目や、鼻や、口やは、まるで表情を失つて、ちやうど、辿々しい子供の手で書かれた肖像畫のそのやうに、硬ばり返つてゐた。持ち寄つてくるのは、ただ「絶望」の言葉だけだつた。

それが、三十一日の夕景には、誰の顔にも一樣に血の氣がさして、眉も、目も、口も、微笑に綻びてゐた。輝やかなしい黎明が望み得られたからではない。越されずに越す年の瀬の表情だつたのだ。

それでも、兎に角私は、形ばかりの屠蘇を祝ふべく、自動車で茅ヶ崎に歸ることにした。歸つたのは元旦の午前六時半ごろ、ちようど下りの一番列車と時を同じうしてゐた。なぜ私は安い、暖かい汽車によらず、高い、寒い自動車を選んだか。月末拂ひの利かない鐵道省の交通機關は、その時の私にとつては餘りにも贅澤過ぎたからだ。

七

でも、今になつてその時の事を回想すると、別に大した感想も起らない。私をさうした窮地に追ひ込んだその債權者にしたところが、私は別に憎む氣持にはなれない。そしてその代理である辯護士某氏などに至つては猶更のこと。何故なら、その債權者自身、他からの債務を身に負うて、私同様、差押への憂目を見てゐるばかりでなく、やはり、競賣、競

賣、といふ凄い不可避の武器に脅かされて、青息吐息でゐたのだといふのだから。そして、私の渡歐を紙上で知つて、夥しい収入でもあつたものと獨斷して、それに何といつても、自分自身を救ふために、苦しまされに、私との諒解など打忘れて、切端つまつた手段を取つたに違ひないのだから。或は私の債權者の債權者も、また、他の債權者から追はれてゐなかつたとも限らない。結局馳ごつこである。誰を恨んでいいか、詮索してゐる暇もない。それに、物事はなるやうにしかならない。と同時に、なるやうにはなるものである。現に僅か百圓の金を懐ろにして渡歐の旅に上つた私は、途中大阪に立ち寄つて、その地の知友から過分の餞別を贈られた。それに北の國にゐる友人から下關宛てに電送してくれた額を合せて、關門海峡を横斷する時には、どうやら二千に近いものとなつてゐた。

「たゞ一つ、今でもつくづく感心に堪へないのは、その時の辯護士の、百パーセント辯護士的な態度である。他日私が金持になつて、債權者の立場に立つことがあるならば、その時こそ私は彼氏を招聘して、私の顧問辯護士とするであらう。

作るのが生むのか

假りに私がニュース・ヴァリュエーのある一曲を書き上げたとする。

各新聞の記者諸君が躍り込んで来る。「是非苦心談を」とせがまれる。かうした場合、私はいちばん困る。

音が心耳に聞えて来る。私はそれを書き取るに過ぎないのだ。従つて何の苦心もない。しかし、それかといつて、私は全くの汗の生活なしに創作するのではない、苦心はたしかにある。あるどころの騒ぎではない、まるで苦心だらけなのだ。けれど、それは創作の筆を握つてからではない。毎日の生活においてなのだ。

或る詩人が詩を書き上げる、その書き上げた上に幾回も幾回も、訂正の筆を加へる、餘白がなくなると紙を貼る、更にその上に推敲の筆跡をとどめる、それでもまだ意に満たない、更に新しい紙片が貼附される、その上に疑問符のついた一句が走り書き記される、か

うして凹凸な紙面は傍註の錯綜によつて、平面と立體にその姿を浮ばせる。——これも一つの創作的態度である。

流れた思想に、數回の考察を與へ、あふれ出た詞句に、綿密な吟味を加へること、それはたしかにいゝことに相違ない。しかし、私は、それが絶対にいゝ創作的態度であるかどうかを怪しむ。

かういふ話がある。

有名なドイツの作曲家、ヨハネス・ブラームスのある挿話だ。

ブラームスは非常にユニークをのぞんだ、月並を嫌つた。書くからには、前人未聴の旋律を書きたい。先人未感の節奏を發見したい——かう彼は希つた。そのために、彼の拂つた努力は並大抵のもでなかつた。

一つの旋律を得ると、彼はまづ自分の記憶の各々のページにそれを照し合せて見た。それでも不安を感じたとき、彼は、圖書館に走つた。そして先輩の樂曲を巨細に調べて、自らの旋律の獨自性を確證しようと思つた。

ある日のことである、この獨自性を熱望するブラームスが、天來の妙音に接した。その妙音に陶醉しながら、彼はその旋律を書き留めた。が、やがて平素からの冷靜な調査がはじまつた。

『よし、これこそは自分のはじめて耳にした妙音であつて、既往の誰れもが發見し得なかつた旋律である』——かう彼は斷定し得た。

彼は自己の獨自性に、感嘆驚喜して、それを書き上げた。しかし誠に皮肉なことには、その旋律は既に、彼に先んずる一百年、樂聖モーツァルトの作品中に明かに書き残されてゐるものであつた。彼は失望した、もとよりその原稿は焼却された。——かういふ話を、私は、ベルリンに留學中私の恩師レオポルド・ヴォルフ氏からきいた。

これに對して、私はいま一つの面白い挿話を思ひうかべる。

『椿姫』や『アイーダ』で有名なヴェルディの話だ。或る日ヴェルディは非常な美しい旋律を感じた。彼は早速それを譜面に寫した。そして、友の所へ、雀躍しながら飛び込んで行つた。

子供のやうな無邪氣さをもつて彼はそれを歌ひ、かつ強いて友にその喜びをわかち與へた。そのうちに二人は急に思はず目と目を見合せた。何となくその旋律は、彼にも、友にも一度は聞き覚えのあるやうに思はれたからだ。

思ひ出すのも道理、それはかつて、彼自身が書いた有名な一ふしだったのである。

これはいさゝか忘却の網目をこされ過ぎた例だ。が、この方が私には嬉しく感じられる。いつたいユニークとか、斬新とかいふことは、それ程價值のあるものかしら？

本當にユニークなどいふものがあり得るものかしら。「新しい」といふこと、そのものは、ちやうど『今日』に『明日』がつゞくと同じやうに、新しさも一日たてば、もう明日を迎へ、新しいと誇つたことも、きのふの古さに見捨てられてしまふのではないか。

藝術においてはそれ故、新しいといふこと、ユニークであることは、それ程の重大な問題ではないのではあるまいか。

或は、私の考へ方は、誤つてゐるかも知れない。が、私はいつも音楽を書く場合、かう思ふのだ。——それがユニークでなくとも、それが新しくなくとも、自分で眞であり、自

分の眞でありさへすればいゝのだと。

ブラームスのやうに、如何ほどユニークと斬新さを狙つた所で、耳と目には自ら限られた世界が展開されるのみだ。

さうだ、こんなこともあつた。畏友小山内薫兄——兄は私を文の世界へ引き入れた人である——兄と一緒にドイツで遊學してゐたころなど、私も元氣にまかせてやたらに讀みまくつた。しかし、私は途中でこの癖を斷然捨て去つた。何故ならば、如何程讀んだ所で、世界の萬卷の書を讀了し得るものでない。日々百に餘る新しい書物は地上に發刊される。それをどうして讀み盡し得よう。

私は考へた。多く讀むより一書を深く讀むこと。一書を深く讀むよりも、貧しくとも、自己を眞劍に讀むこと。人の手によつて書かれたものよりも、愚は愚なりに、自己の眼で見た世界を、自己の心の頁に記入すること。それでいゝのだ。ではない。それよりほかに仕方がないのではないか。

この道はあるひは知識の世界において、私に無駄足を踏ませるかも知れない。しかし、

その無駄足すらが、私自身に、何ものかを教へずには置くまい、かう私はひとりぎめした。それ以來、なるだけ讀書しないことにしてゐる。

このことは、しかし、音樂の樂曲に對しても同じことである。私がどのやうに完全なベートーヴェンを暗記しようと、それは私のものとはならない。殊に私が、日本人であるといふこと、この一點に思ひ及ぶとき、私はただ盲目的に先人の作品を讀破し、先人の作品を暗記してをるべきではないと思ふ。それよりも私に對して、有がたくも開かれた日本人としての私の音を書き記し得るよう、生活しなければならぬと思ふのだ。それ故私は、作曲の『作』といふ字すら用ゐたくないやうな氣持ちを持つてゐる。

作るのではない。生活から生むといふのが私の創作上の信條だ。

生むまでの苦心、日一日の精進だ、精勵だ、刮目だ。いささかも油斷のない、全く言語に絶えた、眞剣な生活そのものだ。

うるし屋の店頭に立つ、そこに作曲の種は宿る。列車のW・C。に這入る、そこに靈妙な旋律は聞かれる。人のつま先にも、眼にも、鼻にも、口にも、そして髪の毛の一すぢにす

ら、立派な節奏があるのではないか。私はただそれを、残りなく攝取しようと念じてゐる。

かうした生活において或る一點にぶつかると、丁度ガラス窓の面を傳ふ雨滴のやうに、その力が相寄り、相ふれて一つの玉となつて落ちるのだ。その落ちたる玉が作曲なのだ。

落ちた玉に、どうして、加工出來やう。落ちた玉に知識の衣は、不似合ではあるまいか。

だから私は、創作に對して殆んど苦心といふものを知らない。

繰り返していふ。苦心は平素の生活に在るのだ。しかし、私はいふ。その玉となつて落ちる力を、もし私が完全に受け得ないとするならば、私は自戒しなければならぬ。いや、なかなか完全どころではない、現在の私では、私の内心に聽く聲の八分を書き得れば、むしろ幸ひだとすら思ふ位なのだ。

しかし、私は一生に一回でいふと思ふ。内心に聽く十の十までを残りなく書き留めて見たい。ユニークでもない、斬新でもない、昨日のない、明日のない、永久に『今日』の眞實の聲が書き寫されたら……。

文明と音楽

私は今、現在謂ふ所の西洋音楽といふものを基調として、音楽と文明との關係或ひは交渉に就いて論じて見たいと思ふ。私が何故特に西洋音楽のみを採つたかと云へば、問題が文明と音楽である以上、今日の西洋音楽以外の未開人の音楽はここでは省略し、文明の勢ひに添うて流れて行くことの出来る洋樂のみに就いて論ずる方が適當であると思つたからである。

文明の流れは、これを果實の熟して行く態に喩へることが出来よう、即ち、文明は一定の核内に封ぜられた細胞が各方面に分裂して、核の内部に漲り溢れて行く力の如きものはあるまいか。それは又小兒の内部に絶えず、強く作用してゐる生長の力に比することが出来るであらう。文明は感情によつて發し、意によつて動き、智によつて歩むものである。リズムの直射である感情は、文明に誕生を與へたと同時に、意志と理智によつて進化して

行くその流れに、新しい滋味と刺戟とを與へた原動力であるといはねばならない。

然るに長年月の曲折を経て、廿世紀の今日に流れ着いた文明は、外見的には如何にも立派なものとなつたけれども、あまりに現實に即した智と意とに頼り過ぎた結果、却つてその壯麗な形骸に捕はれて、成長の要素である感情の匂ひや潤ひを缺いたものとなつてしまつた。今日に於ては、形骸を築いて行くに必要な理智の力を、殆んど至上のものとして仰ぐばかりで、その智に力を與へた意志や、凡ての根源に位する感情などは顧みようとしなない。

ここで私は、ドイツ留學時代のある挿話を思ひ起す。私は音楽研究に必要な高等數學に就いての知識を得るため、ある大學教授のもとに通つてゐた。教授は「少年よ、こどもよ」といつて心から私を可愛がつて下すつた。その先生の部屋に或る日入つて行くと、先生は大きい机に眩ついて重い顔を上げようとしなない。歩み寄つて私は「先生どうかなさいましたか。」と御機嫌をうかがつてみた。すると教授は急に私の方を振り返つて、その温顔に涙をたゝへながら、堅く私の手を握りしめて、そして悲痛な聲調で云はれるには、

『愛する子供よ、お前は藝術家だから仕合せだ。悲しいことには自分は藝術家ではなか

つた。現在の自分の失意も失敗も、因するところは自分が科學者に生れて來たことにあるのだ。」と。

教授の語るところによると、教授は十五年前からある星の運行を計算してをられた。全く、その部屋にありあふ凡てのものには、所嫌はず細い數字が書きつめられてある。然るに教授はいはゆる藝術家でなかつたため、十五年前に二つ出た道の何れを選んでいゝかを直感することが出来なかつた。迷ひぬいた末選んだ道の一つが、不幸にして誤つたものであつたため、教授は十五年間の努力を空費せねばならなかつた。

「科學の究極は藝術の足に結ばれてゐる。科學の歩みを導くものは純粹な直感の光り以外のなものでもない。こどもよ、お前は藝術家の力を恵まれてゐる、お前に恵まれてゐる感情の力でもし私に與へられてゐたら、私は十五年の歳月を空しい誤算の爲めに、失はないですんだであらうに——」

が、私の先生は、理智の力を過信し、その力の圈内に溺れきつてゐる大多數の科學者から、數歩をぬきんでた學者だつたと思ふ。理智のみのものであるかの如き科學すら、究極

において感情の足下に助けを求めねばなくなる。科學によつて築かれ、科學萬能の思想の浸潤を受けた現代の文明なるものも、感情をおろそかにしては永續的に進化することの出来ないのは勿論のことである。

藝術の主體とするところのものは、感情以外のなものでもない。藝術の中でもこの感情を最も純粹な形に於いて表現するものは音樂である。一見文明の裝飾品にすぎないやうに思はれる藝術はそれがより多く純眞な感情から發してゐる點において、物質文明、科學的文明から數歩を先じてゐるものだといふことが出来る。音樂は、物象の世界から遠い所にある、現實生活とは交渉の薄い別な境地にあるかの如くに思はれてゐるが、それが感情の最も直接的な、純粹なあらはれであるため、實際においては他の姉妹藝術の上に立つて、人間の感情を、生活を、文明を、よりよい状態へと導き登らしめる先導となり、豫言者の役を勤むべきものである。

人は音樂を、文明のツマの如きものだといふ。なるほど文明の榮える所には、音樂の匂ひもまた美しく立ち昇る。我々は決して刺身に於けるツマの價値を知らないではない。し

かしながら音楽は決して文明の附加物ではなく、文明の進路を示す燈火であるといふことを、ここに繰り返して述べたい。史上に生み出された多くの作品の中には、屢々その作曲せられた時から、數年或ひは數十年後のことが明確に暗示せられてゐる。ストラヴィンスキーは既に十數年前、今日の露西亞の渾沌状態をその音楽の中に描いてゐた。これを藝術界に見ても、最近現れた象徴主義や表現主義の主張するところは、既にずつと以前から作曲者の用ゐてゐた手法の敷衍と見ることが出来る。かう云へばとて、私は音楽が文明から受けてゐる恩恵を無視してゐるものではない。音楽は豫言者として、文明を先導して來たと同時に、理智の果實である科學的文化の爲めに、どれだけの便宜を與へられたかしない。今日のいはゆる洋樂、殊に複雑な器樂や、器樂の合體である管絃樂の發達は、近世科學の助力に負ふところが少くないのであるが、この立場から見ると近代音樂は科學的思想の侵害を受けて、誤つた道に踏み迷つてゐるやうに思はれる。即ち純美な感情の象徴的表現であるべき音樂が、理智の所産である形式や結構に囚はれて、内容の空虚な殿堂の如きものにならうとする傾向が生じて來た。ドイツ音樂などはその最も代表的なものであ

る。私はかうした科學の力の侵害を受けた音樂を眞實の藝術と見ることが出来ないと思はれる。その科學の力の築き上げた現在の理智のみの文明を健全な文明と思ふことが出来ない。藝術、殊に音樂がさうであらねばならない如く、文明もまた情意の渾然たる一體でなければならぬ。

それ故、私は、現在の世界に覇權を握つてゐる西歐の文明が眞實の文明であるとは思へない。同時に、私は理智のドイツ音樂をも、情の行く勢ひにまかせた、奔放なフランス音樂をも眞實の音樂と呼ぶことを躊躇せずには居られない。簡単に云へば私は、歐米の何處にも、私の考へてゐるやうな文明や音樂を見出すことが出来ないのである。たゞ僅かに例外として光つてゐる藝術の國は音樂の發達に多くのよい種を蒔き、刺戟を與へたネザールランドである。そしてネザールランドの國民性には日本の國民性と共通な分子が多分に含まれてゐることを忘れてはならない。

私は今まで機會のある毎に、ネザールランドの優れた國民性とその拔ん出た藝術的素質に就いて論じて來た。またその日本との共通點から、推して、ネザールランドに芽ぐんでゐる

やうな健全典雅な藝術が、やがて日本に生れるのではないかといふ豫感も所々に言表して来た。それ故私は今ここでさうした細い點に論及する煩を避けたいと思ふ。異邦を彷徨ひ歩いてその文明に失望し、又文明と不可離の關係ある音樂の研究を志しながら、憧れて行つた歐米のそれに幻滅の悲哀を感じなければならなかつた私は、自分の眼を再び日本の内地に向けて、この地にこそ、この民の中にこそ、文明の先導となるべき眞の音樂が生れるのではないか、また音樂の燈火に導かれながら、その光りに油を注ぐべき眞の文明が呱呱の聲をあげようとしてゐるのではないかと思はれずにはゐられない。

作曲における詩文と散文

音を外にして表現の術のない、煮つめられた感情と思想との、象徴的表現である音樂は、本來詩的であるべきものである。また、バッハ、モーツァルトの如き古聖の作品は、一見端正な形式そのものゝやうでありながら、その形式の奥に過分な詩的内容を藏してゐたのであつた。然るに、バッハ時代の純音樂が、伊太利歌劇の影響を受け、その王座の半ばを文學に割愛し始めた頃から、音それ自身の中に匂つてゐた對位的、彫刻的な深さと、清澄な詩情とが次第に失はれて、メンデルスゾーン、グルックに到つては、オペラの形式に媚び、その歌詞に拘泥して、全體としての音樂は、歌詞に伴ふ單線的旋律の附加物か、裝飾物の如きものとなり、旋律以外の音はそれ自身として何らの意味も個性もない、點的——即ち刹那的配合となつてしまつたのである。殊に近代管絃樂の發達が、内容の貧弱を顧ることなく、徒らに外廓の壯偉を誇る傾向を加へて來たため、グルック以後最近までの歴史を通

じて、殆んど悉くの作曲者は多かれ少かれ、この散文化の勢に犯されて来た。私は今ここにいふ詩文的作曲とは如何なるものであり、散文的作曲とは何ものを指すかといふことを明かにした上、史上の樂人の誰が何れの部類に入るべきかを考察して見たいと思ふ。

まづ第一に、詩文的作曲の特徴とするところは、それが立體的、彫刻的、對位的であるといふことにある。これに反して散文的作曲は平面的、繪畫的、和聲的である。バッハから飛んでシトラウス、ラクマニーノフ等は、彫刻的、對位的な點に於いて詩的作曲家と呼ばれるべきであらう。詩情のゆたかな作曲家と公認せられてゐるショパンとシューベルトは至純な境地を持つてはゐるが、詩文的作曲家であつたとはいふことが出来ぬ。彼らは詩文的作曲の特徴とする立體的、彫刻的表現の代りに、純美であるけれども、平面的な繪畫的な手法を用ゐた點において、散文的作曲家の中に數へらるべきである。たゞショパンは、ピアノにピアノ以外の——ピアノ圏外の音響を與へようとする作曲家の多い中で、よくピアノの本性を知り、ピアノの中に立て籠つてその詩情を吐露した點において、またシューベルトにおいては痴に近い稚情を稚のまゝに美しく保つてゐた點において、他の散文的作

曲家からは一步を先んじてゐたといふべきである。

散文的作曲が單線的であるに反して、詩文的作曲は複線的である。言ひ換れば前者に於いては主要な旋律に隸屬してゐた附隨的部分が、後者においては、それ自身に於いて獨立した個性のあるいくつもの線をなしてゐて、その何れを主とも分ちがたいのである。その自然の結果として、前者の内部には單點的牽引力しか働き得ないに反し、後者の内部には絶えず多點的な、従つて前者に比すべくもない深酷な、力強い必然的牽引が、複雑に動いてゐる。單線的作曲の代表的なるものは、メンデルスゾーンとシューベルトである。ブラームスは複線的にして象徴的分子をもつた散文的作曲家だつたが、その生れた時代が時代であつたため、形式化、散文化、巨大化の潮流に染まねばならなかつたのである。

最後に詩文的作曲の條件とするところは、暗示的、象徴的、表現的であるといふことである。それと反對に、説明的、反射的、寫實的な感じのあるものは、散文的作曲であるといふことが出来る。ベートーヴェン、ヴァーグナー、チャイコフスキー等の作品は、説明と反射との間を行くものであらう。ロスキニ、ヴェルディ等は寫實的な散文家である。暗示と

象徴の間を行く詩文的作曲家にクロード・ドビュッシーがある。そして最後に、象徴的表現を全うした音楽の聖者は、アレクサンダー・スクリャービンの楽風に就いては既に『音楽讀本』の中に詳説した。彼はバッハに於いては端正な形式の中にほのみえてゐた音の詩、音の思想、音の宗教、哲學を、近代的な交響樂の整然たる形式の内部に旺盛せしめた點において、何といつても近代音楽の究極に据ゑらるべき樂聖であつた。彼において音楽は、その表現し得る至高、至聖の美しい靈光を輝き出さしむるに到つたのである。

眼を内に轉じて我が國の音楽の過去と現在とを見比べてみる。日本音楽は純粹な線の音楽である。旋律の音楽である。非和聲的な音楽である。かうした單線的な發達は、單一を基礎とし、また一の下に凡てを治めようとした鎖國的な行政方針が知らず識らずの中に音を通して表れた結果と見ることが出来るであらう。然るに日本は遂に世界に眼を開いた。日本は政治にも、民衆思想の上にも、歐米の感化を受け、積極的に歐米の文化を攝取せねばならなかつた。その結果として、一元的であつた政治方針や民衆思想は、近來著しく多

元的、個別的になつて來た。日本人が音楽に於いても、單線的な行き方だけに満足するところが出来なくなつたのは、自然の勢である。

由來日本人は物真似の好きな、又上手な國である。單線的な音楽に物足りなくなつた日本人は、近來盛んに、洋樂の形を學び、在來の單線に多くの點を配して、それを洋樂化、近代化しようとしてゐる。若し舊來の日本音楽の線の流れをバッハ時代の純音楽に比するならば、現在の日本音楽は、純音楽の詩味が文學に毒されて、單線に和聲の散文的背景を附したメンデルスゾーンの散文化時代にあるといふことが出来るのであらう。しかしながらバッハの流れはメンデルスゾーンに移つたのではない。爾來長らくの間、散文化の潮流の底に隠れ、數世紀の後スクリャービンによつて俄然驚くべき結晶體となつて現れたのである。日本音楽の純な線の流れは、散文化の惡潮に染むべきではない。それは複線的、對位的發達を遂げることによつて、詩文的作曲の極である、暗示的、象徴的表現とならなければならぬのである。

終りに歌謡作曲における散文と詩文との分岐點に就いて一言しておく。音楽が思想の象

徴的表現であると等しく、詩は詩想の象徴的表現である。従つて文字を借りた詩想のあらはれである詩句といふものは、詩想の一面の象徴化せられたものだといはなければならぬ。それ故、眞實の詩の作曲に際して、言葉の面に寫つてゐるもののみを音楽に翻譯するのは、本來立體的、象徴的なものである詩を、強ひて平面化、散文化してしまふことにならぬ。ちやうど水流の表面のみを見て、大きく、深く流れて行く水を、固い、奥行ない鏡のやうに考へると同じである。然しながら詩を詩的に作曲し得るものは、詩の持つてゐる詩想を、單なる詞句以上に深く洞察し得るものでなければならぬ。詩人が言葉の約束に縛られて詞句の中には表現することの出来なかつた思想を剝り出して音に盛つたものこそ、眞の詩的、藝術的歌謡であるといはねばならぬ。歌謡の作曲に際して單なる旋律以外に伴奏を必要とするのは、全く詩句以外の詩想と思想との融合した藝術境を彷彿せしめんがためである。かうして作り上げられた歌謡は單なる詩以上の、また音楽以上の新しい特殊な藝術的價值を持つてゐるといふことが出来るであらう。

以上で私は、いふところの散文的作曲と詩文的作曲のいかなるものであるかといふこと

を、やゝ明かになし得た事と思ふ。私は藝術の中核にあるものは、渾然たる言語に絶した詩想であり、藝術の最高におくべきものは、この詩想の象徴的代表であると思つてゐる。この意味に於いて、私は、藝術と呼ばれるもの凡ては象徴的表現でなければならぬと斷言することが出来る。文字の藝術の中で最も象徴的表現なるものは詩である。音楽はそれが藝術である限り、象徴的表現以外の何ものでもない。この二者が相融合してそこに築き上げる新たな詩境は、あるひは、藝術の最高位に置かるべきものであるかもしれない。私は、古來、歌を愛で、枯淡な茶趣や俳味に養はれて來た日本は、今後の藝術界に眞のいゝ詩を生む國ではないかと思ふ。同時に、よい單線の流れをもつてゐる日本音楽も、やがて新たな形に於いて、純美な音の詩を生み出すのではないかと思ふ。この二つのものが、相接近し、相合して流れて行く水流の末に、私は、壯重偉大な海の歌が、もう永遠の序曲を奏でてゐるのを聞くやうな氣がする。

童謡の作曲について

童謡には二つのあらはれがある。その一つは藝術的童謡で、他の一つは遊戯的童謡とでもよぶべきものである。藝術的童謡とは、大人が直感した——或ひは大人の内部に潜在してゐた童心が、自發的に流れ出て歌となつたものであり、遊戯的童謡はこれに反して、兒童の表面に浮動してゐる戯心を、大人が自己流の鏡に反射したものに過ぎない。

そんなら、いつたい、童心とは何を指すのであらうか。いふまでもなく、純真な子供心のことである。純真な子供の心は、何らの對象を念慮の中におくことなく、純粹な自發的動機から、たゞそれ自身の爲に動き、それ自身の爲にあらはれるものである。だから子供は眞の藝術家であるといふことも出来よう。そして、この子供の心を持つた作曲者が、何らの、技巧のための技巧なく、意圖なしに生んだ歌謡こそは、そのままに子供の藝術的地を表現する、眞の藝術的童謡であるにちがひない。

童心を持つてゐない——或ひは童心を掴むことの出来ない作曲家は、前に一言したやうに、自分をうつろな鏡として、それに映つた子供の皮相的な外觀を子供の本體と見誤り、根のない上面のたはむれをそのまま反射して、生來の藝術家である子供の生活を強ひて非藝術的なものゝ如くに再現する。ちやうど深い流れの水面に浮動する影のみを捕へようとして、その流れの奥にひそむ深さとか、力とかをはかることが出来ないやうなものである。かうした戯心から出た童謡の多くは、單に子供をいらだたせるばかりで、子供の心を眞に幸福にする力を持つてゐない。一見輕快で、いかにも面白さうに見えても、子供はついでに拍子に乗せられはしても、心からその歌を味ひ楽しむと云ふ心の状態を導き出すことは出来ないだらう。刺戟にはすみ上つた心理状態は、幸福に味ひ楽しむ氣持から、かなりかけ離れたものだといはねばなるまい。残念なことに現在行はれてゐる童謡の大多數は、このたはむれどころから跳り出た非藝術的な遊戯的童謡である。かうした音楽は、愚かな母が泣く子をすかすため、抱き上げてやたらに左右に振り廻したり、刺戟性の強い玩具の雑音によつて子供の神経を一時痲痺させるのと同様に、技巧的、刺戟的音楽によつて、子供

の心を局部的陶酔、或ひは痲痺の状態に誘ふ傾向がある。かうした痲痺陶酔は決して健全なものでなく、神経の末端を擽ることによつて、兒童を病的にし、神経質にする。かうした童謡は、酒や阿片の酔夢に倦きて獸の粗毛を皮膚に突き刺したり、針の尖端を間斷なく胸に刺しこんで特異な快感を楽しむ癩廢人の病根を、無垢な幼兒の美しい心に植ゑつけるやうなもので、子供の身心の發育の爲、どんな妨げとなり、災となるかもしれない。

私の謂ふ藝術的童謡、即ち眞の童心から生れた童謡は、上述の遊戯的童謡とは全然その趣きを異にしてゐる。遊戯的童謡に於いては、言葉の用法も、リズムの取り方も、子供の神経の一端を刺戟し、その心の一面をそよのかし、あやつるものゝやうであるが、眞の童謡は眞實に子供そのものと呼吸を合せ、子供と一つ生活を營むことによつて、大人の體得した童心から溢れ出て來た歌でなければならぬ。即ち、それは子供に作用して、子供の心の全部に觸れ、子供を全的に悦ばせ、子供の藝術心を健全に、幸福に生ひ立たせるものでなければならぬのである。が、ここに一言しておかねばならないのは、藝術的童謡が童心のあらはれでなければならぬといふことは、必ずしも大人が子供になりきつてしまは

なければならぬといふ意味ではないといふことである。従つて稚拙な子供の世界に下つて行つて、子供の用語や表現法をそのまま眞似るといふことが、眞の童謡を生むことにならないといふことである。子供それ自身が素晴らしい勢ひで成長しつゝあるものであつてみれば、その子供と呼吸を合せ、生活を共にする大人の童心は、その瞬間の子供の心の單なる移入であつてはならない。それは大人の心に入り、生活に入つて、當然成長進化し、洗練せらるべきものであると思ふ。即ち、大人は子供の心を自分のものとすると同時に、その心のやがて行き着くべき境地を明確に豫知し、不斷に進化しつゝある子供の心を、完璧な形において表現せねばならぬ。子供の用ゐてゐる言葉や、その持つてゐるリズムの單なる反射は、決して子供の本體に觸れたものでもなく、また子供に眞の喜悅を與へる力を持つてゐないのである。

然しながら大人の内部に溶け入り、ふるひをかけられ、磨きをかけられて後表現せられた、私の所謂藝術的童謡は、あまりに高尚整美であるため、原始的、獨創的な、そして稚拙な子供の心に觸れる點が少いことになりはしまいかといふ疑問も發し得られよう。が、

眞に子供の核心に觸れた藝術的童謡は、たとひ兒童が、完全に理解し得る面は狭いにして、兒童は兒童なりの直感によつて、ある程度の深さまでその藝術的内容をかなりの確に感知することが出来るにちがひない。童謡が兒童の現狀に媚びる場合には、兒童に瞬間的亢奮状態を導き出すことは出来ても、それは何らの永續性も、暗示性も、成長の可能性も持つてゐないものであるため、次の刹那にはあとかたもなく消え失せてしまふであらう。これに反して私の所謂藝術的童謡は、現在の子供の心に對しては、不可解な分子を持つてゐるにしても、子供をその行き着くべき境地に導く自然の道しるべとなる教化の力を包含してゐるものだといふ事が出来ると思ふ。

かつてドイツから歸朝の途次、シベリア横斷の列車中、ドイツ語も英語も通じないので、露獨の會話の本を出して藥が欲しいと云ふ所を指し示してみたことがあるが、誰につきつけても一樣に、『ニエ、パニマエー』といぶかしげな顔をするばかりで、私の要求は一向に通じないことがあつた。おしまひには『ニエ、パニマエー』とは『藥が欲しい』といふ意味の露語なのかしらと思つたりしたが、あとで知つたところによると、同乗の下層民は目

に一文字もない人達であつたため、私の指した文字を読む事が出来ないで、『ニエ、パニマエー(解りません)』と答へたらしかつたのである。同様の誤解が、童心を童謡に翻譯する場合にも生じ得ないとはいへまい。即ち、子供の皮相な觀察と、その生活の外觀の反射から生れた童謡は、一見いかにも子供を語り得たやうでありながら、『ニエ、パニマエー』を『藥を飲みたい』と思ひちがへて、見當違ひな早合點をしてゐるやうなあらはれを見せてをりはしないであらうか。私のこの意味においても、童心の的確な表現としての藝術的童謡を、兒童のたはむれ心の反映である遊戯的童謡から、判然區別したいと思つてゐる。

指揮について

最近に到つて急に所々の學校の中に、學生音樂團、合唱團、管絃樂團などが起り、盛に方々で演奏しつゝあるやうである。これは一方音樂の普及、或ひは民衆化の現象の一つとも見ることが出来るであらうが、また他面において、日本の若い人達が從來の獨唱乃至獨奏といふものだけに満足してゐることが出来ず、合唱或ひは合奏といふ一段進んだ境地に登らうとしつゝある傾向を示してゐるやうにも思はれる。合唱や合奏になくてならぬものは指揮者である。それ故一つの合唱なり合奏なりを行ふためには、何人かゞ指揮の任に當らなければならぬことになる。言ひ換へれば、日本の樂界には合唱や合奏が盛に行はれるだけ、それだけ多くの人々が指揮棒^{バトン}を振ることになつたのである。

これを史上にたづねてみると、現在の日本は、イタリー音樂がツェンバロ(ピアノ)の原形の如き一種の樂器、指揮者は此の樂器に向ひながら指揮する習慣だつた。を棄てて、バトンを手にし始めた時代と同じやうな状態にある。即ち、日本は從來それのみ親しんで来た、それ自身においては命のない樂器の獨奏から一步踏み出して、生きた人間の有機的合奏から成る合唱や管絃樂の境地に入らうとしてゐるのである。が、私は現在輩出しつゝある謂ふ所の指揮者の多くが、餘りに指揮といふことを軽く見て、何らの準備も確信もなしにバトンを取り上げようとするのを怖れ、同時に嘆かすにはゐられない。

箸に等しい棒一本で、規模の大きな生ける樂器に完全な統一を與へ、なほその上にもゆたかな藝術味を出さうために、指揮者は、獨奏或ひは獨唱者や、合奏或ひは合唱に加はる個々の樂人の思ひもよらぬ勞苦を忍ばねばならぬ。十分な藝術的理解と樂理的知識と、時代によつて軌を一にしてゐないオーナメンテーション等の正確、完全な體得が、指揮するものに必要なものとよりのことである。

合唱、合奏の指揮は、單なる拍子取りとは全然違つたもので、指揮者は指揮棒の尖端で生きた龐大な樂器を鳴り出させるといふ點からは、指揮者自身が一種の演奏者であるともいふことが出来るし、既にある樂器に正しい、而かも新しい自分の解釋を加へ、總譜に表

れた約束をくぐつて、巧みに自己を表現するといふ意味からは、劇における、また戯曲に對する舞臺監督と同じく、隠れた、しかも重要な存在だといふことが出来るであらう。

眞のよき指揮者は、知・情・意の完全に融合した力のある藝術家でなければならぬ。知識の缺けたところに完全な指揮のあり得ないのは自明の理である。又一つの大がかりな樂團を率ゐ、その演奏を成立せしめるためには、異常の意力の必要なのはいふまでもない。が、まだその上にも指揮者は、溢れるやうな熱情と愛とを持つてゐなければならぬ。指揮とは命令の意ではない。バトンには個々のパートを呼び覺す爲めにのみ動かさるべきものでない。指揮棒はそのまゝに指揮者のハートの結晶である。それ故指揮棒は指揮者の熱を各々の樂人に乗り移らせる一つのメディアムであるといふことが出来る。しかも、命令であつてはならぬ。指揮においては指揮者の熱によつて一時個々の樂人を催眠せしめて、指揮者の意のまゝに動かしむるのではなく、個々人を各自の自己に目覺めさせ、自發的に各々の心の流れを流れ出でさせ、個性を持つたその一つ一つの音を、微妙に調和せしめ、融合せしめ、そこに完全な外見を保ち、高調した心の熱をみなぎらせた演奏を完うさせなければならぬ。

らないのである。かくして成立した演奏は、個々人の演奏であつて、同時に渾然たる一つの樂團の演奏であり、また指揮者の理想にかなうた指揮者自身の演奏ともなるのである。

殆んど批評の言を差し挟む餘地のないまでに完備した知と意の力を持ちながら、ただ一つのものを缺いた指揮者にストコフスキーがある。いふまでもなく、ストコフスキーは北米合衆國に比類のないフィラデルフィア・オーケストラの指揮者であつた。或ひは、この管絃樂團をして全米樂團の上に立たしめたもの、また立たしめつゝあるものはストコフスキーだといふことが出来るかもしれない。が、かほどの優れた音樂者であり、指揮者であるのにも拘らず、ストコフスキーは藝術を藝術たらしめる根源の力である愛と熱情とを持つてゐないために、その驚くべき理解力を以てしても、演奏そのものによつて聽者を恍惚の境に導くことが出来ない。彼の指揮は、磨きあげた象牙細工のやうである。それは巧妙であり、美しくはあるけれども、その肌觸りがいかにも冷くてよそ／＼しい。

ストコフスキーの缺いてゐるものを多分に恵まれてゐるのは、私の最も敬愛するリヒャルト・シトラウスである。かつてドイツ留學中も、私はどの位シトラウスの演奏に感激し、

その指揮から間接にどれだけの教へを受けたかしのれない。後年アメリカでゆくりなくも彼にめぐりあひ、彼に對する愛慕と感激の情を新たにしたことであつたが、殊に彼の指揮したオーケストラがフィラデルフィア・オーケストラであつた爲、一層明かにストコフスキの指揮と彼のそれとを比較することが出来た。その時には折悪しく、この樂團の要所に置かれた名手が尠からず缺席してゐたにも拘はらず、全體としてのこの樂團は、ストコフスキの指揮に於いては見ることの出来なかつた血と熱に湧き立つて來た。たいていの場合は冷血動物のやうに、涙腺を凍らせてゐる私も、この時ばかりは涙してシトラウスに頭を下げなければならなかつた。

音樂に對する理解と、樂團を率ゐ、演奏を成立せしめる技倆——即ち意力とは、かりにもバトンを手にするものゝ常識的に具有してゐなければならぬものである。この知と意を情熱で包み溶かしたものでなければ完全な指揮は行ふことが出来ない。私は日本に合唱乃至合奏の要求の燃え上つて來たのを、我が國の樂界の爲に非常に嬉しく思ふ。が如何に必要に迫られればとて、この常識的資格への準備の一階段をさへ踏み越え得ないでゐるもの

が、大膽にも堂々指揮臺に登つて棒を振ることは、嘆かすに在られない。

かつて歐米漫遊の道すがら、パリの音樂院で學生が代々々々指揮臺に登つては、同窓生の管絃演奏の指揮をしてゐるのを目にして、羨しく思つた事がある。指揮そのものゝ専門的研究が日本に行はれるやうになるのはいつの事だらうと、その時には前途の遼遠をはかなんだりしたが、最近に於ける合唱合奏の勃興から推して考へてみると、指揮研究の必要は意外に迫つてゐるやうな氣がする。私は、誰でも彼でもバトンを取り上げる前に、先づ自らの力を反省して、眞面目に根柢のある研鑽を積まれんことを心から希望する。知と意のみの指揮者が完全でないより以上に、熱のみの指揮者には始末にをへぬ狂人が多いものである。そして、さうした熱狂的な指揮者は棒は振り廻してゐても眞實に指揮してゐるのではない。指揮してゐるのでないものを指揮者と呼ぶことがどうして出来よう。指揮のない所に、統一した合奏或ひは合唱の行はれる筈はない。それ故、上述のやうな指揮者でない指揮者は、狂人と呼ばれることに對して憤る資格がないばかりでなく、その指揮棒の下に參集する個々の樂人を音樂的に殺すといふ恐ろしい罪科から免れることが出来ないであ

らう。

日本の作曲者に

異邦と外來物に對する畏敬と、崇拜歡美との舞踏病的狂熱の醒めた後、外にあつたものを内に探し、外に見出し得なかつたものを内部から生み出さうとするのは、新興國民の一般的心理である。外來物崇拜の反動とも見るべき排外思想は、國粹保存の聲となり、一旦撒き棄てた古物の收拾となつて、その國の獨立と威嚴を誇示しようとする。

北米合衆國の住民は、新大陸の開拓と建國の業が終ると同時に、移住以來棄てゝ顧みなかつた藝術、殊に音樂に對する飢渴を覺え始めた。勿論歐洲大戰も重要な一つの原因となつてはゐるであらうが、彼等はその財力を利用して、出來得る限り多くの世界的音樂者を聘し、それらの人達を出來得る限り厚く遇さうとした。アメリカほど外來の音樂者を欵待する國はない。アメリカほど完全に音樂的設備の整つてゐる所はない。が、外來のもの、少くともその國の衷心から湧き出たものでない音樂を尊重するといふ事實は、アメリカが

まだアメリカ自身の音楽を持つてゐないといふことを物語つてゐる。従つて、それは、如何に鄭重なもてなしを受けてゐるからといつて、アメリカ人本然の欲求を充足せしむるなものかを缺いてゐる。

最近においてアメリカは、著しく自國の内部に自國の藝術を求め、傾向を見せ始めた。彼等はその富にまかせて、音楽の胚種をアメリカ自身の國に探し、探しあてた音楽者、殊に作曲者を心の限り愛撫した。が、あまりに多くのパトロンの、あせり氣味な後援は、徒らにアメリカ音楽の叫びを自國人の中に高めたばかりで、その叫聲にふさはしいだけの藝術的内容を見せることが出来なかつた。

いつたい音楽は他の諸藝術と等しく、自然の春の氣を受けて開花すべきもので、まだ春の來ぬうち強ひて温室の中で咲かせた花は、決して眞實の美も力も、芳香も持つてゐるものではない。それは一時美しく見ることがあつても、他の凡ての植物が健全に、幸福に蕾を解くべき春の來る頃には、見るかげもなく枯れ凋んでしまふにちがひない。現在のアメリカ音楽がまさにさうである。富豪や民衆の作曲擁護の結果は、無数のアメリカ作曲家の輩

出を見ることになり、彼等は單にアメリカの土から生れたといふことのために、世界の音楽的水準から見たら、凡庸の謗りを免れがたいやうな作品を、堂々とプログラムに載せることが出来、單にそれがアメリカの作曲者の手に成つたものである爲に、愛國的讚辭をかち得て、一躍天才の稱を得ることになるのである。かうした天才の後援會主催の下に、幾多の作品發表會が、季節の單調を破つて開催される。また多くの獨唱者は、アメリカの聴衆に媚び、よき世評を得んが爲、そのプログラムの最後にアメリカの歌を加へるのを常例としてゐる。新しい作曲家の方では又、出版業者と結託して、獨唱者の提灯を持つといふ交換條件の下に、強ひてそのプログラムの中に自分の作品を入れてもらふ。かうした營業策、出世策、賣名策の間に採まれて世の中に送り出された作品にいゝものゝあらう筈はない。アメリカ人は今、かうした凡庸作家の洪水に溺れて、正しい藝術評價の眼をねむらされてゐる。

——アメリカ音楽なるが故の特別待遇を棄て、眞實自然な藝術の春に目覺めさせなければアメリカ音楽の前途には遠からず悲しむべき凋落と破滅とが襲うて來るにちがひない。